

SOLEIL

～咲き誇る太陽～

いゆ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、響鬼、カブト、電王、キバ、ディケイド、ダブル、オーズ、フォーゼ、ウィザード、鎧武、ドライブ、ゴースト、エグゼイド、ビルド、ジオウ…

澤谷薔薇は仮面ライダーを観て育ってきた引きこもりの女性だ。いつものように大好きな仮面ライダーを観ていたら、どこかから小包がとどく。そこに入っていたのは、薔薇がまだ知らない仮面ライダーらしきもののベルトだった。それはしゃべりだし、いろいろな姿に変身する。薔薇と一緒に異世界、現実世界を守るために冒険する。

この作品は作者オリジナルの仮面ライダー作品です。それが嫌な方はブラウザバック超推奨です。覚悟してご覧ください。

目次

| | |
|-------------|----|
| 引きこもりの薔薇 | 1 |
| 仮面ライダーの薔薇 | 5 |
| 夢見がちの太陽 | 9 |
| 二人目のラフレル | 13 |
| ソレイユの敗北 | 17 |
| 仮面ライダーのカニバル | 21 |
| 偽物のソレイユ偏 | |
| ソレイユの友達 | 26 |
| Mの活躍 | 30 |
| 蒲公英のソレイユ | 33 |
| 敵のレグルス | 37 |

| | |
|-------------|----|
| ミラの兄 | 40 |
| 偽物のソレイユ | 44 |
| 兄の誘い | 48 |
| 兄との闘い | 52 |
| 兄の決心 | 56 |
| ナイトメアの登場 | 60 |
| フラーワの世界偏 | |
| 敵のナイトメア | 66 |
| 南の都市 センニブル | |
| 大海原でのソレイユ | 71 |
| 船上の戦い | 75 |
| ブラックのソレイユ | 80 |
| フラーワ世界のあらすじ | 84 |

| | |
|------------|-----|
| ソレイユの真実 | 87 |
| ナイトメアとの闘い | 90 |
| 仮面ライダーのひなた | 94 |
| サンとの闘い | 97 |
| サンとソレイユの戦い | 101 |
| ミラの秘密 | 105 |
| 北国 シルヴァン地方 | |
| 北国への移動 | 109 |
| ミラの暴走 | 116 |
| マツドとの闘い | 123 |
| ナイトメアの悪巧み | 131 |
| ミラの復活 | 137 |
| ナイトメアのアジト | 144 |

| | |
|---------------|-----|
| 我らの土地 地球偏 | |
| 戦争の始まり | 148 |
| 裂羅の強化フォーム | 155 |
| 廃墟の東京 | 162 |
| コットンローズのナイトメア | 169 |
| 湊敬一の復活 | 176 |
| ナイトメアのフォーム | 182 |
| レグルスの仲間 | 189 |
| 日常のソレイユ | 196 |
| 最後の戦い | 204 |
| ラフレルの復活 | 211 |
| ソレイユの敗北？ | 218 |
| ソレイユのガーデン | 225 |

愛のライダー | 231

なかなか粋の計らい | 238

物語のおしまい | 245

最終回 薔薇のその後 | 第0話 | 254

EN | OP | 254

引きこもりの薔薇

「変身!!」

私だって、こう言いたかった。私も、変身して敵と戦いたかった。

でも、仮面ライダーなんて存在しない。最新の映画では存在すると言っていたが、あくまでも映画の世界の話だ。

ああ、イマジンがいればなあ、ガイアメモリがあればなあ。そんなことを考えながら育ってきたから、今のようになっている。

今の私は、いわゆるオタクだ。しかも、引きこもりの。月一程度で外に出るが、その時はオフ会やイベントの時だ。

私の名前は、澤谷薔薇^{さわたにばあ}。中学校までしかない友達からは、キバーラと呼ばれていたが、キバーラはあまり好きではない。デイケイドを刺したシーンが衝撃的すぎた。

そんな私に、小さめのダンボールが届いた。頼んだ覚えはない。母親のものかと思っただが、それも違うらしい。宛名のところには、私の名前が書いてある。フオロワーさんからのプレゼントかな？

自分のところに来たなら間違いかもしれないが、開けるしかない。間違えた方が悪い

のだ。

「カッターナイフを使う時は、よく気をつけようねー。」

そう呟きながら箱を開ける。すると、梱包材に包まれた、見たことの無い、仮面ライダーのベルト?のようなものが入っている。

私がベルトを手にとると、信じられないことに、それは自ら浮遊し、私の腰に巻きついた。

私が混乱していると、さらに信じられないことに、ベルトが喋った。これは夢なのか!?

「君ちよつと太り過ぎじゃない?」

おい。失礼すぎるだろ。いくら夢でも。

「まあいいや。君が1番僕のパートナーに相応しいスキルを持つてるからね。」

「私の、スキル?」

「そう。君は仮面ライダーソレイユになれる。僕と変身すれば、君……ばあらは今の10倍、いや、100倍もの力を手に入れられる。それで、僕達の世界で戦ってもらおうよ。」

「仮面ライダー……ソレイユ?」

聞いたことの無い名前だ。本当に……私だけのライダーだ。

「じゃあ、その扉を開けて。」

私は言われるがままに、扉を開ける。すると、デンライナー、には乗れないが、洞窟のような紫がかった空間だった。

「ここは？」

「ここは、僕の家……だった、今は僕の世界を破壊しようとしている、ナイトメアの手下が住んでるんだけどね。」

「え？じゃあここには……」

「そうだよ。君に変身してもらって、まずこの家から救ってもらうんだ。」

私が……変身……どうなっちゃうんだろ……

「大丈夫、君ならできるさ。」

なんか、少し怖くなってきた……私に敵を倒すなんて……

「やるしかないよ。」

まだ私の心の準備が出来てないまま、ベルトは待機音に入る。

『フラーワ……フラーワ……フラーワ……フラーワ……』

手元に、バラの形の機械的な何かが入る。

もうやるしかない。

「変身!!」

それをベルトに差し込み、さらにもう一度押し込む。

『激しく燃える、情熱の赤！バラ！』

「仮面ライダーソレイユ！ここに誕生！！」

仮面ライダーの薔薇

そこには、緑色の腕に赤い仮面の騎士がいた。

それは、棘の鎧で攻撃し、薔薇とは思えない身体能力を発揮し、すぐに敵を全滅させた。

「なんだ!?この力…。」

僕が持つてる力よりも… 遥かに…。

「いやあ、案外簡単だったね!ありがとう!」

「う、うん。君が思ったより強いから、僕、驚いちゃったよ。」

驚いた…。そんな言葉じゃ済まされない。彼女のパートナーは僕でいいのだろうか…。彼女について行くと、僕はきつと…。

「ベルトの名前は?」

「あ、僕はミラ。待って、怪人態になるから。」

僕は地球では「怪人」と呼ばれている姿になる。

「イマジン!!」

「ちがうよ。イマジン達とは関わっては行けないことになってるの。掟として。」

まだ彼女のことを知りたい。僕が追いつくために。

「僕はフラーワドライバー態、人間態、怪人態になれるんだ。フラーワドライバーっていうのは、君が言うベルトね。」

「なるほど。」

「これからどうぞよろしく。」

「うん！」

こうしているが、僕はとても疲れている。彼女の攻撃について行くだけで、僕は精一杯なのだ。

「おい、お前。」

聞いたことのある声が聞こえてくる。

「しゃがんで！」

とっさの攻撃にびびってしまった。

「何?！」

「俺はナイトメア様の手下、ウエズンだ。新しい仮面ライダーが誕生したと聞いて、倒すつもりでここへ来た。」

「行くよ、ミラ。」

「うん！」

僕は彼女に巻き付き、フラワーを彼女のポケットに入れる。

「あれ、花は？」

「ポケット。」

「あつた。」

『フラワー：：。フラワー：：。フラワー：：。』

「変身！」

『激しく燃える、情熱の赤！薔薇！』

「仮面ライダーソレイユ！」

ウエズンは不敵な笑みを浮かべる。

「出たな、仮面ライダー。女のライダーはこの世界には無用なんだよ!!!」

仮面の上からでもわかる。彼女は怒っている。彼女から最初の変身より強いパワーを感じる。

「あんまり無理をしないで……！」

「あなたは許さない。女でも仮面ライダーになれる。」

「ははん？そうか、じゃあ見せてみる！その力を！」

ウエズンが置いた扉から強面の男性が出てくる。

ウエズンは彼にベルトとして巻き付き、待機音を出す。

『フラワー： フLOWER： フLOWER：』

「行くぞ。ウエズン。」

『匂いは強烈、豪烈な赤！ラフレッシュア！』

変身音にもある通り、いるだけで倒れそうな匂いがする。その中で戦うのは無理に等しい。

「ばあら、行けるかい？」

「よ、余裕よ」

無理をしないでと言ったが、彼女の意思は変えられない。

「変身」

仮面ライダーソレイユは、2回目の戦いにも関わらず、ものすごい力を出している。

夢見がちの太陽

ソレイユの攻撃にラフレシアのライダーも対抗する。異臭を放して敵の攻撃を抑える邪悪なライダーのその名前は、仮面ライダースマルという。

スマルはソレイユの攻撃を軽く止める。そして容赦なくベルトを殴る。ベルトを破壊すれば変身が解けるのだ。

やはり、体力、体格の差でソレイユはボロボロの体になってしまった。ミラも、ベルトの姿を保ってるのが限界になってきている。

「ばあら、もう……僕……」

しかたない、と怯んだソレイユが変身を解除しようとした時、ウエズンの攻撃が止まった。

「うおっ!?!」

ウエズンが驚いて向いた方向には、もう1人の桃色と白色のライダーがいた。それは、日本刀のような長刀をスマルの首に当てる。

「今すぐここから去らないとここで貴様の首を取る。」

「わかったわかった。」

仕方なさそうにウエズンはどこかへ消えていった。

「あの：：さつきは助けてくれてありがとうがとうございます：：」

薔薇は返信を解除して言うと、ライダーは無言で名刺のような長方形の紙を地面に置き、その場を去っていった。

立ち去る時のその後ろ姿は、薔薇には優しく笑っているように見えた。

「仮面ライダー：：裂羅《サクラ》：：」

裂羅。達筆な字でその2文字だけが書かれた紙を、薔薇はポケットにしまう。

自分の部屋に戻った薔薇は、今日はよく寝ることにした。夜更かしもせず、明日最高のパフォーマンスが出せるようにするのだ。

薔薇は裂羅から貰った紙を机に置いて、部屋の電気を静かに消した。

「変身。」

低く太い声がする。顔はよく見えないが、男の人だ。

「私は仮面ライダー裂羅。危ない目にあっていたようなので、お護りします。さあ、私のバイクに乗って。」

裂羅は薔薇を後ろに、どこまでも連れていった。

「ねえ、寄つかかっている？」

「もちろん。」

「私、好きになっちゃったかも、」

裂羅は変身を解かずに静かに笑う

「私を見つけてごらん。」

そういうと、裂羅はどこかへ消えていった。

「夢か。」

薔薇が目を覚まして直ぐに発した言葉はそれだった。

「おお、薔薇、おはよー。」

「誰!？」

薔薇のベッドの横には、知らない男が座っていた。ただ、声は聞いたことがあった。

「え、僕だよ。ミラ。あ、人間態は見たこと無かったっけ?」

あのミラの人間態が、こんなにウェイ系の大学生っぽいとは誰も想像できなかっただろう。

「え、え、かつこいいね。」

薔薇がそういうと、ミラは女物の服を纏った細マッチョの腕を振りながら、可愛らしい笑顔を見せる。

「まあ、これは薔薇の服なんだけどね。」

薔薇は親からの仕送り20万円の札束を見て何かを考える。

「よし、服買いに行こうか。」

「うん！」

薔薇は今月初めて外に出る。

二人目のラフレル

「店内どうぞごゆっくりご覧下さいませー。」

ミラの「ここがかっこいい！」という勢いから入った店は、サインのようなロゴのスケートボードブランドの店だった。店員も少し悪そうな感じで、薔薇は少し緊張している。

ただロゴが入っただけのTシャツ。それでも、ミラが着るとかっこいい。ミラは自分の服を選び終えると、今度は薔薇の服を選び始めた。

赤色の生地にもロゴが胸のあたりに書かれているTシャツを持ってきた。

「私ももう23だし、あんまり若々しい格好は出来ないかな…。」

そういうと今度は赤色のロゴ入りパーカーを持ってきた。どうやら薄い生地を使っているらしく、夏でも着れるらしい。試しに試着すると、薔薇はとても驚く。彼女は自分が赤がよく似合うことに気づいた。

「よし、ミラ。これにするよ。」

ほかにも何枚か赤を基調としたTシャツや開襟を何枚か持ち、レジへ持っていく。

「えー、6点で、42204円です。」

さすが海外ブランド、少し高い。渋々現金で金を払うと、今度は別の店へいく。
(買い物って、楽しい！)

次は、マリオに出てくるはてなブロックを削って逆三角形にしたようなブランドに入っていった。これは唯一薔薇が知っているブランドだった。薔薇はすぐに定番のTシャツを手にもつ。するとミラが、「こういうのは定番じゃないやつを買うの！」というもんで、つつい流されて高いものを買ってしまった。

やっぱり彼女は赤だった。

色々ところで買い物をした彼らは、もう満足だった。一番高かったのは、ハイブランドのネットワークスだった。

が、あくまでも仮面ライダーの薔薇。普通にこの話がおわるわけもない。彼らの帰りの電車は止まってしまった。

「いくぞ、エレン。」

薔薇達と同じ列車に乗っていた二十代くらいの男が、前に座っている女に言う。

「わかった。この列車にソレイユがいるんだな？」

「ああ。調べてある。」

「人間でもこれくらいのことにはやってくれるんだな。礼を言おう。」

「邪魔な奴は消すぞ。」

「そうだな。」

女は怪人態、そしてフラワードライバーとして、男に巻き付く。一緒に乗っていた人間は、女の変体に驚き、叫ぶ。

『フラワーワ フラワーワ フラワーワ フラワーワ』

「変身。」

『匂いは強烈、豪烈な赤！ラフレシア！』

車内には言葉では表現出来ないような悪臭が漂う。倒れる人も多い。

もちろんそれには薔薇達も気づき、男が乗ってる車両の方に向かう。

「これ、僕の知り合いかも……」

ミラはそう言うと、ドライバーとして薔薇の腰に巻き付く。

ドアを開けると、悪臭の霧の中に1人、仮面ライダーが立っていた。

「やっぱり……君だったんだね………シャウラ……」

「ああ、あたしだ。」

ドライバー二人はどうやら、知り合いのようだ。

「なあ、さっさとやっっちゃっていいか？」

「わかった。ただ、ソレイユについてるドライバーは壊さないようにね。」

「ああ。」

「薔薇、僕は君の見方だよ。手加減なしで戦おう。」

「変身。」

『激しく燃える、情熱の赤！バラ！』

ソレイユの腕の棘がきらりと光る。

「俺は仮面ライダーラフレル。お前に俺は倒せない。」

ラフレルというそのライダーは、ブーメランのような武器を投げて攻撃する。

とっさのことだったので、ソレイユはそれをよけられない。

「うああっ！」

仮面ライダーソレイユは、暴走中の列車の中で飛ばされ、倒れる。

ソレイユの敗北

ソレイユの変身は解除され、薔薇とミラは別々になる。薔薇は気絶し、何かになさ
れてるようだ。

警戒しているミラに、ラフレルはさらに攻撃を続ける。

「殺すなよ。」

「ああ。」

ラフレルはそう言って高く飛び、よくあるライダーキックの体制になる。

「テリブル ライダーキック!!」

ミラを倒したラフレルは、彼をどこかへ運んでいく。



目覚めるとミラは、まったく別の場所にいた。そこは監獄のような場所で、牢ごしに
シヤウラがいる。

「どうしたミラ、パートナーと別々になって悲しいか。」

「薔薇はどこ!」

「お前のそのばあらとやらはあの電車に置いてきた。」

そういうシャウラの顔は、まさに悪魔だった。

「ああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「さよなら、仮面ライダーソレイユ。」

ミラはずつと薔薇のことを考えていた。



一方、電車で一人取り残された薔薇は気が付いたらなぜかバイクの上で寝ていた。運転するのは全然知らない男だった。

「誰?!」

「やつと目が覚めたかソレイユ。俺は湊 敬一。仮面ライダー裂羅だ。」

「裂羅さん!」

敬一は俳優のような渋い笑顔を見せて、薔薇に問う。

「ソレイユ、君は相棒をラフレルから取り戻したいかい。」

「もちろんです。すぐにでも… ミラに会いたい…!!」

「そこなくっちゃ!」

そう言うのとバイクのエンジンを大きく鳴らし、目の前にはアニメでよくある世界の割れ目のようなものが現れる。

「いくぞ! サクラ!」

「わかったわ！き・く・らさん。」

「からかうなって、君と同じフラワーを助けに行くんだぞ。」

「ふふふふ、かわいいおねーちゃん連れてねえ…。」

彼はバイクごと割れ目に突っ込んでいく。 a

割れ目の中は雲の上のような景色で、すべてが白黒で描かれている。その中で敬一はシャウラが映っている出口を見つけ、そこに向かう。

「ミラ…今、裂羅さんと一緒に助けに行くからね。」

仮面ライダーのカニバル

「君、俺に体を貸してくれない？」

男は真つ暗な場所で、何かに言われる。

「いやだ……来るな！」

「そっか……。だったら俺も強硬手段でいくよ。」

その《何か》は、男に近づき手のようなものを男の胸の前にかざすと、心臓を取り出す。

当然男は死に、倒れる。男の口から《何か》は中に入り、《男》として動く。

「次はドライバーか……。いいのがあるね。」

男は手からモニターのようなものを出し、そこに移る《何か》に似た怪人と、光で結ばれたもう一つの怪人とベルトを見つめる。

「これがカニバルドライバーか。」

男は時空の割れ目を作り出し、そこへ飛び込んだ。

「やつぱり、まだ誰もいないかな。邪魔ものがないならそっちのほうが楽でいいんだけど。」

男がさっきのモニターそっくりの情景が描かれている割れ目から出る。

「ここか……」

そこは薄暗く牢獄のような場所だった。

「やつぱり君だよ。シャウラちゃん。」

シャウラはミラからエネルギー吸収を止めないように返事をする。

「お前は誰だ？」

「僕だよ、忘れたの？」

「声には聞き覚えがある。」

その返答に男はニヤリと笑い、姿を変える。

「レグルススカーレットかい!？」

「あつたりー!サー・レグルススカーレットだよ。」

レグルススカーレット。シャウラとおなじブルーム族なら誰でも知っている名前だ。彼は昔のブルームの世界をナイトメアから守ったことがある。その時彼は英雄として称えられたが、天狗になった彼のわがままには誰も耐えられなかった。

「そのドライバーは俺がもらつていくよ。」

彼がそう言い終わると、ミラから出ていた光は消え、ドライバーが静かに光っている。

「僕の力を!!!」

「そうかな。俺の力じゃないと変身の力に耐えられないと思うんだけどね。」
煽られたと悟ったのか、シャウラは怪人態に姿を変える。

「僕は君と戦うつもりはないよ。」

「その余裕な表情が私を怒らせる!!」

シャウラ怪人態はその大きく爪の生えた腕でレグルスに襲い掛かる。

「でも正当防衛はさせてもらうよ。変身!」

レグルスはドライバーに二つの立体をはめ込んで、変身する。

『Carniv Ca Ca Ca Carnivorous』

どこからか出てきた巨大な食虫植物に食べられ、空中で解放される。解放された後のその姿は見たことのない形だった。

「やつほー、俺が仮面ライダーカニバルだよ。」

「ふざけてる!!」

レグルスは女性だからと容赦なくシャウラに攻撃する。そのときシャウラの攻撃はまったく当たっていない。

「そろそろとどめかな。」

カニバルは地面を強くたたき、すると、シャウラの下から巨大な食虫植物が出てき、彼女はそれに啜えられる。

「離しなさい!」

そしてカニバルはライダーキックの体制になり、自分より高い位置にいるシャウラにキックを見舞う。

「カニバル・ライダーキック!!」

牢屋の中で大爆発が起き、シャウラはその中央に倒れる。

レグルスは変身を解除して、敬一と薔薇たちのほうに近づく。

「僕は普通の人と同様にされるのは嫌だけど、君たちはナイトメアを倒そうとしてるらしいね。だから僕と一緒に目的を手伝ってくれないか。」

「ちよつと癪に障るところはあるが、悪いやつではないらしい。いいだろう。薔薇もいいだろう?」

「もちろん!よろしくね!」

彼らの冒険はまだ始まったばかりだった。

偽物のソレイユ偏

ソレイユの友達

？ やつと仲間が3人になったソレイユ一行は、意外にも暇を持て余していた。なんと日本に出現する悪いフラーワ達が行く前に次々と討伐されているのだ。

？ 薔薇の部屋で集まっていた時、敬一がネットとある記事を見つけて仲間に見せる。

「これ、『仮面ライダーの格好をした殺人鬼がカメラに映る』って記事。気にせずにいられないよな。」

？ その記事には、仮面ライダーソレイユの格好をした何者かが血のついたナイフを持っている姿があった。

「やばいね。」

「やばいな。」

？ すると、レグルスは財布を持ってどこかへ行こうとする。

「じゃ、俺はバイト代入ったから服でも買いに。」

？ そう言うのと彼は薔薇の家の窓から街の方へ抜けてしまった。

「ちよつとレグルス！ 仕方ないか、うちらで解決しよう。」

「そうだね．．」

レグルスのマイペースさに呆れた薔薇は、早速外へ出る。ほかのみんなも情報収集のためすぐに散らばった。

しかし、外に出るのに慣れていない薔薇は、いきなり一人になってどうすればいいのかわからなくなっていた。

「うちらで解決しようとは言ったけど．．」

一人になった薔薇はとりあえず近くのカフェに入った。マスターにカフェモカを一杯頼むと、すぐに出てきて、空いている二人席に座る。落ち着こうとして飲むとアイスだと思っていたそれはかなり熱めのホットだった。

「あっつー！」

「しかし彼女は言いに行くほどコミュニケーションを持っていないので、仕方なくホットを飲んだ。意外なことに猫舌で、安久二番目のサブライダーにふさわしくないと、自分を少し責めてしまう。そう、彼女こそが仮面ライダーム。」

とつさに、彼女は言う。

「違う！私はソレイユ！てか誰！さつきからナレーターみたいなことしちゃって！」

「おっと、これは失礼。私の名前はM。旅人であり作家さ。」

そういうとMは彼女が座ってないほうに相席する。

「やっぱり君が仮面ライダーソレイユか。この世界の元号、安久は本来の世界では令和となつている。君は仮面ライダーソレイユでなくっちゃ、私、この世界、さらに君たちの仲間はずべて消えてしまう。あ、君もね。君は何があつても仮面ライダーをやめちゃだめだよ。それだけを伝えに来た。」

「は、はい……」

「まあ意味はこの物語の最終回くらいにはわかるだろう。」

薔薇がきよとんとしている、そこへスーツを着たガタイのいいが三人ほど集まつてきた。

「貴様がソレイユか、話はあとだ。今から貴様と連れれの貴様も署へ連れていく。覚悟しとけ、犯罪者め。」

そういわれると腕をつかまれて外に停まっていた大きめの車に投げ入れられた。

「やれやれ、君のお友達かい？」

Mが尋ねるとのんきなことに少し苛ついている薔薇が嫌味を込めて答える。

「そうに見えますかね。」

暫くして、車が止まり、二人は降ろされる。そこは警察署だった。

「廊下を少し掃除したほうがいいんじゃないかな？」

「よく手錠をかけられてるのにそんなことを言えますね。」

ガタイのいい男たちに連れられて二人が入ったのは牢屋だった。鍵をかけられ少しすると、今度はスーツを着た中年の男が入ってきた。

「ソレイユ、本当にありがとう。君のデータはほとんど受け取った。だから今日はそのお礼にさっきまで君の仲間のふりをしていた悪の帝王様のお言葉を聞かせに来た。」

「礼を言われているよ、ソレイユ。きっと君のお友達だろう。」
「違うって!」

彼女は覚悟をした。それと同時に、帝王が誰なのか少し気になった。

「それでは、悪の帝王様の御成り!!」

時空の割れ目が開き、そこには見たことのある人が立っていた。

「楽しみにしろ。驚いた?ば、あ、ら?」

「これは君のお友達かい?」

薔薇は驚いて倒れそうになったが、震える声で答える。

「うん……私の……お友達……」

Mの活躍

「俺がありがとうって言うてるんだから、笑つてよ。薔薇。」

さつきまで仲良くしていた友達が悪の帝王として自分の目の前でたたえられていたら、それはとても驚くことだ。

「仕方ないなあ。んじゃ、薔薇の友達くんから処分していきまーす。どうでもいいからね。」

彼、レグルスは部下らしき人にタンポポの花を渡す。するとそれは色のある透明な物になり、彼の腰にはフラードライバーのようなベルトがまかれる。

『フラード フラード フラード フラード』

「出来立てはやはやの自家製フラードだ…！変身！」

『粘り根を張る 黄色の戦士！蒲公英！蒲公英！』

？その場にはいかにも悪人顔の仮面ライダーが立っている。しかし、Mは一切顔色を変えない。

「君のお友達のお友達には悪いけど、私には勝てないよ。」

そう言ってコートの内ポケットから機械的な何かを出し、腰に当てる。すると、例の

ように腰に巻き付く。

『ワー・ドライバー。β』『M』

「私以外の物語では私は無敵だ。」

その言葉に怒ったのか、蒲公英のライダーは葉の形をした剣で檻ごとMを切り裂く。
「変身。」

ライダーの刀はMの変身により跳ね返された。

「お前も仮面ライダーなのか!？」

蒲公英のライダーは驚き、レグルスはにやりと笑う。

「別の世界の仮面ライダー。しかもダークライダーさ。ネタバレだけどね。」

Mがドライバーの銃のマークを押すと、『M Magnum』と音声流れる。Mの手には大型の銃が現れ、それを使い攻撃する。

しかし、蒲公英ライダーが手から綿毛のようなものを出し、それが着地するとそこに人間サイズの人型の蒲公英が現れ、それが無限に続く。

「だめだ……君はここから逃げろ！」

『M Multi-ple』という音声とともにMは五人に増殖し、一人が『M Magnum』で窓を破壊する。そして薔薇を抱きしめ、「お友達にさよならは言ったかい？」といい『M Moon』で落下する。

以外にも逃げた薔薇にレグルスは、「ばあらには絶望をしてもらわなくちゃね。」と部下に告げただけで何もしなかった。

一方、薔薇についていったMは彼女を地上に降ろしたところだった。

「今回は幸運だったね。君たちの今後の活躍を期待しているよ。仮面ライダーソレイユ。」

そう言い残して風と共に消えていった。

薔薇は、今回のことを仲間に話した。

「薔薇、僕はレグルスを最初から信頼していなかった。予想が当たったんだ。僕今とっても怒ってるよ。明日、薔薇が囚われたところに戻ろう。あいつを殺すよ。サクラ、敬一さん、協力してくれるよね。」

「う、うん」

ミラの怒りは本物で、無意識のうちに人間態から怪人態になっていた。

蒲公英のソレイユ

次の日、ミラは怪人態のまま起きて、無表情のまま薔薇たちと一緒に例の場所へ行く。存在しないはずの警察署のような建物は、黒い雲をかぶっていた。

「僕は怒っているよ。薔薇、さっさとやるよ。」

そういつてミラは薔薇に巻き付き、待機音を鳴らす。

『フラワー： フラワー： フラワー：』

「いや、ミラ。きつと訳があるんだと思う。私はレグルスをいい人だと思ってるし、もし裏切るにしても早すぎると思う。」

薔薇は少しの希望を最後まで信じていた。

「だからミラ、少し落ち着いて..」

『フラワー： フラワー：』

ドライバーの待機音は止まらないが、少し考えなおそうとミラが思ったとき、上のほうから声が聞こえた。

「おぉー！きたかーソレイユ！あ、これ見て!!」

レグルスだった。彼はそう言って後ろから何やらガサゴソと取り出すと、薔薇たちの

目の前にそれを落とした。

「ソレイユ… 私が負けないといったね… どうやらそれは嘘に終わったみたいだ…」

上から落ちてきたのは、仮面ライダーMだった。

「この人徹夜で戦ってたんだー！ だけど倒したの蒲公英一人だけ！ しかも蒲公英のフラーワなんていくらでも作れるしい、めっちゃ弱かった！」

ポロポロになったMを見てレグルスは喜んでいるようだった。それを見た薔薇の目からは光が消える。ずっと信じてたのに、最後まで信じてたのに…

「ミラ… いくよ。」

「ああ。僕の準備は万端だ。」

「俺たちも行くぞ！ サクラ！」

「うん！」

「変身！」

『激しく燃える！ 情熱の赤！ バラ！』

『あなやあなやといひけれど！ はるのさくらのたたかへば！ 裂羅！』

変身した二人は、レグルスのところまでひとつとびするが、途中で蒲公英のライダーに落とされる。

「お前はそのままレグルスを慕っていいのわ！」

「貴様に口出しされる筋合いはない！」

「じゃあ油断はするな！」

そう吐き捨てるのと裂羅は相手の顔の目の前に黄色の花の半透明の物体Ⅱフラワーエナジーを見せる。

「ソレイユ！これを！」

そういつて蒲公英のフラワーエナジーをソレイユに投げて、彼女はそれをキャッチする。

「ミラー！」「うん！」

ソレイユは薔薇のフラワーエナジーを抜いて、蒲公英を入れる。

『粘り根を張る 黄色の戦士！蒲公英！蒲公英！』

さっきの蒲公英ライダーとは違った、蒲公英を基にしたソレイユになった。

「仮面ライダーソレイユ！デン德里オンフォーム！」

『デン德里オン・イリユージョン』

黄色のソレイユは何人かに増殖して戦う。デン德里オン・イリユージョンこそがその技名だ。そして、なんと増殖した何人かのうちだれにでも纏められるのだ。

それを利用して彼女はレグルスのところにたどり着いた。

「おっと、ソレイユ。よく来たねえ！あ！別の花になったんだ！だったら、俺の作戦に協

力してくれるね！」

レグルスは友好的に話をしてくるが、ミラは聞かない。

「薔薇！君は一回騙されてるんだ！僕は信じないよ！」

「二回目は、ないね。」

薔薇もソレイユも完璧に戦う体制になっていた。

「君らがその気なら俺も相手になっていいけど、君らが負けたら僕の話をちゃんと聞いてね。」

敵のレグルス

「やれ！俺の仲間たち！」

レグルスがそういうと、後ろにいた怪人たちが四人前に出てくる。それはおそらく彼のボディガードのようだ。

「お前は戦わないのか!!」

ドライバーのミラが怒鳴る。

「君一人だったら俺じゃなくてもいいと思ったからね。さ！やっちゃって！俺の話を聞いてもらうために、殺しはしないでね。」

彼らは胸ポケットからレグルスのドライバーと同じ形のものを出すと、手の中のフラーワエナジーをソレイユのほうへ見せつける。形はクローバーだ。

『Comant growin, now Comant growin, now
Comant growin, now』

四人同時にドライバーにフラーワエナジーを挿入すると、変身音とともに姿が変わる。

『G o G G G o i n g !』

「仮面ライダーコマントだよ！俺の仲間たち！」

コマントは四人同時に容赦なく襲い掛かってくる。それに対しソレイユも四人に増え、マンツーマンで戦う。しかし、ソレイユの体力は1/4なので体力的にも厳しかった。

「四人同時は…無理かも…！」

『Finished by Comant!』

コマントはフィニッシュャーの音声を鳴らし、胸の四つの銃口からソレイユを射撃する。ソレイユはガラスの窓を割り真つ逆さまに地面へと落下する。

「うわああああああ!!」

ミラの意識は飛び、薔薇は謎の爽快感から少し楽しんでるが、地面に墜落して死亡するというとはなかった。落下中のソレイユを誰かがキャッチしてくれたのだ。

「君は負けたんだ。」

それはレグルスだった。レグルスは食虫植物を萎ませながら話す。

「約束だよ。俺の話を聞いて！」

負けたのが恥ずかしいソレイユは、目を合わず黙る。

「まあいいや。聞いて。まず、だまして裏切ったと見せかけたのはごめん。俺はソレイユの敵になろうとなんかしてないよ。Mさんも自分の世界に帰っただけ。さっきのコ

マント達は俺の本当の部下。彼らといっしょに組織をだまして内側から破壊するつもりなの！だから協力して！」

「本当なの？レグルス。」

「ほんとのほんとだよ！だから俺は君に直接傷つけてないの！」

これにはミラも納得し、黙って様子を見る。

「あと、偽物のソレイユのことなんだけど……」

それを説明しようとしたところで、レグルスの首元に刀が突き付けられる。

「カニバル！貴様どういふつもりだ！」

仮面ライダー裂羅だった。ソレイユは変身を解除して裂羅に説明すると、二回目であろうと理解した。

「すまない！ただもうちょっとわかりやすくしてほしいかった……」

レグルスは組織の内部に入りわかったことを説明する。すると信じられないことが発覚する。

「僕に兄がいるのかい……！」

ミラは自身の兄の存在を知らなかった。しかもそれが、ソレイユの偽物として活動していることすらも。

ミラの兄

「もうそろそろミラ達が僕の存在に気づくはずだろう。工作人員としてきたのがバレバレ
さ。」

そういったのは、ミラの兄且つ帝国軍第一將軍のディフダだった。彼は生まれた後すぐに迷子で捨て子として育てられ、四歳ですぐに独立した。フラワの一歳は人間の三歳に相当しており、彼はとても意思が大きかった。

「ウエズン、僕のエナジーを使っていいから、ちよつと様子見てきてよ。」

仮面ライダーソレイユに最初に倒されたライダー、ラフレルの変身者の一人、ウエズンはあの後ディフダに助けられ、彼のもとで生活している。

「わかりました。でもまだ量産型のフラワードライバーが試験版ですぜ。」

「大丈夫さ。試験版のを使えばいい。君ならいけるさ。」

そういつてディフダはウエズンに試験版のフラワードライバーを持たせ、地球へ向かわせる。

「わかりましたディフダさん！俺は絶対戻ってきます！人質としてこのラフレシアのエンナジーを預けるので、行ってきます！」

ウエズンは割れ目を作るとそこへ静かに入る。そして地球がある出口へ行く。

「待つてろよソレイユ。今の俺は強い。」



あつたこともない自分の兄が自分のふりをして悪事を働いていることを知ったミラは、驚きを隠せていなかった。そんなところに手紙が一通届く。薔薇がポストからとつて宛名には『仮面ライダーソレイユ』と書いてあつたので、みんなの前で封を開ける。「ええと、『初めまして！僕の弟、そしてその仲間たち！僕がミラの弟、ディフダということももう知っていることだろう。まず仮面ライダーソレイユ、君には謝らなくちゃならない。僕は君を活動的にさせるために君の偽物として地球で少し遊ばせてもらった。すまないと思つているよ。なんで活動的にさせるかつて？それはミラ！君に帝国軍として一緒に戦つてほしいからだよ！今日、そつちに僕に忠誠を誓つた一人を送つたから、詳しくは彼に聞いてね。それじゃあ、いい結果になるように願つています。君の兄、ディフダグリーンウッド』だつて。」

ミラはディフダの要求は断つている。自分の家族が、帝国軍と戦つて危険にさらされているからだ。

「僕は絶対に要求に応じないよ。たとえ、兄と決裂しても。」

その時、サクラのケータイにニュース速報が流れる。

「また偽物ソレイユが出たっぼい！」

サクラは敬一に巻き付き、ミラも薔薇に巻き付くと、ミラが言い出す。

「敬一、バイク持ってたよね。実は僕もあるんだ。」

ミラは薔薇の玄関のドアをフラワーの世界につなげて、そこから自分のバイクを出す。

「これ！名付けてソレイユ号！今日から薔薇のものさ！」

薔薇は喜び、早速運転をする。バイクの免許は調子に乗って十八の時に取ったのだ。もちろん敬一達もついていく。

捕まるんじゃないかというスピードで目撃された場所へ行くと、そこでは少し黒味がかかったソレイユが店や道で暴れていた。記者も続々ときている。

「なんでみんな見ているだけなんだ。仕方ない、行こう！ミラ、敬一さん、サクラ！」
彼らは記者や警察の間を通過して偽ソレイユの前へ出る。警察には止められたが、目を盗んで変身する。

「私たちが相手だ！変身！」

『フラワー。．．フラワー。．．フラワー。．．フラワー。．．』

『激しく燃える、情熱の赤！バラ！』『あなやあなやといひけれど！はるのさくらのたたかへば！サクラ！』

彼らが変身すると周りはざわつき、カメラのフラッシュが刺さる。

「フラッシュ撮影は禁止です！」

裂羅が叫んでも周りは聞かない。仕方がないので警察に周りを抑えてもらう。

「君が…僕の兄なのかい…？」

「ソレイユ！俺はお前の兄なんかじゃねえ！俺はお前をここで殺す！」

偽のソレイユは大声を張り上げてソレイユに向かっていく。ソレイユは対抗するが、ウエズンの怒りの勢いに勝てない。

「うっ!!!」

偽ソレイユのライダーパンチを食らったソレイユは膝から倒れてしまう。

「ソレイユ！」

彼女には裂羅の言葉は届いているかはわからない。

偽物のソレイユ

偽ソレイユのライダーパンチをまともに食らったソレイユは、その場に倒れてしまった。

「見たか！この瞬間を！悪の仮面ライダー、ソレイユとはこの俺だ!!! たった今仮面ライダーソレイユは極悪の殺人犯としてこの世の歴史に刻まれるんだよ!!!」

記者はすぐさまカメラを回す。

「ソレイユ..」

ウエズンの目は裂羅に向けられる。

「さあ！次はお前だ！」

「さあこい！」

覚悟を持って構えている裂羅にウエズンが向かったとき、ウエズンは何かに足を引っかけた。

『粘り根を張る 黄色の戦士！蒲公英！蒲公英！』

「なーんてね。私たち二人分のパワーが一人で変身してるお前に負けるわけないでしょ！」

彼が足を引っかけたのはソレイユの根だった。それは彼の足にうまく絡みつき、彼はその場から動けなくなった。彼は腕を根にこすりつける。

「こんなもの！薔薇の棘で外せるわ！」

しかしそうはさせない。その場にはウエズン以外のライダーが二人いるのだ。

「風桜剣！」

裂羅は風桜剣という剣で偽ソレイユの腕を攻撃する。

「ソレイユ！いまだ！」

裂羅の合図でソレイユは高く飛び上がり、技を打つ。

「リオン・ライダーキック！」

ソレイユからライオンの化身のような影が浮かび上がり、彼女はライオンが獲物に飛びつくようにライダーキックを打つ。ちなみに、蒲公英の英語の *dandelion* の *lion* はライオンからきているらしい。

場到大爆発が起こり、薔薇たちは面倒なことが起こる前に物影に隠れた。

彼らの活躍の一部始終はニュースの生放送で流され、仮面ライダーは日本中で話題になった。

「結局振出しに戻っちゃった。」

物影で人間態のミラは悲しそうに言う。

「ごめん。次は絶対逃がさないようにしよう。」

「謝る必要は無いよ。僕と血が繋がってる兄のことだ。僕に似てるからきつと自分から出てくるよ。だからそれまでちよつとゆっくりできるかな。」

？ミラは冗談を混じえながら話す。

「なんか会ったことないのに血繋がってるって思ったら、不思議だなあ。人間はどう兄弟と接してるのかわからないけど、いい人だといいなあ。」

？薔薇は兄弟がいないので黙るが、敬一が答える。

「人間の兄弟は弟が兄を尊敬する。兄は弟に生き方を教える。そういう関係だ。ミラの兄もきつといい人で、色々なことを教えてくれるはずだ。」

？そう言うミラは嬉しそうな顔をする。

？家に帰ると、レグルスがいた。彼はととても焦っている。

「レグルス？どうしたの？潜入捜査は？」

？サクラが聞くとレグルスは冷や汗を床に落として言う。

「俺はソレイユの強化のためのエナジーを盗んだんだ。でもそれが上にバレて、しかもなんか俺が潜入捜査だということがバレてて、どうしよう。」

？レグルスは盗んできたものを震えた手でミラに渡し、押し入れに入り出てこなくなっ
てしまった。

「赤色のチューリップ……」

？それはミラは良く見覚えがあつた。

「僕の昔からの親友はチューリップのフラワーエナジーをアクセサリにしていた……」

兄の誘い

「ミラー・薔薇！サクララ！レグルス！第三公園でフラワーが子供を襲ってるって！チューリップ使うチャンスだから行こう！」

レグルスが押し入れに引きこもってから三日、突発的にフラワーの情報にネットに流れた。

「俺はいいよ。ここにいます。」

レグルスはチューリップのフラワーエナジーを敵の本拠地から盗んだのがばれてそれにおびえている。

「ここでぐずぐずしている暇はないでしょ！僕らは行くよ！レグルス！」

「いつてらっしやい。」

レグルスはやっぱ来なかったので、ソレイユと裂羅だけで出発した。

「これで僕の兄に会えるかもしれない…。」

「ミラの兄にあつたらソレイユの濡れ衣がはがれるかもしれないからな。」

半ばワクワクして公園に向かうと、そこにはチューリップのフラワーが二匹、子供をいじめているだけだった。

「あれ？すくない。まあいい！とりあえず子供を助けるよ！」

薔薇は薔薇のフラワーエナジーを出し、それと同時に敬一も桜のフラワーエナジーを出す。

「変身！」

『激しく燃える、情熱の赤！バラ！』『あなやあなやといひけれど！はるのさくらのたたかへば！サクラ！』

「仮面ライダーソレイユと！」「仮面ライダー裂羅だ！」

二人は一体ずつ相手にして確実に倒していく。子供は知らない間に逃げ、二人はフラワーを倒したところだった。

「いいねえ。仲間がいて。これでこそ僕の弟だ。」

倒したフラワーの一体が起き上がる。

「本当の偽物か！」

薔薇が言うのと面倒くさそうに答える。

「偽物なんてとんでもない。僕が最初で、ミラがまねした感じだよ。大体僕はそんなに野蛮なことはいしね。」

ミラは変身を解除して怪人態になり、襲い掛かる。

「お前は一体誰なんだ！僕に兄なんているのか!？」

「僕は真正正銘君の兄、ディフダールグリーンウッドだよ。」

チューリップのフラワーはミラの攻撃をよけながら姿を変えてミラとそっくりの形の怪人になる。

「さあ、我が弟。一緒に帝国軍として戦おうじゃないか。そっちのほうが安全だ。これは敵としてではなく、君の兄として言っている。」

「嫌だ！」

「だったら力づくで引き入れてやる！」

『フラワー・ドライバー』

彼は腰に量産型のフラワードライバーを巻き、手の中には薔薇のフラワーエナジーが入る。

「さあ君たちも一緒に戦おう。シャウラ、ウエズン。」

木の後ろからはシャウラとウエズンが出てくる。彼らはどちらも量産型のフラワードライバーをつけている。

「いくぞ。ウエズン。」「ああ。シャウラ。」「僕もね。」

彼らは前とは違い、感情のこもっていない声で話す。

「変身。」

『激しく燃える 情熱の赤！ バラ！』

『匂いは強烈、豪烈な赤！ラフレシア！』

「俺が仮面ライダーソレイユだ。」「仮面ライダーラフレルだ。私たちは將軍様の手によって改造され、さらに強くなり軍事用になった。」

「私たちも行くよ！ミラ！」

「ああ！」

「変身！」『激しく燃える 情熱の赤！ バラ！』

その場にはソレイユが二人いて、片方は悪、片方は正義のソレイユだ。

兄との闘い

「うおおおおお!!」

二人のソレイユは互いにぶつかり合う。

「私たちは二人分の力だ！お前になんかまけない！」

「それはどうかな。僕一人で君ら二人分かもしれないよ。」

その通り、二人のソレイユは互角であった。

そして裂羅のほうも苦戦していた。今までソレイユが簡単に倒していた弱いはずの敵も、二体同時に、しかも強化されて戦ったら簡単に倒せるはずがない。

「君たちはデイフダのペットでいいのか！」

「私たちは反乱軍のフラワーを殺す。それ以外教えられていない。」

「俺たちはそれに従っているだけだ。」

やはり感情のない声で答える。それに裂羅は違和感を覚えて、デイフダに問う。

「おいデイフダ！お前自分の部下に何をした！」

デイフダは薔薇と戦うのを休まずに答える。

「何もしてないよ。強いて言えば、僕に従うように脳を改造したとか？」

「信じられない！本当にミラの兄なの？」

薔薇が問うとデイフダは余裕そうに答える。

「ああそうだよ。それより君の体、もうやばいんじゃない？」

デイフダが言うように薔薇の体は傷だらけだった。

「エナジーを変えて！そしたら少しは治るよ！」

ミラが言う。薔薇は蒲公英のエナジーを出してドライバーに入れる。

「チエンジエナジー！」

『粘り根を張る 黄色の戦士！蒲公英！蒲公英！』

一度も行ったことのない掛け声で薔薇はダンデリオンフォームへと変わる。

「お前にはできない行為だ！」

薔薇が煽るとデイフダは白い花のエナジーを持つ。

「残念。僕も違うの持つてるよ。『コットンローズ！』『変身。』

その瞬間、デイフダの前に男が入る。

「ソレイユ！とれた！」

『二つの色は 危険か！やりすぎか！ コットンローズ ver. DANGER』

「お前がナイトメア様を一回倒した！」

「そ！俺がレグルスだよ。バラのエナジーはここで破壊するね。」

ディフダは何かを決めたように顔を動かした。

そのころ、裂羅も変身していた。

「サクラ！お待たせ！」

「おそい！」

「いくよ！変身！」

『粘り根を張る 黄色の戦士！蒲公英！蒲公英！』

「桜じゃないの!?!」

サクラはいきなりの新フォームに驚いている。

「仮面ライダー裂羅！ダンデリオフォーム！」

兄の決心

仮面ライダー裂羅は初めての新フォーム、ダンデリオンフォームに変身した。

「こんなの裂羅じゃないじゃん！多無捕々じゃん！」

サクラが言うが敬一は戦い始める。

「裂羅ノ剣！」

裂羅が叫ぶと彼の手の中に桜風の剣が出てくる。

「さあ、お前たちを同時に倒す！」

『桜！』

桜のフラワーエナジーを出し、剣のスロットに入れる。すると、近代的な待機音が流れる。

「裂羅・蒲公英切!!」

裂羅はものすごい勢いでテイクバックを振り、そのまま風が大きな音を立てるくらいの速さで敵を横に切る。

「はああああ!!」

あたりには大爆発が起こる。

「これでシャウラとウエズンともお別れか。」

裂羅は変身を解除しながら言う。

「少し寂しいような、うれしいようなかんじね。」

「まあな。さて、薔薇のところに向かうか。また変身だ。」

いつまでたつてもサクラはドライバーになろうとしない。

「どうした？」

「たまには、人間の男と女みたいなことしない？」

サクラは敬一の運転するバイクの後ろに乗り、しっかりと敬一につかまって、薔薇のところへ向かった。

そのころ、薔薇たちはというと……

薔薇はチューリップフォームの効果で盾と剣を持っていた。彼女は剣を、デイフダに突き付けて言う。

「お前が弟をどんなに悪に染めようとしても、私の相棒は正義に生きる！」

デイフダはあたりを見回すような素振りをして、にやりと微笑み、最後には声を出して笑う。

「はっはっはっはっは!!僕はこんな世界は初めて見たよ!やっぱり僕たちフラワーは、人間と相性がいいんだ!ははは。」

「何を笑っている．．！」

「デイフダは笑うのをやめずに、動きを止めて言う。」

「僕は人間が好きだ！地球侵略計画、フラワー全土ナイトメア帝国化計画はなしにすることを上に言っとくよ。だからミラ、お前はその人間の言う正義のために生きろ。僕はこんなところで失礼するよ。」

ソレイユはあつけにとられている。

「さ、この辺でいいかな。」

「デイフダは時空の割れ目を作り、そこに入る。」

「それじゃあ皆さん。さようなら。あ、ミラ、君にはこれをあげる。正義のために戦えよ？」

「デイフダは割れ目の中から見たことのあるようなないような花のエネルギーを投げる。」

「これは．．？」

『パンジー！』

その花の正体はパンジーだった。それを確認したら、ちやうど敬一達が到着した。

「あれ？デイフダは？」

「帰ったよ。平和に解決するように上に言っとくつて。」

「そっか。ならよかったよ。戻ろう。」

「平和に解決したらこの冒険が終わっちゃうんだね。」

「だね。まあ結果的にはよかったのかもね。」

「一週間くらいゆっくりしてから帰りな。」

「そうさせてもらうよ。」

ミラ達は今日は帰り、ゆっくりと寝た。

「はあく。やっぱり人間は最高だなあ。僕も人間になりたいみたいかな？はは。」

ミラの兄、デイフダはソレイユの世界に戻り、地球の余韻に浸っていた。

「デイフダ、グリーンウッド。ここで死ぬ。」

「へ？」

いきなり、デイフダは何者かに腹を刺された。

「お前……!!」

口から出てくる紫色の血液は、デイフダの顔をなぞった。

「ドライバーとエナジーはもらっておく。さよならを言うのは人生にのようだな。」

その何者かは彼のドライバーとエナジーをもって、仕事に戻った。

ナイトメアの登場

「久しぶりだね、ナイトメア。俺だよ、覚えてる?」

?洞窟で2人のライダーが話している。

「ああ、久しぶりだ。あの頃はお互い若かったなあ。レグルス。」

「わかっているとと思うけど、俺は今日は君を倒しに来たんじゃないよ。」

?レグルスは四角い物体のボタンをポケットの中で押す。

「エネルギーが吸われてる気がするのは気のせいかな?」

「気のせいじゃないかな。」

?そう言つてレグルスはドライバーを巻く。

『カニバルドライバー』

「おやおや、お前は変わってないねえ。だが今のお前の力じゃ俺には勝てないんだよ。」

「そんなことぐらい知ってるよ。ねえ、君はソレイユに近づいて何をする気?」

レグルスは変身して攻撃を始める。

「お前は気づいていたか。レグルス。今回はお前の組織に攻撃はしない。だからせいぜい仲良くやろうよ。」

老けた声でナイトメアはいい、レグルスを蹴り飛ばす。

「じゃあな。ソレイユには全部話すつもりだ。」

下からとがった葉が出てきたと思えば、それは花火のようなきれいな花を咲かせ、それが消えるとともにナイトメアは消えていった。

「まったく、ソレイユはなんていうだろうかな。あは。」



デイフダとの件がいい方向に終わり、ミラ達は帰る準備をしている中、レグルスがバイトから帰ってきた。

「ただいまー。」

「おかえりー、ってここ私の家だし！早く準備して?！」

薔薇が突っ込みを入れると、レグルスはやれやれというように椅子に座る。

「ああ、そのことなんだけど。」

「うん?。」

「僕らまだ当分お世話になるかもね。」

少しの間沈黙が流れる。

「え?レグルスにしては面白くない冗談だね。」

ミラ達は信じない。

「今にわかるさ。」

「あ、これ。」

レグルスが言ったとたんに敬一がスマホを見せる。

「フラワーの情報？ いったいなんで？ デイフダがかえって説得したんじゃないの？」

薔薇はみんなに言う。サクラが答える。

「デイフダ、死んだとか？」

「いったい誰に？」

敬一が言う。

「とりあえず、行かないと被害が増えちゃうよ。」

レグルスがまとめてそれぞれのバイクで現場へ向かう。

「うわー。これはひどいねー。」

現場は工場で、フラワーの巣窟となっていた。

「みんな。いくよ。」

『『フラワー……フラワー……』』『Carnivorous growin,

now Carnivorous growin, now』

「『変身！』」

『バラ！』『サクラ！』『Ca Ca Ca Carnivorous』

フラーワ達は音で気づいたのかソレイユたちを襲ってくる。ソレイユたちももちろ
ん戦う。

「なんか黒くない？」

「多分バラだ！薔薇、これはエナジーにすればソレイユを強化できるかも！」

「まじで！いつくぞー！！チェンジエナジー！」

『冠と盾と剣！ 赤い戦士！ チューリップ！』

「またまた量が多いな！俺たちもチェンジエナジーだ！薔薇、エナジーくれ！」「いいよ
！それ！」

『寒波でも耐える芸術花伝！ パンジー！』

「はっ！はっ！」

パンジーフォームになった裂羅は氷の弓で戦う。

『パンジー！』

エナジーを弓のスロットに入れるとかっこよさげの音声が鳴る。

「凍れ！パンジーブリーズエクスプロージョン！」

弓からは無数の氷の矢が発射され、敵に当たるとそれは凍る。それをソレイユが
チューリップの剣で倒す。

「ソレイユ！早くエナジーに変えろ！」

裂羅は怒鳴る。

「そんなに言わなくても…。」

そう呟きながらエナジーにして、音声を確認する。

『ブラックローズ！』

それはいつものエナジーより低い声で、どことなく強い力を感じた。

「それ貸して？」

「はい。」

ソレイユはブラックローズのエナジーを裂羅に渡す。すると、敬一は変身を解除してサクラを押しつける。

「何するのよ！」

「やっとなんか俺のものになる時が来た。協力ありがとう。ソレイユ。」

敬一はどこからかフラードライバーを出し、腰に巻き付ける。

「まさか…。」

サクラの察したような声に無視をして敬一はまたどこからか知らない大きなエナジーを出す。

「ははははは。みんな驚いてるなあ。俺は予想通りの反応でうれしいよ。ソレイユ、悪いけどパンジーのエナジーは貰っていくよ。」

誰の言葉も待たずに、敬一は大きなエネルギーに普通のエネルギーを差し込む。

『ナイトメアフラワー!』『ユーカリ!』

待機音が鳴る。

「俺がナイトメアだ。ははははは!変身!」

『悪夢!ユーカリ!メアユーカリ!』

ナイトメアは仮面ライダーメアに変身した。

「またあおう。仮面ライダーたちよ。」

ユーカリの花は彼を覆い、それが消えるとともに彼も消えていった。

フラワーの世界偏

敵のナイトメア

三日が経った。サクラはずつと悲しんでおり、敬一のいない日常はいつもより少しだけ寂しかった。

サクラは敬一がおかしい姿を二回だけ見ていたが、それはみんなに心配をかけないでという敬一の要望により報告しなかったのだ。

「そろそろ、私たちも動かなきゃね。」

薔薇が提案する。しかしミラは賛同しなかった。

「どうして？」と薔薇が聞くと、レグルスが答える。

「俺たちフラワーはしよせん花の化け物。悲しいことがあるとすぐに萎れて何日も戻れないんだよ。」

ミラもうなずく。

「そっか。」

しかしレグルスはカバンからドライバーを取り出す。

「でも、それは普通のフラワーの意見。俺らは仮面ライダーだし、敵が目の前に現れてく

れたんだよ。行動するにきまつてんじゃん！ミラ、サクラも悲しんでる場合じゃないよ。」

レグルスはサクラが中で泣いている押し入れを開ける。

「ほら、敬一の体を取り戻すチャンスだよ！サクラ！」

「でも… 私変身できない…」

サクラは泣き止んだが変身しないと力が足りない。

「なんとこのセルフのフラワーワードライバーを貸し出します！全部《秘密結社エボル》製ね。」

秘密結社エボルとは、レグルスがリーダー幹部の一人のサイバー犯罪組織だ。

「わかったわ。ナイトメアと直接私が戦うわ。」

そういう舞台は近くの公園に代わる。何かの前兆なのか公園には限りなく緊張感が流れる。

「僕たちはどうすればいいの？レグルス。」

「仮面ライダーソレイユが現れるところに、ナイトメアは現れる。だからソレイユに変身して。」

「わかった。変身！」

薔薇のフラワーエナジーをベルトに挿入する。

『激しく燃える、情熱の赤！バラ！』

赤いマスクに緑を基調としたライダーがそこに現れた。

「仮面ライダーソレイユ。ここに見参。」

「仮面ライダー。現れたか。」

聞いたことのある男声が聞こえ、その場にはユーカリのとがった葉が地面をつく。

「久しぶりだな。仮面ライダーソレイユ。」

仮面ライダーメア・ユーカリフォームだ。

「お前ふざけんなよ！うらあ!!」

ミラが薔薇の体を動かし、殴りかかる。

「無駄だよ。」

メアは地面からユーカリの葉をだし、跳ね返す。

「まあまあお手柔らかに。本気を出すのはソレイユの究極を見つけてからだ。」

「その強さで……本気じゃない……だと……」

ミラは驚き、体が震える。

「君たちはおろかだ。俺はソレイユに初めて会ったときからずっと、仮面ライダー裂羅としてだましていたんだよ。なのに誰も気づかなかった。唯一気づいたのが途中から入ったレグルスだった。まあ彼も最近だったんだが。俺はこれからもフラーワの世界

を支配し続けるつもりだ。」

レグルスは自分の名前が出てきたことにやれやれとそぶりを見せ、そのまま聞く。

「私も…だましていたの？」

サクラはずっと一緒にいた敬一がずっとナイトメアだったことを知り、またもや絶望する。

「敵として言わせてもらおうが、お前たちは仮面ライダーとして戦うには本気を出していないなすぎる。本気の戦いをしたいならフラーワの世界を俺達から救って見せろ！俺はラスボスとしてちよくちよく現れる！お前らは本気で世界を救え！わかったな！」

みんなは決意する。空は青く快晴だ。

「返事は！」

「[[[[はい！]]]]」

「よろしい。それじゃ俺を倒せるようになってからまたかかってこい。ソレイユ！お前にはこれをやる！ラスボスからのヒントだ。」

メアはソレイユに黒い何かを投げる。それはエナジーのようだ。

『ブラックローズ！』

黒く透明のその機械は、低い声で鳴り響く。

「これが強化フォーム…。」

「ブラックローズだね。」

メアは割れ目を作り出し、ソレイユたちを包み込む。

「じゃあな。俺の敵。」

ソレイユたちはその場から消え去った。

「どんだん強くなれ。俺の息子よ。」

そう呟いてメアも自らを割れ目に包み、割れ目ごと消え去った。

南の都市 センニブル

大海原でのソレイユ

一行はフラワーの世界についてから宿を借り、そこに住みこんでいた。舞台は少し前のヨーロッパ風で、町の人も気軽に受け入れてくれた。

「反乱とかはそんなにないね。」

薔薇が言うが、ミラがそれを否定する。

「今はちよつと落ち着いてるだけで、本番はよるさ。」

ミラと薔薇の部屋と、サクラとレグルスの部屋で分かれている。

「ガランガラン」

ミラ達の部屋に、ベルが鳴る。

「僕が出るよ。はい?」

ミラが扉を開けると、そこには鎧を着た金髪の二十代くらいの気の強そうな女性が立っていた。

「誰…ですか…?」

女性はすぐに答える。

「私はジャンヌⅡハイヤー、ここ、ムウエンの騎士だ。君たちは… 仮面ライダーソレイユだね。今すぐに城に来てほしい。」

「失礼ですが、人間ですか？」

ジャンヌはフラワーワにしてはやけに人間すぎる。

「いや、私はサボテンだ。頑張つて人間に寄せてみたが、ところどころに棘や葉が残っている。ほら。」

「いやいや見せなくていいんですが。準備をするのですぐに待つていてください。」

ミラと薔薇はすぐに準備をし、サクラとレグルスを呼んだ。彼らも支度が整うと、一緒に城へ向かった。

「いやー。仮面ライダーというものに出会えて私は実に光栄だ。あ、私たちはドライバーになる訓練を受けてないので変身はできないんだ。まあ万が一の時には私のエンジーを使つて構わない。」

ジャンヌは昔から仮面ライダーのうわさを聞いており、仮面ライダーにあこがれていたのだ。

「ここが城だ。大きいだろ。私が《誠実なる青王子》のところまで案内する。ついてこい。」

おとなしくついていくと、そこには別名に《誠実なる青王子》を持つムウエンの王子

がいた。

「ムウエンへようこそ。仮面ライダーたち。私が君たちに任せたいのはただ一つ。ムウエンをナイトメアから守ること。ナイトメアによれば、ムウエンは君たちの世界の君たちの国とほとんど同じ形をしているらしい。ナイトメアは南から攻めると言い残した。今ならまだ間に合う。だから南から守ってほしい。頼んだぞ。仮面ライダー。」

王子直々に頼まれたことに、ミラ達は断るわけにはいかなかった。

「わかりました。」といい近くの船着場から南行の船へ乗った。

船にはジャンヌとその仲間四人が同行し、旅が始まった。思いのほか船は早く動き、すぐに大海原まででた。

「長い旅になりそうだね。レグルス、サクラ。」

「私は早く敬一に会いたいわ。それだけを目指して戦うの。」

「俺はナイトメアを知りたい。それだけさ。」

そんなことを話していると、いきなり騎士の一人が叫んだ。

「前からナイトメアマークの船が来た！戦闘用意！」

「なんだと!? 仮面ライダー！敵だ！変身の準備をしてくれ！」

敵船は大きく、どんどんこちらに近づいてくる。

「そこに仮面ライダーがいるな？」

船上の戦い

仮面ライダーソレイユと仮面ライダーカニバル、そしてサクラとジャンヌは敵の船上に乗り込み、戦う。

「負けねえよ！俺たちは強いからな！」

「そんなことない！私たちは仮面ライダーだ！はあああああ!!!」

ソレイユは棘の腕でパンチするが、それはしつかりと入らない。

「硬い……！」

彼女はもう一度同じくパンチをするが、またもや入らない。

「なんで……！」

「仮面ライダーも大したことねえな！」

今度は敵がこぶしを握る。そしてソレイユにパンチを入れる。

「うらあ!!」

「うっ!!」

パンチはソレイユの急所に入り、飛ばされたソレイユは倒れこむ。

「薔薇、いったん引こう。」

ミラがソレイユの体を操り起き上がり、自分の船に戻ろうとする。が、「そうはさせねえよ。」と道は敵に回り込まれていた。

「地球から来た仮面ライダーなんてしよせん人間だ。やつちまえ。」

ソレイユをパンチした上級っぽいフラーワが言うと、五人ほどのフラーワがだんだんと近づく。

「この世界は戦争真つ盛り。そこに足を踏み入れたらただじや帰さねえよ!!」

フラーワ達がソレイユにとびかかってきたとき、そこに閃光が走る。

「うわああー!」「なんで!」「ぎゃあ!!」

フラーワ達の悲鳴とともに、彼らが久しぶりに見る姿が現れた。

『あなやあなやといひけれど!はるのさくらのたたかへば!サクラー!』

仮面ライダー裂羅だった。裂羅は慣れたように剣を使って下っ端だと思われる敵を薙ぎ払ってゆく。

「いやー、騎士として鍛えた腕が光るな!」

仮面ライダー裂羅、それはムウエンの騎士、ジャンヌだった。

これにはレグルスも驚いて見ていた。

「サクラー!いいの?」

「もちろん!」

裂羅が参戦して形勢逆転かと思えば、意外にもそうではなかった。

「馬鹿か。一人がドライバーになってただでさえ少ない人数が減ってるじゃないか。俺たちも行くぞ。」

一人が言うのと、船の中からまた更に強そうなフラワーが出てくる。

薔薇に戻ったソレイユが攻撃してもなかなか入らない。

「またこのタイプか……！」

「俺は硬いよ姉ちゃん。実は俺の俺も硬いんだ。試してみない？」

一人のフラワーがソレイユに近づく。しかしその言葉にソレイユは彼を押し飛ばす。

「死ね！」

するとそれに怒ったのか彼はソレイユに襲い掛かる。

「調子に乗るなよてめえ！女だからって優しくしてればいい気になりやがって！死ね！」

死ね！うらあ！俺がぶっ殺してやるよ！」

彼はソレイユを押し倒し、興奮状態で彼女のマスクを殴りながら叫ぶ。

「お前を殺した後この世界と一緒にお前の体もばらばらに犯してやるよ！覚悟しとけ死ぬ！」

「あちゃー、あいつすぐ怒るし怒るとああだから好きじゃないんだよねえ。ま、僕たちは他から倒しますか。」

ソレイユはずつと殴られている。

「お前…… うっ…… ああっ……」

その間も裂羅とカニバルは戦い続けている。

「ほっ！はっ!!てや！」

「君たちもなかなか強いね！でも私は負けたくないよ！ほらっ！」

ソレイユが半分意識が飛んでいるところに、大きなユーカリの花が咲く。ナイトメアだ。

「ナイトメア様！今、仮面ライダーたちを倒しているところでした！」

ソレイユを殴っていたフラワーが立ち上がりすぐに挨拶をする。

「おおー、そうかそうか。でもこれは君の感情をぶつけてただけだね？残念ながらそんな花材は俺は求めていない。」

そういつてナイトメアは敬一のまま彼を蹴り、その勢いで彼は大海原に落下する。

「仲間にまでそんなことを……！」

「なんでそんな反応なんだよ。俺はお前たちが負けそうなところを救ったじゃないか。というかソレイユ！お前はブラックローズを使えてないじゃないか。」

ソレイユはブラックローズのエンジューを手取る。

「それだ。それを上手に使えばこのピンチを抜けることができたのに、全く俺は残念だ

よ。」

ナイトメアは今度はフラワーワに向けていう。

「お前らもなあ。あんまり強化怪人態を乱用したら自分の力に負けて危ないぞ。今日みたいな時はいいが、弱い市民とかのためには使わなくていい。こっちも残念だ。」

文句だけを残してナイトメアは自身の武器にユーカリのエンジーをセットする。

「邪魔して悪かったな。どっちも負けないように頑張れよ。」

『ユーカリ!』

武器からはユーカリの花が咲き、それが消えるとともに彼も消え去った。

「よし、再開しよっか。」

「うおおおお!!!」

ソレイユたちの船の戦いはまだ終わらない。

ブラックのソレイユ

戦を再開したソレイユたちは、まだまだ劣勢だった。

「ジャンヌー！これをー！」

ソレイユは裂羅に蒲公英のエネルギーを投げる。彼女はそれを受け取り、ドライバーに入れる。

『粘り根を張る 黄色の戦士！蒲公英！』

「おお！蒲公英か！これは使えるかもしれないね！」

ジャンヌは剣のスロットに蒲公英のエネルギーを入れ、それで敵をなぎ倒す。

これでやつと強いフラワーが一体倒れた。

「これで一体か。薔薇！ブラックローズを使ってみて！」

「うん！」

『ブラックローズ!!』

低い声の黒いバラのエネルギーは船上に鳴り響く。

ソレイユはそれを静かにドライバーにセットする。『フラワー：：フラワー：：』と待機音が鳴る。ソレイユの周りにはどこから生えてきたのか大きな黒いバラが咲く。

「お前らやつちまえ!!」

強いフラーワが攻撃するが、ライダーの変身中は無敵なので全く効かない。

「チェンジエナジー!」

ソレイユはエナジーをさらに押し込み、周りの黒いバラの蔓が伸び、ソレイユに巻き付き、締め付ける。そのせいか、彼女はかなり苦しむ。

「ああああああ!!!」

『その黒色は何の色!正義のためか悪のためか!ソレイユ!ブラックローズ!!フラーワ!!』

ソレイユの体は黒を基調としたバラになり、通常の赤いバラと形状もかなり変わっている。

「うらああああああああああ!!!」

ソレイユは強いフラーワをどんどん蹴散らしてゆく。

「おおっ!強いね!」

「そうだねグルス!私にはまねできないよ!」

しかし、ソレイユの様子が少し変だ。彼女は一体倒すたびに体に稲妻が走る。そのたびに彼女は苦しむ。

「ソレイユ!大丈夫かい?」

彼女は返事をしない。

「ああああああああああああああああ!!」

最後の一体を残して、ついに彼女は倒れた。

「あいつが倒れたらこっちのもんだ! うらっ!」

倒れたソレイユに最後のフラワーがキックを入れようとするが、横からレグルスがキックを見舞う。

「なわけないでしょ!」

フラワーは海に落下する。フラワーは全滅した。

「勝った…の?」

レグルスが言うとジャンヌが答える。

「これでこの船を沈没させれば勝ちさ。」

レグルスはソレイユを変身解除させ、自分の船に寝かすと敵の船から大きめのエナジーを見つけた。

「これか…」

彼はそれをポケットにしまい自分の船に戻った。

ちようどその時ジャンヌに氷を当てられた薔薇とミラが目を覚ました。

「は!! 船は?」

「今から沈没させるところ。それより大丈夫？」

「私は大丈夫。多分ミラも大丈夫だと思う。」

「僕は大丈夫。」

ミラは片手でグッドサインをする。

「いやー、みんな無事でよかった。さ、何もなければあと二時間ちよつとでつくよ！」

フラワー世界のあらすじ

一行はフラワーの船を沈めた後は、意外にも普通にも普通に走り、南の港へ着いた。しかしそこはとてつもなく荒れ果てており、海のほうが平和ともとられた。

壊れかけの看板には《センニブル》と書いてあった。

「センニブル市……僕は昔行ったことがあるけど、ずいぶんと荒れ果てたなあ。」

ミラは転がってる石を拾いながら言う。

「まさに激戦区、といったところだね。王子が言うにはこの辺に私たちの宿舎があるらしいが……」

ジャンヌは地図を見て、廃墟を指さす。

「ジャンヌ、まさかここじゃないよね？」

レグルスは嫌がるが、ジャンヌは首を横に振って入っていく。あとから彼らもついていくが、その中にはぎりぎりベッドと呼べるかどうかのものとラジオが人数分あるだけだった。

「とりあえず荷物おいて休もう。」

薔薇はベッドに荷物を置き、疲れた体を癒すために果物を食べる。それは敵の船に

あったもので、案外とてもおいしかったのだ。

「ミラ、一回この国の情報を整理してよ。」

薔薇はミラにみかんを渡す。

「わかったよ。まずこの世界は薔薇がいた地球より発展が遅れてる。ただたまに地球に留学に行ったりしてるからめちやくちや発展してるものもあるんだけど、基本的には遅れてる。」

「うん。」

「今回僕らの国、ムウエンが戦争状態に陥ってるのは隣国、《ランダン》からのいきなりの戦線布告からだといわれている。で、ランダンの元帥が僕たちの敵、ナイトメアだ。」

ミラはみかんのかけらを一つ見せて、食べる。

「ここまでは倫理的には何もおかしくはない。だけど問題はナイトメアのほうなんだ。彼はもともとムウエンの防衛大臣だった。けど上がナイトメアの要望に応えなかったかなんかでナイトメアは大暴れ、以後昔からのライバル国家、ランダンと裏で手を組みムウエンを破壊しようとした。」

そこでレグルスが口をはさむ。

「その時に、俺と仲間たちが一回はナイトメアを討伐したんだ。」

「そう、その時にはナイトメアを慕っていた人たちは内戦に巻きこまれてたくさん死ん

だ。」

彼はみかんのかけらを二つ一気に食べる。

「今回ナイトメアが一番上に立って支配しようとしてるのはなんでかが分からないんだ。普通に考えたら国の領土を広げるんだけど、ランダムは去年に広い領土を手に入れて大きいはずなんだよ。」

彼はみかんを食べ終わると、皮をレグルスに投げる。レグルスはそれをキャッチすると目の上で皮を絞り、痛がる。

「ほえー。それで人間の力を借りたってわけ？」

「いや、それが僕にはわからないんだ。僕は箱詰めされて薔薇の家で開封されるまでの記憶が一切ないんだ。きつとそれはサクラも同じだと思う。」

サクラは首を縦に振る。

「教えてやろうか？」

いきなり、聞きなれた声が聞こえた。

「あ、さつきぶりだな。ブラックローズは使えたか？これからいうことは全部真実だ。ミラ、サクラ、レグルス、薔薇、覚悟はできてるか？ああ、ジャンヌもいたか。」

空間に緊張が走り、全員がうなづく。

ソレイユの真実

「これを聞いたお前たちがどうなろうと俺は知らない。ただ俺を倒すことだけはあきらめるな。」

ミラ、サクラ、レグルスの三人は万が一に備えて怪人態になる。

「まあそう焦るなつて。」

彼は咳ばらいをし、改まって話し始める。

「まず今のミラの話の間違ったところから直そう。俺は上に何も要望なんてしてない。全部俺の勝手な判断で昔の戦争を起こした。あれから俺は植物を支配することにはまってしまったんだよ。」

ナイトメアは笑いながら言う。

「その戦争はなんで起こしたんだよ。」

「あの戦争は俺がランダン政府をだまして報復という名で起こした。ムウエン政府がランダンの国民をエナジーにしているつて言ったんだ。そしたらあいつらは本気にして戦争を起こした。そこで俺は元帥を任されたんだよ。」

ナイトメアは武勇伝のようにそれを語る。

「でその時、俺はレグルスに倒された。もしそうだったら今は元帥を任されてないだろう。レグルス、お前には感謝してるよ。レグルスは俺に日本円で三十億やるから倒れたふりをしてくれと頼んだ。俺は三十億をもらい、レグルスに首を落とされた。そのあと仲間の治癒能力で元に戻った俺は仲間たちと一緒にランダンへ戻った。」

レグルスは口笛を吹きごまかしている。

「なんでレグルスもそんなことしてるんだよ！」

「まだ話はあるぞ。ミラ！サクラ！お前が人間のところに送られた時の話だ。」

ミラとサクラは息をのむ。

「お前らを眠らせて箱詰めしたのはこの俺だ。その時はこの戦争は始まってなかった。そのあと戦争をおこし、その映像をお前らの脳内に植え付けて、適当な人間の住所に送り付けた。俺の予想通り、お前らは見事人間に助けを求めてここまでやってきた。よくできた話だろう？」

ミラは話は何も分かってないことに気づくと、それを一気にぶつけた。

「おい！いつたいなんでサクラの送り先がお前なんだよ！なんでお前は仮面ライダーを求めたんだよ！」

「ああ。敬一のごとは後々わかってくるだろう。俺が仮面ライダーを求めたのはただ刺激がほしかっただけさ。」

ミラは怒りナイトメアに襲い掛かろうとするが、レグルスとサクラが全力で止める。

「ついでに言つとくがレグルス！お前がフラーワドドライブバープロトを衝動的に手に入れようとしたのもあの時だけ割れ目が使えたのも偶然じゃないからな！」

「俺？それはうそでしょ。俺今でも割れ目使えるよ。ほら。」

レグルスは手で四角を描く、が、何も起こらない。

「え!？」

「俺はお前が初めて人間を乗っ取ったときにフラーワドドライブバープロトの映像をお前の脳内に一瞬だけ映し出した。その効果だ。お前が仮面ライダーになることは俺にプログラミングされてたんだよ。しかもお前と戦った時に五回だけ割れ目の力を使えるようにするって言っただろ！これに関してはお前が忘れてるだけだ！」

レグルスは自分の頭をたたく。

「それじゃあお前達の強さを見てやる。外にいるからかかってこい。」

「わかったよ！見てろよ、私たちの変身。」

ナイトメアとの闘い

「変身!」「変身。」「変身さ!」

『バラ!』『C o u r n i v o u r』『サクラ!』

彼らはナイトメアを追いかけて外に出る。外ではナイトメアも変身していた。

「さあ!俺にこの旅の成果を見せてみる!」

「うおおおおお!!!」

ソレイユは勢いをつけてナイトメアの腹にパンチを一つ入れる。

『蒲公英!蒲公英!』

そのあとすぐにエナジーを変え、三人に分裂する。

「はっ!!」

「動きがどんどん早くなってるな!いいぞソレイユ!うわっ!」

ナイトメアがソレイユに気を取られているすきにカニバルがそこにキックを入れる。

「レグルスもだんだん回復してきたか。」

しかしナイトメアも黙ってはいない。彼は地面から大きな木をはやす。それはユー

カリの木だ。

木は自由自在に動き、ソレイユをなぎ倒す。

「そっちがそれなら俺はこれだ!」

カニバルが地面に手をかざすとそこから巨大な食虫植物が出てきた。それはナイトメアのユーカリの木と戦っている。

「なんだやるじゃないか。ただまだ俺に強いダメージは食らわせられてないがな。はっはっは。」

ナイトメアは武器を持つ。

『ナイトメアドリル!』

『ナイトメアフラワー!』

ナイトメアフラワーのエナジーをドリルにセットし、ナイトメアは技を繰り出す。

「ソレイユ、カニバル! まだまだだ! はっ!!」

ナイトメアはドリルをソレイユに近づけて振り回し、当て、ソレイユは飛ばされる。同じことをカニバルにもやる。

「うわあ!!」「痛い!」

そして二人をまとめて、飛び上がり、ライダーキックをする。その時のナイトメアはドリルのようだった。

「なかなかやるなと思ったがまだまだだなようだな。ん?」

ライダーキックをし終えた仮面ライダーメアの腹からは何かとがったものが貫通していた。

「お前……いつの間に……!?!」

「私はムウエンの騎士だ！ 気配を消すのもお手の物さ！」

裂羅が剣を抜くと、ナイトメアは変身を解除した。

「おいおい。ブラックローズを使っただけじゃないか。仕方ない。これはお前にやろう、ジャンヌ。」

ジャンヌは花瓶のようなものをもらう。それは半透明でボタンがついていた。

「それは！ ソレイユの強化アイテム……」

ボロボロのレグルスが言う。

「薔薇！ ブラックローズの時に苦しまずに変身できるアイテムがある！ だから起きて！」

薔薇はレグルスに起こされる。

「ふえ？」

ジャンヌはそれを受け取り、ボタンを押す。

『フラワーベース！』

「ベースは英語で花瓶。それはソレイユがブラックローズに変身するときエナジーか

ら分泌されるエネルギーを軽減するアイテムだ。もちろん、直接変身したほうが力は強いが、その分自分に与えられるダメージも強い。だがそれがあれば自分へのダメージはほぼゼロになる。代わりに力は少しだけ弱まるが今のお前には十分だろう。どうだ。まあせいぜいがんばれよ。しばらくしたら俺は北に行く。その時にまた声をかけるよ。」

そのあと、ミラ、薔薇、レグルスの三人は二人に介抱されて傷を治した。彼らの戦いはまだまだ続く。

仮面ライダーのひなた

フラーワの世界の小さな国、ムウエン、その中の南にあるセンニブル市は戦争の真つ盛りだ。そんな中、一人の人間の女性が立ちあがった。彼女の名は、ひなた。苗字はない。

「この戦争、あたしが終わらせてやるよ!!」

『フラーワドライブバー!』『ヒマワリ!』『フラーワ: フラーワ: フラーワ: フラーワ:』

彼女は自分から激戦区に行き、ドライブバーをつけ、変身する。

「変身!」『太陽に向かう大きなフェイス! ヒマワリ! ヒマワリ!』

天真爛漫な彼女は仮面ライダーだ。十年前にフラーワ世界に迷い込んでからずっとフラーワに育てられ、今はフラーワ達を悪から守っている。

「私はフラーワの平和を守るライダー! 仮面ライダーサン!」

そういうと彼女はランダンの強化怪人態フラーワに一つ蹴りを与える。するとそれは彼女の力に耐えられず、その場で爆発とともに消滅する。しかもそこにはそれのものとされるエナジーが落ちる。

「あたしにはこれは使えない。」

彼女は寂しそうにエナジーを拾い、見て、それをポケットに入れる。

「いつかあたしにも人間の恋人ができるのかな。」

彼女は恋に飢えている。長年フラワーワしか見ていないので、一度でも人間を見てみたいのだった。

「俺が恋人になつてやるよ。」

彼女に声がかかる。

「誰？」

「俺は湊敬一。お前と一緒にフラワーワ世界に迷い込んだのさ。」

彼は湊敬一、人間、のふりをしたナイトメアだ。

「ほんと!？」

「ほんとだよ。だが俺は十年以上お前以外の人間を見ていない。だから俺も恋がしてみたいんだ。俺がお前の恋人になりたい。恋人じゃなくても、人間同士仲良くしよう。」

「なりたい!あたしあんたと恋人になる!あたしの名前はひなた!よろしく!」

「これで今日から俺とお前は恋人同士だ。さて、お前はナイトメアからムウエンを守りたいんだろ？」

ナイトメアはうまい口で彼女を誘っていく。

「ああ。」

「だったらいい情報を教えてやる。もうすぐナイトメアに言われて地球から仮面ライダーがやってくる。彼らはランダン軍を攻撃するふりをしてこの地を征服しようとしてるらしいんだ。その名はソレイユ、裂羅、カニバルだ。お前の強さなら簡単に勝てるはずだ。」

彼女は彼がナイトメアだとわからないまま、標的をソレイユに当てる。

「わかったよ。あたしがこの国を守る。」

ナイトメアは彼女が簡単に了承してくれたのでともうれしがる。

「面白くなってきたぞ〜。」

彼は自らの基地に戻ろうとする。彼女はそれを引き留める。

「敬一、あたしたち恋人だよね。」

「ああ。付き合いたての恋人が一日中一緒にいられるわけじゃない。じゃあな。」

彼女が腑に落ちないまま、ナイトメアはがれきの陰に消えていく。

「まあいつか。」

彼女は気を取り直してランダン軍のフラワーと戦いに出ていく。

サンとの闘い

ソレイユ一行がセンニブルに来てから一日が経った。傷は治ったが、いろいろ疲れたという理由でずっと廃墟で休んでいた。

「そろそろ、本来の目的にうつりますか。」

薔薇が言う。薔薇以外のみんなは全員健康だったので勿論了承し、その場を後にする。

「で、全滅させればいいんだっけ？」

「そうだ。仮面ライダーの使命はそれさ！」

ジャンヌは外に出ると一目散に敵に攻撃を仕掛ける。

「はあ！」

彼女は剣でフラワーを一刺し、できなかつた。

「なんで!？」

彼女が戸惑っている間にフラワーは彼女を投げ飛ばす。

「うわあ！」

彼女は変身したカニバルにキャッチされた。

「敵がどんどん強くなっていく！」

それを聞いた薔薇たちはすぐに変身する。

『蒲公英！』『Counivour』

ソレイユはさつきジャンヌを投げ飛ばしたフラワーを攻撃する。

「はあ!!」

しかしそのフラワーはとても硬い。簡単にはダメージを与えられなかった。

「それでも数を増やせばこっちのもの！」

蒲公英のソレイユは三人が増え、同時に攻撃をする。

レグルスは敵を吊り上げて落とすという作業を繰り返していたが、食虫植物は剣によって切られ、自身で戦うしかなかった。

「なんでこんな硬いの！」

ソレイユたちは全然ダメージを与えられない。ただ一方的にやられているだけだ。

とそこに、ある一人の仮面ライダーが来る。それは橙色を基調としたかわいらしい見た目のライダーだった。

「最近はランダム政府の非人道的な花体実験で強制的に体を硬くさせられたフラワーが増えている。それはお前らが知ってることだろ。ソレイユ、カニバル、裂羅。今からあたしはお前らを倒す！」

それはソレイユが戦っていたフラワーを一撃で倒しながら言う。

「ちよつと待つて！あなたは誰で、なんで私たちに敵意があるの！」

薔薇が聞く。ライダーは剣を持ち、いう。

「あたしは仮面ライダーサン。恋人に言われてムウエン侵略の人間を倒すという使命を持った。」

サンはまずレグルスのほうに向かった。

「俺?!いいよ。かかってきな。」

レグルスはいつものようにサンの下に食虫植物をはやし、吊り上げる。

「卑怯な手は嫌いだ！」

しかし、サンはその頭を切り落とし、空中からレグルスのほうに向かってくる。

「なんで?!」

「うおおおお!!」『ヒマワリ!』

サンはレグルスを切り落とす。

「うわああああ!!」

レグルスは大爆発を起こし、飛ばされる。

「こんどはお前だ。」

サンはそのままの勢いで今度は裂羅に向かう。

「仕方ないね！私の剣術、見せてやろう！」

裂羅はサンの右に行き、上から切り落とすと見せかけて足に怪我を負わせるという手を考えていたので、まず右に向かった。しかし、サンはそれが読めていた。

「あたしの剣術のほうがまだ上だ！」

裂羅はサンに胸を刺されると悟ったので、それをよけるためによろける。が、そこを狙われてしまった。

「はあっ!!」

裂羅は何も言う暇もなく、サンにやられてしまった。

「最後はお前だ。」

サンは迷いもなくソレイユに近づく。ソレイユも戦う準備をする。

『バラ！』『仕方ない。チェンジエナジー。』『激しく燃える、情熱の赤！バラ！』

ソレイユはローズフォームに変身し、準備は万端だ。サンも剣を強く握り、襲い掛かる。

サンとソレイユの戦い

サンはソレイユに持っている剣を突き刺す。しかし、ソレイユは全くよけようともせず、そのまま刺された。

「ぐっ…！」

「お前、なんでよけようとしなかったんだよ。」

ソレイユは腹に剣が刺さったまま言う。

「ふふ、よけようとはしたよ。」

サンは笑っているソレイユに混乱して言う。

「そんなわけねえだろ！あたしの目をなめるな。」

サンは深く突き刺し、とうとう貫通した。

「うっ…！私が今本気の戦いをしたら、君は負ける。そしたら君と君の恋人は悲しい気持ちになるだろう。だから私はよけなかったの。」

サンはその言葉に怒り、剣をソレイユから抜く。

「あたしは本気の戦いを求めてるんだ。お前の勝手なやさしさなんていらない！」

「抜くと結構ダメージ食らうんだね… 本当がいいんだね？」

「ああ。死んでもいい。」

ソレイユはブラックローズのエナジーと、花瓶のエナジーを出す。

『ブラックローズ!』『フラワーベース!』『フラワー…: フLOWER…:』

「チェンジエナジー!」

『パワーサプレッション! その黒色は何の色! 正義のためか悪のためか! ソレイユ』

ラックローズ!! フLOWER!!』

「あたしが求めてたのはこれさ!」

走ってきたサンに切り付けられたソレイユはそのまま剣を跳ね返した。

「硬い…!?!」

ソレイユはそのまま自分の攻撃に移る。

「ロゼリアソード!」

彼女の手の上には剣が出てくる。彼女はそれを持ち、風を切る音が聞こえる速さでサ

ンを切り付ける。そしてサンが倒れたところで剣を突き刺し、高く飛ぶ。

「本気で戦ったら負けるって言ったよね。ブラックニードルライダーキック!!」

彼女に棘のエフェクトがかかり、一直線にサンに刺さり、着地する。サンは大爆発と

ともにそこに倒れた。

「これがブラックローズの力か!」

彼女は変身を解除する。裂羅とミラはかなり疲れが出ている。すると、そこへ一人の男が現れた。

「すまないなあ、ソレイユ。俺の恋人が迷惑をかけた。あ、今回は助言も何も無い。ただこいつを連れて帰るだけだ。」

ナイトメアだった。ナイトメアは変身が解除されて気を失っているサンを割れ目で包む。

「じゃあな。ブラックローズ、よかつたぞ。」

彼自身も割れ目の中に入り、消え去る。

「つてお前の恋人だったんかい！ どうりでおかしいと思った…」

薔薇はみんなを起こし、ひとまずは廃墟へ戻る。

「いやあ、ブラックローズは恐ろしいなあ!!」

「ほんと、俺でも倒されちゃうと思う。はは！」

そこでは薔薇によるブラックローズ武勇伝が語られていた。

「うん、とつても恐ろしいよ。ブラックローズは…」

ミラだけは本当に怖がっていた。ブラックローズの負担は使用者だけでなく、ドライバーもかなり強い。しかもドライバー側はブラックローズの力を使用者より多く受けるのでミラは変身するたびに気絶しかけていたのだ。ミラはただでさえ大きな薔薇の

ソレイユの力には耐えてきたが、ブラックローズの力にはもう耐えられないことを悟つて今度、ソレイユに言うつもりでいる。

ミラの秘密

薔薇たちはセンニブル市での防衛をしながらもう一か月がたった。三週間目くらいから敵の量が減ってきてきてだんだん優勢になってきたのだ。今日もいつものようにソレイユが戦っていると、そこにはナイトメアが変身してやってきた。

「ちよつと久しぶりだな。今回はミラに話があつてやつてきた。」

ナイトメアは戦う意思がないのか、変身を解除する。

「僕に話つて、いったい何？」

「お前もこいつらに聞かせたくないと思ふからちよつと来い。」

ソレイユは少しためらつたが変身を解除し、ミラを行かせた。

ミラもナイトメアについていく。建物の後ろでナイトメアは話をする。

「ミラ、グリーンウッドは俺からこの国を守りたい。それは正しいな？」

「ああ。」

「最初に言つておく。今のお前じゃそれは無理だ。」

「なんでお前にそんなことがわかる？」

ミラは自分を勝手に下げられ、怒るが、次の言葉で驚愕する。

「当たり前だろう。俺は本当のお前を知っているからだ。」

「本当の僕？僕は記憶力はいいはずだが……？」

「それが全部箱詰めされるときに俺が書き換えたとしたら？」

ミラは焦る。自分の昔からの記憶がすべて正しいとは言い切れない。

「まあ今回はそんな話をしに来たわけじゃない。お前の体の話だ。」

ナイトメアはミラの焦りを全く気にせず話を変える。

「僕の体？」

「そうだ。お前、ブラックローズの力に耐えきれてないだろ。」

「そんなことない。」

「俺はお前よりお前を知っている。安心しろ。」

ナイトメアはミラの治っていない傷を指さす。ミラは傷を隠すように言う。

「敵に言うわけないだろ。そんなこと。」

「じゃあ仕方ない。一応言っとくが、お前はそのまま我慢していたら数回のブラックローズフォームの変身で死ぬ。お前が死んだら澤谷薔薇はとても悲しむ。しかもこの世界はこのまま俺たちに支配される。それでもいいってことだな。」

ナイトメアは少し脅すように強く言い、消えようとする。

「待って！僕に助かる方法を教えてください。」

「そう来なくっちゃ。助かる方法はただ一つ、強化怪人態になることだ。まあ強化怪人態になった時のデメリットは少なくないがな。」

ミラは数秒悩み、答える。

「僕、強化怪人態になるよ。」

ただ、ミラは強化怪人態のなり方を知らない。というか知っていたらもうすでになっていることだろう。

「強化怪人態はお前の身体的能力を倍以上に一気に上昇させる。そのトリガーはお前のパートナー、薔薇にある。ソレイユがサンに刺されたとき、お前はなりかけていた。」
「その理論でいえば、薔薇の傷が僕の力を引き出している…?」

思えば、ソレイユが初めて変身したとき、彼は薔薇に強大な力を感じていたが、ソレイユが劣勢の時はミラ自身の力が大きくなっていることがミラも感じていた。

「そんなこと…僕にはできないよ…。」

「それが愛つてものだ。ミラ。」

ミラは無意識のうちに薔薇が傷つくことを否定していた。

「愛…それだ！」

「やっとなかったかミラ！俺はお前の成長を見てとてもうれしいよ！フラワーも人間も感情の価値は変わらない。さあ、帰った帰った！お前の使命は平和を守ることだ！」

「ありがとうナイトメア！」

ミラは薔薇たちのもとに走る。それを後ろから見るナイトメアはやはり物影にいき消え去った。

「ミラ！ いったい何を言われたの？」

「いいの！ さ、戦争の続きだ。」

ミラはドライバーになり、ミラの腰に巻き付く。

「みんな、いこっか！」

「うん。」「ああ！」

サクラはジャンヌの腰に巻き付く。

「「変身！」」

北国 シルヴァン地方 北国への移動

ソレイユたちの防衛により、ムウエン南部、センニブル市に攻めてくるランダン軍はほとんどいなくなつた。しかしその代わりに、ランダン軍は北から侵略することをムウエン政府に宣告していた。しかし、防衛ができていない仮面ライダーたちに対し怒り心頭だつたムウエン王家は、彼らを強制的に城まで戻させた。

薔薇たちは、《誠実なる青王子》の説教を聞くために集められ、城の硬い床に座らされていた。

「ミラ、俺たち早く北に行つたほうがいいんじゃないのかなあ?」

レグルスが小声でミラに話しかける。

「僕もそう思うんだけど、相手は王子だ。絶対勝手に行つたら怒ると思う。」

「当たり前でしょ。二人とも静かに待つてなさいよ。」

サクラが二人をまとめる。すると、《誠実なる青王子》がやってきた。もちろん、表情はきつく、怒っていた。

「全く、私は君たちの適当さに怒っている。仮面ライダーとは名前だけなのか全く。今

から君たちには北国のシルヴァン地方へ行ってもらおう。返事は待たない。すぐに行け。絶対に守れよ。」

王子は怒りを乱暴にぶつけることなく、ジャンヌ達に薔薇たちを連れて行かせた。北国までは蒸気機関車が通っているので簡単に行けるた。

蒸気機関車は城から田園地帯を抜け、黒い煙が立つ工業地帯に通った。

「ここ地下に《秘密結社エボル》の基地があるんだよ。」

レグルスが言う。レグルスは懐かしそうに外を眺める。しかし、戦時中だからなのか人は誰もいなかった。

そのあとまた田舎の線路を通り、長いトンネルに差し掛かった。するといきなり、トンネルの中で蒸気機関車は止まった。

乗務員が客車にやってくる。彼はしかめっ面で話す。

「すまない。ここで機関車は行き止まりだ。トンネルを抜けたら線路に深い雪が積もってるんだ。」

薔薇たちは客車を降りてみると、レグルスの肩のあたりまで雪が積もっていた。

「これじゃ機関車は通れないね。」

「私たちならいける。行くよ、ミラ。」

「え？ああ。」

ミラは薔薇の合図で彼女の腰に巻き付く。

『パンジー!』『フラーワ:…フラーワ:…』『変身』

『耐寒のコモンフラワー!その顔は何を言う? パンジー!』

仮面ライダーソレイユはパンジーフォームに変身をする。パンジーは寒いところに強いのだ。

「パンジーリムーバル!」

ソレイユの手はパンジー模様のスコップになり、それは巨大化し、一気に雪をどかす。すると、大きな街が見えてきた。

ソレイユは変身を解除し、走っていく。あたりは真っ白で、反射した日光が彼らを輝かせる。

「雪ってテンション上がるね!!」

レグルスは雪で遊び始める。

「戦争なんて関係ないや!」

ミラも遊び始めるが、サクラが二人を止める。

「いくわよ、もう!」

街はセンニブルほど壊されてなく、足りないのは人だけだった。宿もちゃんとしており、一人一部屋暖かい部屋だった。早朝だったが明け方全く寝ていない薔薇たちは、宿

についたらすぐに休んだ。

「おはよう！ 薔薇！」

薔薇がうとうとしていると、窓からナイトメアの声がした。

「わわわ!! 何もう！ ひとが一番気持ちいいときに！」

「邪魔して悪かったな。一つだけ報告に来た。」

薔薇は裸眼じゃ何も見えないので、眼鏡をかける。

「何？」

「ミラの兄が時空の割れ目の隅に遺体で見つかった。」

薔薇はミラの兄、デイフダのことを思い出す。

「それって結構前じゃない？」

デイフダが上に丸く収めるようにと行って帰ったのはかなり前のことだ。

「そうらしい。あいつは結構かわいい部下だった。ミラと同じでもともとの力はないが、その分伸びしろが相当あるから惜しいやつをなくしたよ。」

ナイトメアは悲しむ。

「お前がやったんじゃないの？」

「俺はあの時湊敬一としてラフレル達と戦っていた。サクラも一緒にいた。」

「じゃあ、ほかにデイフダ殺しの犯人がいるってこと？」

「そうなるな。まあ気が向いたら犯人探しを手伝ってくれ。あ、ついでに言っておくが、俺らにとつてもこの地は相当寒い。だから朝や昼は軍が起きれないから夜にやろう。頼むぞ。」

「なんだそれ。」

ナイトメアはそれを言い残すと帰っていった。薔薇はミラにはそれを伝えなかつた。



ナイトメアはランダンに帰るときは必ず変身して帰る。ランダンの王は人間が嫌いだからだ。

「お前らもよくやるよ。全く。俺に感謝しろよ。」

ナイトメアはランダンの王に言う。

「ムウエン侵略の件については、本当に感謝しているよ。だが、もうこの城に金はほとんどない。月三億なんてくるっている！」

「はははは。金がなくなったら俺はこの国から出ていく。死んでも金を集めろ！まあムウエン侵略が達成できたらそこから巻き上げればいいさ。」

王とナイトメアは笑う。王はその言葉の安心さに、ナイトメアはその言葉を簡単に信じる王に笑っている。

いきなり、ナイトメアのマスクの下の顔から笑みがなくなる。

「ああ、俺はこの国が心配だよ。」

「どうしてだね？」

「ムウエン侵略を目標にしたらムウエンに全部兵を出しちまうんだもんなあ。馬鹿げたことだよ。」

王は意味が分からず首をかしげる。

「今ならランダンはどつからでも攻め放題つてこととき。ついでにお前も殺し放題。」

ランダンの王の後ろから召使の人間の女性が来る。

「はははは！お前ごときが私を殺そうなどと考えるな！私は王だ！この国の！この世界の！」

召使の女性は立ち上がり、王に会釈をする。ナイトメアは腕がとがった葉になる。

「おい召使！この危険な思想の持ち主の相手をしろ！」

「わかりました。王様。」

女性は素晴らしい、ランダンの胸に自身の剣を突き刺す。

「そんなことをしていいと思ってるのか!？」

その問いにはナイトメアが答える。

「残念ながらこの国の、この世界の王は俺だよ。」

ナイトメアは玉座から小太りの男性の死体を蹴落とし、そこに座る。

「これからは俺らの国だ。ひなた。」

「やっとあたしを名前で呼んでくれたね。敬一。」

召使の人間の女性とは、仮面ライダーサン／ひなたのことだった。

ミラの暴走

ジャンヌの仲間は五人いる。全員訓練施設で知り合つて、彼女の同期といったところだ。すべてサボテンのフラワーで、ジャンヌと同じである。彼らは初めて仮面ライダーに変身したジャンヌを隅から隅までサポートしようとしている。名前はトーマス、ヘンリー、デリック、ジャック、ヒューイだ。



夜、ナイトメアの宣言通りランダン軍は街に攻めてきた。もちろん薔薇たちはすぐさま反応し、変身する。

「市民の皆さんはすぐに安全な建物の中へ逃げて！」

ジャンヌの仲間達が市民を保護する。その間にもソレイユたちはランダン軍と戦う。

「うらっ！なんでまた強くなってるんだよー！」

レグルスはセンニブルの時よりランダンの兵が強くなっていることに気づく。

「本当だ！攻撃が全然入らない！よし、ミラーブラックローズを使うよー！」

ソレイユはブラックローズのエナジーを出し、フラワーベースのエナジーに入れる。

『ブラックローズ！』『フラワーベース！』

その音は、ミラにナイトメアの言葉を思い出させる。

《あと数回でお前は死ぬ。》

「…… ああ…… 強化怪人態になれるまで耐えてやる……!!」

ソレイユはそんなミラのことなど気にせずチェンジエナジーをする。

「チェンジエナジー!」

『パワーサプレッション! その黒色は何の色! 正義のためか悪のためか! ソレイユ
ブラックローズ!! フラワー!!』

ミラには稲妻が走る。

「こんな量も一瞬っていうのがブラックローズの力だ!!」

ソレイユは敵兵の周りを走り回る。すると敵兵は爆発しながらどんどん消えていく。
最後、大爆発とともに敵兵は全滅した。

「やった!」

彼女らは一昨日の侵略を防げたことに喜ぶ。しかし、爆発の中から一人、フラワーが
出てくる。

「まだ生きてるランダン兵がいるのかい?」

彼はのそのそとソレイユたちのほうへ近づく。そして裂羅の前で止まる。

「私に何かようかい?」

裂羅は聞くが彼は答えない。

「変身。」

彼の腰にはドライバーがついていた。彼はドライバーにエナジーを入れると、彼の周りのみ泥沼になり、そこからは大量の目玉が出てくる。途端、きれいな花が咲いたと思えばそれは分解されて彼に張り付く。

『マッドのマッドなモッドライダー ハンドレッドの目！ ハス！』

彼は変身後も落ち着いている。

「ランダムもムウエンに手加減してる場合ではない。ここでは真面目にやらせてもらう。」

彼は地面を泥にして、攻撃を始める。

「なんか動きにくい!!でもこれで!」

『粘り根を張る 黄色の戦士!蒲公英!蒲公英!』

ソレイユはダンデリオンフォームになり、増殖する。

「増えても一緒だ。はあっ!」

敵はソレイユ三人を一つにまとめてライダーキックを見舞う。その時ソレイユは逃げようとしたが、体が動かなかった。

「マッド・ライダーキック!!はああああ!!」

ソレイユは見事にやられる。ほかのライダーも見るだけにはいかない。

「ソレイユ!!俺も黙っちゃいられない!おらっ!!」

敵の下には大きな食虫植物が生え、持ち上げる。

「はあ!カニバル・ライダーキック!!」

カニバルのライダーキックは決まった。敵は落下し、地面に倒れこむ。

「ナイス!カニバル!」

しかし、彼は立ち上がる。

「ムウエンのライダーはこんなものか...ぬるい...」

彼は埃を払いながら自己紹介をする。

「俺はハリー。仮面ライダーマッドだ。ランダンの未来のために戦っている。」

そう言い残すと、ハリーは物影に隠れ消え去った。

ソレイユは起き上がり、変身を解除し、宿に戻る。

宿では、薔薇がミラの部屋で座っていた。

「ミラ、話があるの。」

「なに?」

薔薇は決心した。ミラなら現実を受け止めてくれると思ったのだ。

「デイフダの遺体が見つかったんだって。」

「兄さんの遺体が……」

ミラは驚きを隠せない。今頃、なぜ。

「遺体には刺された跡があつたらしいんだ。」

「誰かが兄さんを殺したんだね。初めて会つたのに。僕の大切な兄を……」

ミラの様子がおかしい。薔薇はそれに気づきミラに抱き着く。

「やめてよ薔薇。犯人はこの中にいるかもしれないでしょ?」

ミラは薔薇を振り払い、窓を割り広い外に出る。薔薇はジャンヌ達を呼び、ミラを止めようとする。

「僕の兄、ディフダを殺したのは誰だい?」

「ナイトメアじゃないの?」

「薔薇がナイトメアじゃないって。君たちのだれかじゃないかな。」

ミラは興奮状態に陥っている。

「ああ、僕ももうすぐ死ぬからもういいかなあー。仲間も敵も関係ない。僕の怒りが収まるまで倒し続けるよ。」

「ミラもうやめて!」

薔薇は止めるが、ミラは続ける。

「薔薇もさあ、僕の気持ち考えてよ。君が変身するたびに僕にダメージが入ってるの!」

わかんないかな？あとかつては敵だったけどたった一人の家族が殺されたの。君にはわからないよね。」

ミラは姿を変える。それは、ミラの強化怪人態だった。

「薔薇気を付けて！ミラが自分の力を制御できてないと思うの！」

ミラは強化怪人態のままフラワードライバーとしてミラの腰に巻き付く。バラのフラワーエナジーが勝手に引き寄せられ、薔薇は変身する。

「ミラ…なんで…!!」

「知らない。僕が兄さんに愛があつたつてことじゃない？どうでもいいや。みんな僕が倒してやる。」

ミラはソレイユの体を操り、ジャンヌやレグルス達に襲い掛かる。

「どうやらミラを止められるのは俺達しかいないみたい。ジャンヌ、サクラ、行くよ！」
「変身！」

『Carniv Ca Ca Carnivorous』『あなやあなやといひけれど！はるのさくらたたかへば！サクラ！』

それに対抗したのかソレイユはエナジーを変える。

『ドライフラワー！ バラ！』

バラのエナジーに見たことのないエナジーをかぶせるようにセットし、チェンジエナ

ジーをする。

「僕は人間を消す。チェンジエナジー。」

『ドライドハートは還らない！ドライフラワー・バラ！！ フラーツワ！』

彼自身、自分を見失っていた。しかしそれはもはや彼自身で止められる問題ではなかった。

「今の僕は… わからない！」

仮面ライダーソレイユ、ドライローズフォームはミラの心も乾かした。

マッドとの闘い

仮面ライダーソレイユ・ドライローズフォームは自身を見失い、レグルス達に襲い掛かった。

「これたぶん一回倒さなきゃだめだと思う。」

カニバルは冷静に考え、ミラと戦う。

「はっ!! うらっ!! ミラ… 強いね… でも負けない!!」

ソレイユは黙ってカニバルを攻撃し続ける。後ろから裂羅が攻撃しても、それを無視して続ける。

「ミラ! 君の攻撃はワンパターンかな?」

カニバルはいつものように地面から食虫植物をはやそうとするが、ミラの攻撃の勢いでそれをする事ができない。

「やばいかもしれない…」

カニバルはソレイユのパンチが一撃入ったようでその場にうづくまる。

「ミラもうやめて!!」

あきらめて変身を解いたサクラが叫ぶが、聞かない。

ソレイユはそのまま高く飛び上がり、カニバルにライダーキックを決める。

「ドライブ・ブレイク!!」

「うわあああああ!!!」

カニバルは大爆発を起こす。その爆発の勢いでソレイユは変身が解ける。

「レグルス!!」

薔薇はレグルスのほうへ走る。一方ミラはその場で固まっていた。

「僕は一体……なんで自分のフォームチェンジで自分がわからなくなるんだ……?」

ミラは考える。そこに、激怒したサクラが怒鳴りこむ。

「ミラ!!自分が何をしたかわかってんの?」

サクラは人間態になり、ミラの顔を平手でたたく。

「サクラ……みんなごめん……僕……強化怪人態になると、自分がわからなくなるんだ。

まるで僕の中にもう一人僕がいるみたいに……」

ミラは涙とともに訴える。すると、ジャンヌの仲間、トーマスが言う。

「でも、ミラさん……ブラックローズの時は強化怪人態にならないと死ぬって……」

トーマスはミラとナイトメアの話をつままたま聞いていたのだった。

「ナイトメアと話してましたよね。」

ミラ以外の仲間はそれを聞いて驚く。

「ミラ！そんなことなら早く言つてよ！私もブラックローズ使わなかったのに！」

薔薇は自分が気づけなかったというおろかさ自分に自分を責める。

「やめて薔薇……」

「やめないよ！ミラ……私の力はあなたがあつてこそなの！あなたが死んだら……私は生きていけない……」

ミラと薔薇は互いを見て涙を流す。

「じゃあ僕と薔薇は一旦距離を置こう……」

ミラが沈黙を破り、怪人態になる。

「あなたが死なないためには、あなたと離れることが大切かもね……」

「ちよつとミラ！薔薇も嘘ばかりじゃない！」

サクラが双方を止めるが、ミラは遠くへ歩いていく。

「これでいいの。今のミラとは、一緒に戦えない……」

薔薇の言葉はミラには聞こえていなかった。

レグルスを宿に運び、あたりは暗くなる。

夜になつても、ミラは帰つてこなかった。しかし薔薇は心配する素振りも見せなかった。ジャンヌが薔薇を呼ぶ。

「薔薇ー、防衛に行くがくるかい？」

サクラがジャンヌを止めたが、ジャンヌはやめなかった。

「行くよ。」

薔薇はジャンヌの仲間、デリックから借りた甲冑を着て前線に出る。この時レグルスは気を失っているのです、仮面ライダーは実質一体だけだった。

戦は始まる。甲冑を着ただけの薔薇の力は小さく、ジャンヌもあわてて変身する。

「変身！」

『あなやあなやといひけれど！はるのさくらなたたかへば！サクラ！』

「はあっ!!それっ!!やっぱり…硬い…!!」

強化怪人態のフラーワはとても硬い。それはミラも同じで、だから裂羅が攻撃しても無視できたのだった。気づけば、敵に薔薇が吹き飛ばされていた。

「裂羅!!これを！」

薔薇は裂羅にエナジーを投げる。すぐさまそれをドライバーに挿入する。

「ありがとう！チェンジエナジー！」

『激しく燃える、情熱の赤！バラ！』

裂羅はローズフォームになった。

「これがソレイユの力!!」

裂羅の腕からは棘の蔓が伸びる。蔓は敵をまとめ、そこにライダーキックを入れる。

「裂羅・バラ蹴!!」

裂羅は敵を倒す。だがまたもや爆発の中から仮面ライダーが現れる。
「また会ったな。俺だ。」

マッドだ。マッドは何かを探すようにあたりを見回す。

「お前は裂羅だな。ソレイユがいないなら俺はお前を倒す。」

薔薇が前に出ようとするが、裂羅が止め、先に出る。

「上等だよ。私がお前の相手になってやろう!」

裂羅はバラの力で攻撃するが、マッドはそれをいとも簡単に跳ね返した。

「お前の生ぬるい攻撃など俺には効かない。俺は本物を求めている。」

「私の力を知らないのかな! 騎士の道はそう甘くない! 厳しく鍛えられているんだよ!」

二人はぶつかり合う。剣を持ち、それで戦う。

「ああ! どうやらここではソレイユより活躍できるようだね!」

裂羅は剣のスロットにサクラのエナジーをセットする。

『サクラ!』

「はあ! 裂羅切!!」

彼女はマッドのほうに走っていき、切り付ける。

が、マッドはそれを剣で受け止める。

『ハス！』

「お前見習いか？おらっ！ロータスデッドアタック!!」

マッドは裂羅より強い力で裂羅を飛ばし、彼女を切り付ける。

「うわああああ!!」

裂羅は切られ、その場に落下し変身が解ける。

「これで終わりだ。」『ハス！』

彼はエナジーをドライバーに戻し、飛び上がる。

「マッドマッドサッドネス!!」

「やめろおお!!」

彼がジャンヌにライダーキックを入れようとしたとき、ジャンヌとマッドの間にフ

ラーワが駆け込む。

「よせ!!」

「はああああ!!」

「俺が止めて見せる!!」

その間に入ったのはジャンヌの仲間、トーマスだった。彼は体の力を全部使い、マッドのライダーキックからジャンヌを守った。

「ジャンヌ：…俺は君の男にはなれませんでした：…だけど！最期に君を守れてよかったよ！早く逃げてください！ジャンヌ！サクラ！」

「逃げれるわけないだろ！」

「もう…だめだ…!!」

トーマスはもう限界だった。マッドはそのままキックを続ける。

「余計な邪魔が入ったか！死ぬ!!」

「うあつ!!!」

サクラがジャンヌを運ぶと、マッドはトーマスを貫通し、爆発した。

「トーマス！」

ジャンヌは地面をたたき泣き叫ぶ。爆発が収まっても、そこにはマッドがいるだけでトーマスはいなかった。

「残念ながらあいつなら死んだ。」

「うわああああ!!!」

ジャンヌはマッドにとびかかる。

「死ぬ！死ぬ！お前なんてフラァーワじゃない!!私の大切な仲間を!!!」

そのとき、彼女の体が光り、姿を変える。ジャンヌは強化怪人態になったのだ。

「ほら、これをやる。お前の仲間だ。」

マッドはジャンヌにエナジーを投げる。

『サボテン！』

ジャンヌはそれを握り、通常の怪人態に戻った。

ナイトメアの悪巧み

ランダン王はナイトメアたちに殺害され、国の政権はナイトメアが握っていた。今、ランダンでは元帥且つ絶対王政の王が他国に一気に攻めているのだった。

「ナイトメア様、將軍からのメッセージです。」

幹部がナイトメアに手紙を渡す。

「何？一般市民だったハリー（本名は不明）に秘密裏にフラワードライバーが渡り勝手にムウエンに攻め込んだ？ おお！ついに市民にまでドライバーが渡ったか!!」

ナイトメアはうれしがる。幹部はそれを止める。

「ナイトメア様、將軍は怒っています。一般市民にドライバーを流したのはナイトメア様なんですか？」

ナイトメアは足を組みドリンクを飲む。

「お前にも貸してやろうか？」

「ナイトメア様！お言葉ですがもうこれ以上一般市民を洗脳して改造するのはやめてください！僕は市民に楽しく生活してほしいだけなんです!!」

「うるさいなあ。楽しく生活しながら戦争ができると思うなよ。領土を増やすだけじゃ

ない。俺の命のためでもあるんだよ。俺はこの世の強いやつを吸わなければ生きていけない。お前も俺の忠実な部下だ。協力してくれるよな？」

ナイトメアはドライバーを巻き付けて脅す。が、幹部はそれに応じない。

「俺はランダン王ナイトメアの忠実な幹部・アダム！それも今日でおしまい！俺はお前をここで殺す!!」

「やめておけと言っておくがな。変身。」

『悪夢！ユーカリ！メアユーカリ!』

アダムは剣でメアに攻撃するが、メアはそれをよける。そして一撃のパンチでアダムを倒す。

「うわあああ!!」

「やめておけといったからな。」

アダムはエナジーになり、その場に落下する。

「お前も大したことはなかったな。」

ナイトメアはそれを拾い上げ、音を鳴らし驚く。

『ブリーズオブサクラ!!』

「やった!!また強い敵が現れそうだ。」

ナイトメアはエナジーをしまい、割れ目を通して出かける。そこは城のような場所

だった。

「おはよう。《誠実なる青王子》はお前か。」

そこはムウエンの城だった。王子はナイトメアを敵対視する。

「ランダンのお前が、ムウエンに何の用だ!!」

部屋にはムウエンの兵が剣を構えて入ってくる。

「おいおい面倒だろ。いい商談があると思ってきたのに。」

王子はそれを無視し、兵にナイトメアを襲わせる。

「はあ..」

ナイトメアは面倒そうに兵と戦う。なんと強力なナイトメアは五人の兵を全員一撃で倒してしまったのだ。

「俺はお前を今からでも殺せる。話を聞け。」

「わ、わかった。」

王子の部屋のドアからはランダンの兵が出てくる。

「お前のライバル、ランダンの王は死んだ。だからランダンをムウエンに引き渡そうと思ってる。そうすりゃムウエンは世界でも有数の強国だ。どうだ?」

王子はナイトメアの話に笑いが止まらない。

「はははははははは!!」

「ただし新しく攻めるものがある。」

「なんだね？」

ナイトメアは青く丸い星の絵を見せる。

「地球だよ。それとこのことは仮面ライダーたちには内緒にしろ。わかったならこの紙にサインをかけ。」

「地球って！私たちが偵察に行ってる…。」

「早くかけ！」

王子は契約書にサインをし、ナイトメアもランダム王の名でサインをする。

「これでこの国とランダムはお前のものだ。はははははは!!」

「ははははは!!」

二人で暫く笑いあい、ナイトメアは割れ目から人間を出す。

「お前に人間態をあげよう。さあ！早く乗っ取れ！」

王子はナイトメアに言われた通り人間を襲う。彼は口から人間の中に入り、乗っ取る。

「ほら、ドライバーだ。」

ナイトメアにフラーワドドライバーとエナジーをもらった王子は、ドライバーを腰に巻き付けて早速変身する。

『バンクシア!』

「私が地球を滅亡させる。変身。」

『バン!バン!奇妙な実はトラウマを作る! バンクシア!』

「それはランダン王の力だ。大切に使いよ。」仮面ライダーバンクシー」

そう言い残してナイトメアは今度は薔薇のところへ行く。

夜なので、もう薔薇が戦っているところだった。戦火で明るいところに割れ目が出て、そこからナイトメアは出る。

「よお、元気にやってるか?」

薔薇は甲冑を着て戦っていたが、まるで力になれていない。

「ちよつと久しぶり。何か用?」

「ああ。裂羅はどこだ?」

「あつちで戦ってるよ。」

裂羅は川の向こうでランダン軍と戦っている。ナイトメアは割れ目を使って薔薇のほうへ移動する。

「久しぶりだな。元気そうで何よりだよ。」

ランダン軍は攻撃をやめ、ナイトメアに頭を下げる。

「裂羅、お前をもつと強くするアイテムを持ってきたぞ。」

「もらっておくよ。ランダンの仮面ライダーマッドを倒すためにな。」

裂羅の中に入ってるジャンヌはマスクの上からでも起こっているのが分かった。

「ああ、それは悪かったな。ただこれだけ聞いてくれ。ランダンは戦争に負けた。これからはムウエンに支配される。」

「なんだと…!?!」

それを聞いたランダン軍は次々と膝から倒れこむ。中には泣いている者もいた。

「本当だ。お前らは戦争に勝った。だが別の組織が地球を攻めるらしい。だから地球に戻れ。もうやばいかもな？」

ジャンヌは変身を解除し、サクラとともに薔薇のところへいく。薔薇に訳を話すと、彼らは急いで宿に戻った。

「明日、俺がお前らを地球まで運んでやる。朝の六時にここを出る。それまでに仲間を集めてこい。」

薔薇はミラが帰ってないことを心配する。

「じゃあな。」と言ってナイトメアは割れ目に消えていった。

次の日の午前六時にはミラもいないとまらないのだ。

ミラの復活

ナイトメアに言わ地球に帰ることになった薔薇たちは、ミラを探していた。この前ミラと別れてから一度も会っていないのだ。

「ミラー、ミラー、どこにいるのよー!」

サクラが森の中でミラを探しているが、降っていた雪はだんだんつもり極寒に耐えていた。

「寒い… ミラー!!どこなの!もうみんな怒ってないわよ!!」

サクラが震えながら叫んでいると、三人のフラワーが現れた。

「ねえちゃん、俺らとあつたかいとこ行かない?」

フラワーの一人がサクラの腕を握る。

「やめてよ!」とサクラは振りはらうと簡単にはいかないと思ったのかほかの二人がサクラを押し倒す。

怪人態のサクラはもちろん強いが、フラワーは元から怪人態なのでほとんど変わらな
い。しかも相手は男性なので力的には三人に負けている。

「なあ、俺んちにかわいい花あるんだよ、一緒にいこうじゃねえか。」

「おとなしくしてりや痛いことはしないって。」

サクラは手首を一つに縛られる。

「何よこれ！外しなさいよ！」

彼女は一人の腹をける。するとそれに逆上したのか二人が足を押さえつけてけられたものがサクラの腹にパンチを入れる。

「うっ!!」

「お前うるせえな。ちよつと黙つてろよ。」

サクラは睡眠薬のようなものを飲まされ、すぐに気を失ってしまった。

「桜の女は美形がおおいなやつぱり。」

三人はサクラを工場のようなところに運び、両腕と両足を縛り付けて彼女を起こす。

「おい。起きろよ桜のねえちゃん。」

サクラは顔を三発ほどたたかれ目を覚ますと、自分が今ある状況を把握する。もちろん最初は体を動かし暴れるが、すぐに無駄だと察した。

（仲間がきつと来てくれる。）

彼女はずつとそう願っていた。だが同時に、この男たちに何をされるかを覚悟していた。

一人の男は彼女が思っていたこととは違うことをしてきた。彼は彼女の上に座った。

「男をなめてるからこうなるんだよ!!」

一発、腹を殴られた。

「おめえらもやれ。」

その男の命令でほかの二人からも一発ずつ殴られた。

「お前犯されると思ってたんだろ。どんな変態女だよ。俺はなあ!!性欲なんてないただ花を殺してえだけの狂った野郎なんだよ昔っから。」

彼女は黙って話を聞く。

「昨日まで戦争やってただろ。俺は死ぬために何度も前線に行ってきた。けど幸運なのか全く死ねねえ!だから俺は死ぬまで花を殺すことにした。夜中に一人でいたら俺みてえな怖い花に殺されちゃうってことを世間に知らせるためにな!!」

《↑》のタイミングで彼女は顔を殴られる。あたりには血が流れ、もう何度殴られたのかわからない。

彼女自身も半分気を失っていた。

「仮面ライダーっているだろ。あいつはいいよなあ。戦争で何人も殺してんだろ。俺もああなりてえよ。」

彼女は仮面ライダーという単語に反応し、頭を起す。

「勝手に顔起こしてんじゃねえよ!!」

男はサクラの顔面を踏みつける。

「お前ら、バット持って来いよ。」

二人の男がバットを持ってくる。

「やるぞ。」

「ああ。」

三人は一齐にサクラを殴る。サクラは黙って殴られているだけだった。

「はっはっはっはっはっは!!死ね!」

サクラは本当に死にそうだ。

(誰か…… 助…… け……)

サクラがそう願ったとき、ドオン!!と大きな音がした。

「なんだ?」

サクラへの暴力は一旦止み、三人は扉のほうへ近づく。

「誰かいるのか。いるならかかって来いよ。」

三人はバットを構えるが、何も音はしない。ただ廃工場の鉄扉は木っ端微塵だった。

後ろから、かさかさとした音がしたので、振り返ると一人の男が物体と一緒に飛び回って

いた。

「ううおおおおおおあああああ!!!」

物体と一人は柱にたたきつけられ、二人のほうにぐにやぐにやに曲がった鉄バットが飛んできた。

「スケ!!」

物体はたたきつけられた一人に強力なパンチを入れると、男は稲妻とともに消滅した。

「おい! 行けよカク!!」

もう一人も男が言う前に空中から床にたたきつけられ、物体の蹴りと稲妻によって消滅した。

「お前は何なんだよ!! 気持ち悪い!」

物体はゆっくり男のほうを向く。サクラも姿を確認し、驚いた。

「…… ミラ……?」

その物体、それは強化怪人態のミラだった。

「うおおおおあああああ!!!」

ミラは男に襲い掛かる。が、間にあるライダーが入ってそれは阻止された。

「やめろ。これは貴重なあたしの仲間だ。」

ライダーはミラを剣で一突きし、ミラの強化怪人態を解いた。

「僕…… サクラ!!」

ミラがサクラを解放しているうちに、ライダーは驚いて気絶している男を割れ目の中に放り込み、自分も入り消えた。

サクラは強化怪人態で暴走しなくなったのかと思ったが、そんなわけはなかった。

「僕、もう強化怪人態にならないようにする。」

「なんで？」

「強化怪人態にならなくても死なないように、訓練してきたんだ。」

「どこだよ。」

「ナイトメアのところだよ。」

ミラはナイトメアに怪人態のすゝめをしつかり教えてもらったのだ。

「ナイトメアは俺のためでもあるからってしつかり教えてくれたんだよ。」

「そうなんだ。あ！もうこんな時間。」

サクラは時計を見て焦る。時間は午前五時だった。

「地球に戻るよ。」

午前五時五十分、ジャンヌの仲間を含むみんなが集まった。

薔薇は最初は怒っていたものの、今では元通りミラと仲良くしている。

六時になり、ナイトメアが現れた。

「おはよう！みんな揃ったな！」

「うん。揃ったよ。」

「忘れ物はないな。始めるぞ！」

みんなは時空の割れ目に包まれ、そのまま薔薇の家の近くの公園に移動した。

「達者だな。」

「ナイトメア。もう二度と会わないといいな。」

「言ってくれるじゃねえか。地球を守れ。仮面ライダー。」

ナイトメアは割れ目の中に戻っていく。

今日は薔薇の家には薔薇、ジャンヌの仲間四人とフラワーワ三人の計八人が寝泊まりした。

彼らの旅はまだまだ続きそうだ。

ナイトメアのアジト

「ムウエンのライダーは出揃った。地球を攻める準備はできてるか？」

ナイトメアは変身した状態で《誠実なる青王子》に問う。

ランダンとムウエンを合併し領地が増えた王子は喜びの余韻に浸り、次の敵の地球をどう攻めるかのみ考えていた。

「ああ。できている。ナイトメア、君には感謝するよ。」

自分にとって都合がいいことを持ち込まれるとすぐに手のひらを返しナイトメアに屈する王子はもはや《誠実》なんかではなかった。というか《誠実なる青王子》という名前も彼自身がそう呼んでいたのが始まりだったのだ。

「まあまあ、感謝するのはまだ早い。ムウエンが地球の、まず日本を支配できれば地球全体も簡単だ。俺たちの世界の誕生だよ。」

「はっはっはっは!!」

ナイトメアが地球に標的を変えたのはムウエンのためなんかではない。強大なエネルギーが眠っている星、地球を支配して自分のエネルギーに変えるのが彼の目的である。ナイトメアは邪魔なムウエン王子など仮面ライダーに敗北した時点で捨てるつも

りである。

「こないだ渡したドライバー、大事につかえよ。」

ナイトメアは王子の肩をたたき、割れ目に消えていく。

「偉そうにしゃがって、地球に侵略をし始めたらすぐ捨ててやる。」

王子は言い、部屋に戻った。

アジトに戻ったナイトメアは、ハリー、ひなたともう一人の仲間を連れていた。

「お前の使命は人間を殺すことだ。」

もう一人はナイトメアの言葉を聞き、その場に倒れた。

「こうやってあたしたちの記憶を変えてたんだ。」

「わるいな。俺も仲間が欲しいんだよ。」

「まあいいや。どうせ私はあんたの恋人つてことしか知らないし。」

「それでいいんだよ。ハリーも、地球制圧を目指して頑張ろうじゃないか。」

ハリーは何も言わなかった。

彼ら二人はナイトメアに元の記憶を消され、埋め込まれた記憶でナイトメアに従っているのだ。ひなたたちがソレイユたちと戦っているのもそのせいだ。

「ナイトメア…俺はフラワーでも全部殺す…記憶をなくした俺がお前に勝ったら…全部を返してくれ。」

もう一人の仲間が立ち上がった。彼の眼は殺気に満ちていた。

彼の要望にナイトメアは当然のように答えた。

「ああいいよ。お前が俺に勝てたらな。」

「ちよつとここで始めるの?」「俺たちに迷惑はかけるなよ。」

ナイトメアは当然アジトで戦うつもりはなかったが、彼がいきなり襲い掛かってきたのでそうせざるを得なかった。

「お前から邪魔はするなよ。」

ナイトメアは不公平だといいい変身を解き、敬一の姿で戦う。

「ああー!!この感じ!死ね!!」

彼はナイトメアの首を絞め、顔を殴る。

「ははははは。変身前でもこの力か。:」

彼はナイトメアの顔を蹴り、ナイトメアはその場で動かなくなる。

「おい見たか!!俺はナイトメアに勝ったぞ!!俺をなめてたから痛い目見たんだよバカ!!」

彼は有頂天だった。あんなに自分になめた態度をついていたナイトメアを自分の力のみで倒したからだ。

「馬鹿なのはお前のほうかもしれないな。」

瞬間、断末魔とともにナイトメアのアジトには一人のフラワーが倒れていた。

それはナイトメアではなく、そのもう一人だった。

「残念だったな。さ、お前の仲間の仇を打ちに行くぞ。」

「う…う…う…」

ナイトメアは彼を起こすとかれに名前を付け始めた。

「お前は今日からキラード。」

「そのままじゃん!!」

ひなたがつっこみを入れ、その場の雰囲気は和んだ。

「さ、キラード。これがお前のドライバーだ。」

ナイトメアはキラードにフラワードライバーを渡した。エナジーはユリだ。

「お前は仮面ライダーユリだ。」

「またそのまま!!」

こんどはキラードが突っ込むが、場は和まなかった。

こんな感じでナイトメアのアジトは案外楽しくやっていたのだった。

しかしその時のナイトメアはすでに地球への侵略の準備を着々と進めていたのだった。彼の仲間のライダーはもうすでにソレイユたちと互角で戦える数にあった。あとは日本を破壊するだけだ。

我らの土地 地球偏

戦争の始まり

深夜、日本の首都、東京で大きな音とともに巨大な地震が起こった。それと同時に京都のみ高く浮遊した島となり、人間達は謎の力により振り落とされた。

もちろん、仮面ライダーたちは黙っていない。千葉県にある薔薇の家で寝泊まりをしていた彼女らは地震に気づき飛び起きた。

「嘘……」

巨大な光とともに東京が消滅した。と思ったら浮遊しているのだから驚きは隠せない。次の瞬間、家のテレビが自動的につき、見たことのある顔が現れた。

「おはよう!!時刻は午前四時だ。東京に出勤や通学をしている人は残念だったが今日はあきらめろ。東京はもう俺の街だ。これから日本とフラーワ世界の全面戦争を行おう。俺たちが負けたら東京を返してやるよ。」

その顔、いや、マスクは真正銘仮面ライダーメア、ナイトメアだった。

「俺の力を見せつけるためにまずは日本に部外者が入れないようにしてやるよ。海のはうを見とけ。はあ!!」

ナイトメアはそばにあったレバーを引く。するとまた大きな爆発音とともに海に巨大な檻が建った。

やりたい放題のナイトメアは、なんと海に日本を囲むように巨大な檻を立てたのだ。

「残念ながらこの檻は俺の力じゃないと壊せないよ。さあ！戦争の始まりだ!!」

ナイトメアがそういったとたん、テレビは消えた。というか日本中の電気が止まったのだった。

静かな夜がナイトメアの侵略により一気に破壊された。ライダーたちも混乱しており、すぐには向かえなかった。

「ナイトメア…一体何が目的なんだ…!!」

彼の目的は強大なエネルギーが眠る地球を破壊すること。それができればどんな手でも使う。彼の目的は誰にも知らされていないのだ。

くナイトメア率いるムウエン軍によって、日本は破滅の危機に陥っていた。そんな中、仮面ライダー達はその地での新たな戦いの幕を明けた。く

「やっぱ僕たちが行くしかないよ!!」

本来ムウエン軍のはずのミラは、葛藤しながら日本の防衛を試みようとしている。幸い、千葉県の薔薇の家にそこまで被害は被らなかつたのだ。

「そうだね。だけどどうやって?」

「僕たちフラワーの力を信じて。」

街では自衛隊がかつて東京だった場所の周りを囲んでいる。万が一のフラワーの本
土進出の時に対策しているのだ。

「多分、それは無理だよ。」

街の様子を見に行っていたレグルスが帰ってきて言う。

「俺らフラワーは狙われている。人間態を持つていないフラワー、ジャンヌは姿が見え
ただけでバーンだよ。」

「いやあ、それは心配ないね。私たちはフラワー。そしてムウエンの騎士。地球人にな
んてまけるわけないよ。」

「ならいいんだけど……俺が考えてる方法は、人間と真向に戦う！それだけ!!」

レグルスの考えを聞き、出発した彼らは驚いた。街にはもうフラワーがあふれてい
た。ナイトメアが日本全土に撒いた謎の粉末によってすべての花がフラワー化してい
るのだ。

フラワー達は自由に動き、自分たちがいままで踏まれてきたことなどの恨みを晴らす
ために人間達を襲っている。

「っしや、やりますか。」

「やった！俺戦いたかった！」

「雑魚狩りかな。私もやらせてもらおうよ。」

ミラ、サクラはドライバーになり、レグルスもドライバーを巻く。変身した彼らは次々と敵を倒していく。ミラも強化怪人態にはならず、ブラックローズも使わずにどんどん倒していく。

しかし物事がそんな順調にいくわけがない。彼らが敵を倒していくところに一人、見たことのある者がいた。

「……」

彼が現れるとあたりは泥の床に変化する。

その名は仮面ライダーマッド。

「お前も地球に来てたのか……!!」

ソレイユが驚く。すると、後ろから女性の声が聞こえる。

「お前じゃなくてお前達、ね。」

彼女が現れると周りには向日葵の花が咲く。それは普段のように美しくなく、ハスのような恐ろしい形をしていた。

その名は仮面ライダーサン。

「あたしがソレイユを殺る。だからあんたは裂羅を頼むよ。」

レグルスは次から次へと現れるフラーワと戦っている。

「…」

サンはソレイユのほうへ近づくと、今までにないくらいの威圧だ。

「サンは太陽。ソレイユは日光。どっちが強いかな!!」

サンは静かに剣を抜く。

ソレイユもエナジーを変える。

『チューリップ!!』

「日本… 妙に懐かしい響きだ。だがその地であたしはお前を倒す!!はあ!!」

サンはソレイユを切り付けるが、ソレイユは盾で守る。

「私は！荒れた土地に現れる一筋の光!!」

ソレイユはサンと剣の戦いをしながら叫ぶ。

「仮面ライダー!!ソレイユ!!」

今度はソレイユがサンを切り付ける。サンは一瞬隙を見せる。それをソレイユは見

逃さない。

「お前にそんな強さがあつたなんてな!!」

「太陽は自分から放たれる光を知らないのか?」

ソレイユはサンに剣を突き刺す。見事、ソレイユの剣はサンの胸に刺さる。

「あたしはまだ… 強くなる…!!」

ソレイユが剣をサンから抜くと、サンは自らが作った割れ目の中に消えた。

一方、裂羅は予想以上に接戦だった。

「ふんッ!!!」

「はっ!!」

裂羅とマッドがお互い同じような技で戦っているからだ。裂羅の剣はマッドによって泥の中に投げつけられたので、裂羅は体で戦うしかなかった。

しかも、裂羅になっっているジャンヌの心にも問題があった。

「お前だけは……絶対許さない……!!!」

裂羅はジャンヌの感情だけで戦っている。戦法なども全く考えず、ただ自分の仲間を殺した仇討ちとして。

「これで終わりだ。」

マッドは高く飛び上がる。マッドの足の先にいる裂羅は動けない。

「ふんッ!!」

しかし、また裂羅とマッドの間に邪魔が入る。今度は三人だった。

「やめてくれえ!!!」

「俺たちはやめない。ジャンヌ、ありがとう。」

先頭の一人がジャンヌに別れを告げると、マッドと彼らは爆発とともに消えていっ

た。

「ヘンリー、私はどうすればいいんだろう？」

絶望、悲しみ、恨み、ジャンヌの言葉にはいろいろな負の感情が現れていた。

「大丈夫。みんなの分も僕がついてるよ。」

ヘンリーは優しい笑顔でジャンヌを包み込む。

そこへ、ミラ達が来る。

「ジャンヌ……僕たちもついてるよ。」

「そうだね。みんな、みんなありがとう。」

ジャンヌは涙を流す。

その時のジャンヌの感謝の言葉には、ジャンヌの決心が詰まっていた。

裂羅の強化フォーム

仮面ライダー裂羅のジャンヌは、精神的にも身体的にも疲労がたまっており、体も限界を感じていた。しかし、彼女の仲間が残り一人になってからは彼女から怒りの力しか感じられなかった。最も、それが彼女が限界を超え、強化怪人態になるトリガーとなったのだった。

前回マッドと戦ってから特に激しい戦いはなく組織の幹部とも出会っていないが、彼女は彼女なりに決心していた。

彼女は強化怪人態で生活することを決めたのだった。彼女の体は人間に擬態しているだけで、人間態が存在しない。なので少しでも体を自然に動かすため、そして力を最大限まで生かすために強化怪人態になった。

彼女の強化怪人態が不思議なことなのは薔薇、ミラ、レグルス、そしてサクラもわかっていた。

「強化怪人態なのに自らの意思で動いている…」

初めてジャンヌが宣言したとき、誰かが言った。

これはジャンヌも不思議に思ったが、悪いことではないので特に気にしなかった。

「まあ、私は仲間たちの仇を打たなきゃならないからな。ん？」

悲鳴が聞こえた。

「いくぞー！」

彼らは駅のほうへ走る。街では自衛隊がフラワーを狙撃しようとしているが、強化怪人態の彼らには全く効いていない。

「うわあ!!」

ついに反撃された。フラワーは無双状態で自衛隊を一人一人つぶしていく。そこに、ジャンヌが走っていく。もちろん、彼女は強化怪人態なので自衛隊に狙撃される。

銃が飛び交う中、彼女の腰にいるサクラは待機音を鳴らす。

「敵でも味方でも関係ない。私は日本に攻めているフラワーを倒す!!」

薔薇は自衛隊を離し、自身も待機音を鳴らす。もちろん、レグルスもだ。

「やっとな魔な銃声がなくなつたね。いくよ。」

「多分だけど、裂羅のいるところにはマッドが出てくると思うんだ。」

『フラワー:.』『フラワー:.』『Counivour:. growin’: now』

「変身!!」

『激しく燃える、情熱の赤!バラ!』『あなやあなやといひけれど!はるのさくらのたたかへば!サクラ!』『Carniv Ca Ca Carnivrou』

「ふんッ!!」

仮面ライダーたちは一斉に攻撃をする。しかし通常の強化怪人態にしては敵がやけに硬い。

「ナイトメアの改造か…!!」

しかし今まで倒してきた相手がただ硬いだけ。何回も攻撃すればすぐに倒せる。しかし、そう簡単にはいかなかった。

「うわっ!!」

ヘンリーの声がし、裂羅は振り向く。

ヘンリーの頭からは血が流れていた。自衛隊がすきを見て撃つたのだった。

「。」

ヘンリーは血を流してそこに倒れる。ジャンヌは見ているだけで何も言わなかった。しかし、敵に攻撃するのをやめ、ずっと攻撃を受けていた。

「裂羅!何やってんの!!」

裂羅は無視をしていた。変身を解除されないようにレグルスが守る。

「、」

ジャンヌが動かないので、サクラがジャンヌを操作する。

「ジャンヌ!今は闘いよ!!」

そこに、仮面ライダーが現れた。

「俺だ。」

マッド。ではなかった。見たことのない仮面ライダーだった。

「仮面ライダーバンクシー!!」

彼は自己紹介をし、彼らに攻撃を仕掛ける。

「どこかで聞いたことのある声。」

そう、仮面ライダーバンクシーはランダンの王子。通称《誠実なる青王子》だった。

闇落ちした王子に気づかないソレイユはすぐにパンチやキックを入れる。

「ふははは!!俺には効かない!!俺の力は最高だ!!」

彼は空中に絵を描くと、その絵が動き、攻撃するのだ。

「ははははは!!」

「薔薇。ブラックローズを使おう!」

「いいの?」

「言ったでしょ。訓練はしたって。」

ミラの言葉を信じた薔薇はすぐにエナジーを取り出した。

『ブラックローズ!!』

ブラックローズを使った。久しぶりの仕様なのでやはりミラの体には稲妻が走る。

「大丈夫。今の僕は負けない!!」

さっきと同じように彼女はバンクシーにキックやパンチを入れる。するとさすがは強化フォーム。すごい力が入る。

「なんだと!?!この力は!!」

「これがソレイユだよ!!」

彼は絵を描こうとするが、途中でソレイユに攻撃されてうまく描けない。しかも、持っていたエナジーを落としたのだ。

ソレイユはすぐさまそれを拾い、裂羅に投げる。

「ジャンヌ! かたき討ちに使えるアイテムだ!!」

裂羅はそれを受け取る。マスクの中の彼女の表情は怒りに満ちていた。

サクラはジャンヌに代わり、敵が離れるまで通常の裂羅で戦う。

「私は!!仲間といつでも一緒さ!!」

改造された強化怪人態の敵も勢いで倒してゆく。

「そろそろこれの使い時か!!」

ブラックローズでバンクシーと戦うソレイユの後ろで、裂羅はあるエナジーのボタンを押す。

『ブリーズオブサクラ!!』これにすぐさま桜のエナジーを挿入し、『サクラ!』

フラーワが三体同時に襲い掛かってくるが、すぐさまそれをドライバーに挿入する。
「チェンジエナジー！」

『桜花 今ぞ盛りと 人は云へど われはさぶしも 君としあらねば！ フラーツワ
!!』

仮面ライダー裂羅のフォルムは変わり、水色を基調としたとても美しい、優雅な姿になった。その力は絶大で、強化怪人態のフラーワを通常攻撃で吹き飛ばすことができるのだ。

「仮面ライダー裂羅、ドライブフォーム。」

彼女は硬かった敵をどんどん倒していく。

「私はこの力でマッドを倒す!!」

そして、ソレイユもバンクシーに強烈な一撃を与える。

ソレイユは飛び上がり、

「ブラックニードルライダーキック!!」

「ぎゃああああ!!!」

ソレイユはバンクシーを貫通し、着地する。

爆発とともに《誠実なる青王子》が転がってソレイユのもとにくる。

「お前だったのか!!」

王子はにやりと微笑み、走って逃げていった。

カニバルと裂羅がソレイユのもとへ来る。

「バンクシーの正体は、王子だった。」

「くそっ!!あいつが黒幕なのか!」

今まで自分たちを受け入れてくれた王子が黒幕だったなんて、彼らは思ってもいなかった。

「私はもう、ランダンの騎士なんかじゃない。」

ジャンヌが変身を解除して言う。

「地球を守るライダーさ。」

廃墟の東京

早朝。薔薇の家は自衛隊や警察に囲まれていた。怪人が部屋から出てきていると通報があったからだ。

コンコンとドアが鳴る。もちろん薔薇たちは出ない。

「そこにいるのはわかっている!!出てきなさい!」

中では、レグルスがとある提案をしていた。

「俺が、全員殺す。」

「人殺しはだめよ。」

サクラが止める。しかしレグルスはドライバーを巻き付ける。

「俺は悪の力で強くなるんだ。だから人でもなんでも殺せる。ナイトメアと種類は変わらない。」

地味に爆弾発言をしたレグルスに、みんなは謎の納得をして任せた。

ドアを開ける。

「残念。人間ごときが俺に勝てないよ。」

レグルスは怪人態の爪で人間の胸を刺す。勿論あたりには血が飛び散り、人間の死体

が転がる。

銃撃が始まる。さすがに銃には勝てないので、変身する。

『Caniv Ca Ca Canivorou』

銃の攻撃が効かないと察した人間は車で去ろうとするが、それは不可能だった。カニバルは車のタイヤを割った。その場の人間を全滅させたのだ。

「ナイトメアの暴走の原因はどうせお前達だ。」

意味深な言葉を残し、死体を蹴り飛ばした。

そんなカニバルの行動を黙認した薔薇は、人間とは言えないだろう。これが人間を守るために必要なことだとしても。

「薔薇、何も思わないの?」

戻ったレグルスが薔薇に聞く。

薔薇は少し考えて「何も。」という。

変わった。

フラーワの死体は爆発によってほとんどが消え去る。それに涙を流した薔薇は、人間の死体で気持ち悪いとすら思わないのだ。それがなぜか。簡単だ。

彼女はもう死体や悲鳴で涙を流さない、「英雄」になりかけていた。

「世界を救うためには、ね。」



家の外に転がっている死体を掃除し、今回いよいよ挑戦する東京への作戦を考えていた。

「東京か。」

薔薇はミラと買い物に行ったあの日を思い出した。

「懐かしいね。今と比べて全然平和だったよ。」

そんな話をして、作戦を決行に移した。

まず彼らは、バイクでかつて東京だった大穴に向かう。そこは崖のようだった。

「本当に、東京がなくなっただね。」

薔薇が上を向くと、そこが変わり果てた東京だった。

「もう生やしちゃうよ。」

「いよいよ。」

レグルスは変身し、下から食虫植物を出す。

大きな音とともに、すごい勢いで生えてくる。それは巨大で、一つ間違えれば本当に食べられそうなくらいだった。

三十秒ほどで東京に着いた。そこには人間の死体が転がり、フラワーであふれかえっていた。

「ここが東京。」

「変わり果ててるね。」

ミラは微妙な表情だった。

するとそこへ、フラワーが現れた。色がこの間戦った硬い強化怪人態フラワーと一緒に。
だ。

「いくよ。みんな。」

薔薇が声をかけると、変身の準備をした。

「今回はフラワーベース、忘れないでね。」

「前回忘れてたからね。」

『フラワーベース!』『ブラックローズ!』

『ブリーズオブサクラ!』『サクラ!』

『Canivour growin' now』

「変身!」「変身!」「変身。」

『パワーサプレッション!その黒色は何の色!正義のためか悪のためか!ソレイユ!』
『ブラックローズ!!フラワー!!』

『桜花 今そ盛りと 人は云へど われはさぶしも 君としあらねば! フラワーツワ
!!』

『Carniv Ca Ca Carnivorous』

彼らは変身をし、フラワーをどんどん倒していく。

「はあっ!!ほっ!!」

しかし、一人だけとても強かった。

「ふんっ!!」

彼は力でソレイユを離す。そしてドライバーを巻く。

「仮面ライダーなのか!」

『ユリ!』『フラワー!』

彼はナイトメアの三体目のライダー。その名もユリ。

「覚えているか姉ちゃん。俺はお前を殺そうとした。変身。」

サクラは思い出した。彼は自分を恐怖に陥らせた者。そして、ミラに倒されかけたものの。

『かわいいものには棘がある!ユリ!ユリ!』

彼は手から球根のようなものを出し、それを投げつける。

「吸うな!」

レグルスが叫ぶがもう遅い。彼らはそれを吸って、変身したままその場に倒れた。

仮面ライダーユリの球根は爆弾のようになっており、それが地面に強く打ち付けられ

るとあたりには毒の煙が出る。それを吸ったものはその場に倒れるのだった。

彼は変身を解除した。ナイトメアが、後ろから現れた。

「よくやったキラー。俺がお前に目をつけてよかったよ。」

ナイトメアは割れ目の中にソレイユたちを入れ、フラーワ世界へ戻った。

フラーワ世界の大国、ムウエンの中心部には地球から吸い取った力でナイトメアの塔が建っていた。それと同時に王子が墮落した国はだんだんと滅びていき、栄えていた城下町も今では寂しい街になっていた。

かつてはランダムだった地区も、花口が減り廃墟化していた。

「すべて俺の計画通りだ。」

ナイトメアはつぶやいた。

フラーワ世界がこんなにもさびれてしまったのは、ナイトメアがエネルギーを吸ってしまったからである。ナイトメアはそれを使って今度は日本からもエネルギーを吸おうとしているのだ。

「はははははははは!!!!」

ナイトメアは笑う。

しかし、ナイトメアは自分で自分を否定した。

「何がおかしい!!俺の体でサクラたちを傷つけやがって!」

ナイトメアは自身の問いに答える。

「大丈夫だ。俺はお前は生かすつもりだ。」

「俺がお前を止めて見せる！」

「だからお前の体はいらなくなったら帰してやるって言ってるだろう。それまで待つてくれよ。」

「サクラたちを傷つけたら許さない！」

「はいはい。」

ナイトメアは自身のもう一つの人格、湊敬一を面倒くさそうにあしらひ、仮面ライダー達を運んで行った。

コットンローズのナイトメア

ナイトメアは眠っている仮面ライダー達を仲間と一緒に檻の中に入れた。そこはレグルスと初めて出会った、あの場所だ。

「いいかひなた！キラー！ハリー！俺たちは今から地球という一つの星の破壊にまた一歩近づくんだよ!!」

仲間のライダーたちは興奮気味に見ている。

ナイトメアは小さな箱を何個も持ってきて積み重ねる。

「これが完成すると、東京とフラワーワールド世界が直接つながる。」

そしてすぐに箱は巨大なものとなった。

それには今までに見たことのないほどの力があふれ出ていた。

「東京がつながった後、余った力はすべて俺達のものだ。地球を支配するのももう時間の問題だな。」

箱の銅線にレバーをつなげる。

ナイトメアは笑いながらそのレバーを引く。すると強い光が箱から出、日本にはまたもや大きな地震が起こった。大穴だった東京の下は時空の割れ目に変化した。そこは

さびれたムウエン中央につながっている。

ナイトメアの計画は成功した。

「さて、力のほうは。」

ナイトメアが余った力を確認しようとするが、一向に姿を見せない。もうすでに手に入ったと思いきやそんなはずもなかった。

「力はどうした！」

「コアがないんだね。」

檻の中から声がした。

「ナイトメア。俺の力をためてくれてありがとう。これで本当の姿を見せられるよ。」

声の主は檻をいとも簡単に破壊し、自分で時空の割れ目を作りそこに仲間たちと一緒に逃げ込んだ。

ナイトメアたちは唾然としていた。

レグルスの本当の姿。それはナイトメアに酷似したものだだったからだ。

「くそっ!!俺が怒るなどめつたにないことだ!!これで終わりだと思ふなよ!!」



家に戻ると彼らは目を覚まし、驚愕した。なんと一緒に倒したはずのレグルスが自分たちを解放しているのだ。彼は少し笑った。

「振出しにもどっちゃった。」

「レグルス。ありがとう。」

ジャンヌが礼を言うと、レグルスが照れる。

そんな和やかな空間は一瞬でぶち壊された。

大きな騒音とともに薔薇の家の窓が割れる。

「はははははははははは!!」

そして笑い声が聞こえた。ナイトメアだ。彼はレグルスに自分の計画を壊されてから怒りに駆られてしょうがないのだ。家の中にハリー、ひなた、キラーの三人が乗り込む。

「お前ら！全員ぶっ殺す!!」

キラーが言う。勿論戦う準備をしていないライダーたちは逃げ出す。止まったら殺される。

公園まで来たら、今度は自分たちのターンだ。ナイトメア軍がドライバーを巻き付けると、自分たちもそうする。

『ユリ!』『ヒマワリ!』『ハス!』

『フラワーベース!』『ブラックローズ!』『ブリーズオブサクラ!』『サクラ!』『Carnivorous!』

六人は一斉に変身する。

『かわいいものには棘がある！ユリ！』『太陽に向かう大きなフェイス！ ヒマワリ！ヒマワリ！』『マッドのマッドなモッドライダー ハンドレッドの目！ ハス！』

『パワーサプレッション！その黒色は何の色！正義のためか悪のためか！ソレイユ』
「ブラックローズ!!フラワーワー!!」『桜花 今ぞ盛りと 人は云へど われはさぶしも 君
としあらねば！ フラワーツワ!!』『C a r n i v C a C a C a C a r n i v
o r o u』

仮面ライダーが六体。戦争の始まりを告げた。

「はあああああー！」

ソレイユが叫び、一斉に戦いが始まる。

ナイトメアはただそれをじっと見ているだけだった。そこに、仮面ライダーが現れる。

「ふんッ！」

彼はいきなりナイトメアに剣を振りかぶる。惜しいところでナイトメアにはよけられた。

「みんな元気だなあ。だけどお前は俺には勝てないんだよ!!」

ナイトメアは攻撃をよけつつドライブバーを巻く。

「新しい力を見せてやるよ。」

『ナイトメアフラワー！ コットンローズ！』

「変身。」

『悪夢！悪夢！メア・コットンローズ！』

仮面ライダーメア・コットンローズフォームは仮面ライダーにパンチを入れる。

「これはお前がくれた力だ。それで倒されるとは情けないなあ。」

仮面ライダーは持っていた剣で上から切り付ける。しかしそれは腕で跳ね返された。

「はははははは!!」

ナイトメアは高く飛び上がり、ライダーキックの姿勢になる。

「まさか！最初から弱い力を…!!」

「さあな。」

仮面ライダーは悲鳴を上げながら空中にがむしやらに絵を描く。

「さよならだ。仮面ライダーバンクシー!!」

「うわああああ!!」

仮面ライダーバンクシー、もとい、《誠実なる青王子》は死んだ。その瞬間、フラワー世界の大国、ムウエンの最高権力者はナイトメアとなった。

もちろんソレイユたちはその爆発に気づいた。

「ナイトメア：：！！」

ライダーたちは闘いをやめずに驚いている。

「どうだ俺の新フォームは。コットンローズっていうんだが。」

その言葉にソレイユは振り向き、薔薇より先にミラが叫んだ。

「俺の兄さんを殺したのはお前か！！」

ミラはドライバーのまま強化怪人態になり、ナイトメアのほうに走り出す。

「よせミラ！！」

レグルスが止めるが、敵も強くミラに構っていられなかった。

「うおおおおおおおおああ！！」

『ドライブフラワー！ ブラックローズ！！』

ナイトメアは不敵な笑みを浮かべている。

「ふははははははは。」

素早い動きで襲ってくるソレイユをナイトメアはひらりとかわし攻撃をする。

「お前は兄には勝てないだろう！！ミラ！！」

激怒で自我を保てていないミラを彼は煽り続ける。

「所詮お前たちは俺達には勝てないんだよ！！」

実際、マッド達はレグルス達に押し勝っているし、ソレイユもろくに攻撃を当てられ

ていない。

「その命中率で勝てるのか？」

「勝てるにきまつてる…!!」

ナイトメアが余裕で問いかけると、誰かが答えた。

「やれやれ、この体も潮時か…」

「サクラ!!俺はお前を!お前たちを愛している!こんな俺もどきになって負けるな!!レグルス!これを!」

ナイトメアは何を思ったのか、いきなりレグルスのほうへナイトメアフラワーのエナジーを投げつけた。

「余計なことをしやがって…」

彼は一人で言い争う。

なんと、レグルスにフラワーを投げたのはナイトメアではなく、湊敬一本人だったのだ。

「俺はもうどうなってもいい!ただ…お前を止めるだけだ!」

ナイトメアは笑いをこらえられなかった。

湊敬一の復活

湊敬一の人格が現れたことにより、ナイトメアの計画はいきなり狂い始めたのだった。

「仕方ない。俺はお前を殺すしかないようだ。せっかくなのでいい体を見つけたと思ったのに。」

ナイトメアは敬一の口から霧のように出て、怪人態としてその場に出た。ナイトメアの憑依が消え去った敬一は疲れからかその場に倒れこんだ。

「お前らが今から俺に抵抗したらその時点でこいつの心臓を一突きする。」
ナイトメアは剣を敬一の胸に当てる。

「さあ、レグルス。エナジーとコアを俺に渡せ。」

レグルスは戸惑い、まずはナイトメアフラーワのエナジーを見つめる。

「これが俺の強化アイテム……返したりはしない。」

ドライフラーワのソレイユも下手に動くと言からの仲間の敬一を殺すことになってしまふので、ただ立っているだけだ。

「敬一……」

サクラがドライバーのまま眩く。

「許して…」

フラワードライバーのサクラはかすかに涙を流した。

「時間切れだ。こいつを殺す。」

ナイトメアは敬一の胸に剣を突き刺そうとした。しかし、それは失敗に終わった。

なんと、敬一が起き上がりナイトメアの剣を弾き飛ばしたのだ。

「!？」

「体が軽いな。」

湊敬一、完全復活だ。

彼は驚くナイトメアに素手で殴り、蹴る。

「俺が人間単体に負けるわけないだろう。」

気を取り直したナイトメアも強烈なパンチを敬一に入れる。勿論その衝撃で敬一は

飛ばされる。

刹那、カニバルが輝いた。

『ナイトメアフラワー！ カニバルフラワー！』

「ふんっ！完全復活なのは敬一だけじゃない。この俺、サー||レグルス||スカーレットも同じだ!!」

輝きの中には一人の仮面ライダーが立っていた。ナイトメア軍のライダーは輝きの衝撃で一旦隙を見せる。

『啾碎！啾碎！ピラニア・カニバル！』

仮面ライダーカニバル・ピラニアフォームだ。ナイトメアフラーワの力を使うカニバルは、ナイトメアと力の大小関係は一緒だった。しかもナイトメアは怪人態なので今はカニバルのほうが断然強い。

「俺はお前を超える。」

カニバルは口調が変わりずいぶんと英雄らしくなっていた。

「おいお前ら！すきを一切見せるな!!」

ナイトメアは焦ったのか三人ライダーに指示をする。彼らは動き出すが、強化怪人態のミラ、ドライブフォームの裂羅そしてピラニアフォームのカニバルには勝ち目がないことが分かっていた。

ライダー二人とナイトメアは東京のくぼみに飛び込み、消えていった。しかし、サンだけは違った。

一人取り残されても、ナイトメアの指示を最後まで達成しようとしたのだ。

「みんな腰抜けだなあ。こんなのあたしだけでも倒せるよ。」

本当は泣きそうなサンは、震える声で呟き、剣を抜いた。

「ソレイユ。あたしはお前を倒す!!」

彼女は持ち前の速さでソレイユのところへ駆け込む。しかしソレイユは強化怪人態なのでサンは力負けしている。

「うおおおおああ!!」

ソレイユはサンの胸倉をつかみ木を何個も倒しながらまっすぐ進んでいく。

誰も彼を止められない。

「お前ソレイユじゃない!!あたしはソレイユに倒されたいのに!!」

サンは粉々になりそうな脳と戻ってきた過去の記憶で生を保っている。

彼女は死ぬ。

宿敵ソレイユではなく、ただのフラワー、ミラの力によって。

バイクを使って裂羅達が横からミラを止めようとしているのが少しだけ見える。

敵が何か言っている。もしかしたら、自分を救おうとしているのかもしれない。

「

彼女も何かを言おうとしたが、瞬間に地面に叩きつけられる。

爆音は静音になり、ソレイユのライダーキックで起こった爆発により彼女は消滅し

た。

ミラと薔薇は変身を解除し、その場に倒れ気絶する。

裂羅がバイクから降り、まだ半分燃えている土地をゆっくり眺める。

「私、もう仮面ライダーをやめるよ。」

彼女は変身を解除し、サクラと別れ、どこかへ消えていった。

「ミラは……自分を止められなかった。」

敬一が言う。

「確かに彼女は俺達の敵だ。だけど、サンも、薔薇もこんな最期を望んでないはずだ。」

これに、レグルスも付け足す。

「でも俺たちは英雄になる。それには感情なんて関係ないんだ。最初にナイトメアを討伐したときも、俺は何度も許しを請う敵を見てきた。けど倒さなきゃ自分が危ない。泣きながら殺害したさ。」

ミラの行動は少しも間違っていない。

彼らはナイトメア討伐に一步進んだのであった。

雨が降る。雨はミラ達を叩き起こし、ジャンヌがいけないという現実だけを告げた。

「彼女はやり切った。俺の代わりに裂羅として戦い、死んでもない。」

誰も理由は教えなかった。これ以上にミラの心身に負担をかけると本当に止められなくなるからだ。

ミラと薔薇は安心し、みんなで薔薇の家に帰った。

東京へ行くことは今回もダメだった。

あれから十何回目かの朝が来た。敬一と一緒に朝だ。誰も一度もジャンヌを見ていない。

彼らはいつものように作戦を練り、いつものように出発する。

ナイトメアは、あれから現れていない。

変わったことは埼玉が消えたことと自衛隊風の格好をした硬いフラーワが時空の割れ目から出てきていることだけだ。それと、日本政府が復活したこと。

政府は首都を臨時で被害の少ない大阪へ移し、硬いフラーワの名前を《ガムフラーワ》と名付け、東京と埼玉の大穴にできた割れ目を《エクスポーター》といった。

ガムフラーワやエクスポーターの存在も民衆に広まり、ソレイユたち仮面ライダーが高い人気を集めた。

しかしテレビで放送されていた仮面ライダーの存在は消滅していた。これもナイトメアの仕業なのだろうか。そんなことも考えられないまま、ソレイユたちもテレビ版仮面ライダーの記憶が消え去っていた。

ナイトメアのフォーム

「つつだあ!!っ…はあ…。」

自身の腹から二つのナイトメアフラワーエナジーを取り出したナイトメアは、悲しそうな顔をしてキラールとハリールにそれを渡す。

「これを早めに渡しとけば… ひなたも助かっただろうに。」

ひなたの訃報がムウエンに知れ渡ったのは彼女が殺害されてから一週間後だった。ナイトメアは声を挙げもせずにとだ「仕方ないことだ。」と言ったのだった。



日本の東京や埼玉が廃墟化すると同時にムウエン大国もかなりの勢いで滅びていった。政治の中心の王子が死んだ瞬間は皆ほとんど絶対王政だった政治が終わったことに喜んでいたが、次第に治安の悪化と民衆への徴兵令で笑顔がなくなっていた。

そして《誠実なる青王子》の城はナイトメアの力によって消滅し、日本とつながるエクスポーターに変化した。

ある日、人間がエクスポーターから出てくる。彼女は着地した後フラワーに変化する。

「英雄さんが忘れ物でもしたか。」

『Comant!』

男四人が現れ、彼女を囲みドライバーを巻きクローバーのエネルギーを出す。

「ああ、少し忘れ物をしてね。」

『Go G G G Going!』

彼らは四人同時に同じ仮面ライダーに変身した。名前は

「俺達は仮面ライダーコマントだ。かつて秘密結社エボルとしてレグルスと手を組んでいた。」

「だがあいつは自分の力に飢え、俺達を捨てた。」

「ナイトメアと手を組むつもりはないが、レグルスとその仲間をぶつ殺す!!」

「まずはお前からだ! ジャンヌ:。」

そういうとコマントは手を鳴らしジャンヌに襲い掛かる。パンチが、一発決まる。

「うっ!」

ジャンヌが倒れこむと一人が飛び上がる。

「四人出る意味はないな。はあ!!」

『Finished by Comant!!』

ドライバーの音声とともにライダーキックが行われ、ジャンヌは大爆発する。

「うわああああ!!!」

爆発の後ろではきれいに着地したコマントの一人がマスクの中でにやりと笑う。

「いくぞ。俺達の敵、レグルスを倒しにな。」

四人は変身したままエクスポーターに飛び込む。



ミラがひなたを倒してからちようど一週間後、ミラ達はまた東京に来ていた。ナイトメアらは必ずエナジーを取り返しに来る。その時がナイトメアを倒す絶好のチャンスだ。それを狙っている。

「ここでナイトメアを倒さなきゃ日本は終わる。」

薔薇がそういったとき、陰からフラワーが出てくる。

「ひなたのためにも、俺らが相手だ。」

仮面ライダーユリと仮面ライダーマッド、そして硬いフラワーだ。

「しかたない。私たちもいくよ!」

『フラワーベース!』 『ブラックローズ!』 『ブリーズオブサクラ!』 『ナイトメアフラワー

!・カニバル!』

「『変身!』」

ソレイユはマッド、裂羅はユリ、そしてカニバルはフラワーと戦う。

ナイトメアと同じ力を持ったカニバルはいとも簡単にフラーワを倒していく。

「この姿の俺がフラーワなんかには負けるわけねえだろ!!おらっ!!」

何人ものフラーワがカニバルに負けていく中、やはりそこにナイトメアが現れた。ナイトメアは倒されたフラーワの力を吸収したらしく、さらに強くなっていた。

すかさずナイトメアに攻撃するが、それは軽く抑えられる。

「この先ずつとその力が続くと思うな? ナイトメアフラーワには副作用があるんだよ!」

「何?」

ナイトメアがパンチを入れる。

「もともとその力は俺の体から取り出したものだ。俺以外の使用者はいずれ消滅する。」

カニバルは反撃して連続でパンチをするが、ナイトメアにはあまり効いていない。

「お前ごときが俺に勝てると思うな。」

ナイトメアはひなたが持っていた剣を持つ。

「これなんて言うかわかるか。サンシャインブレードだ。俺は彼女が死んでとつても悔しかった。だからお前達をこれで殺す!」

『コットンローズ! サンシャイニング フィニッシュ!!』

「ぬあああああっつ!!」

その場には大爆発が起こるが、中からカニバルが出てくる。

「悪いな。俺も愛する人をなくしてるんだ。」

「ああ、ジャンヌか。そんなことなら俺が殺る価値はねえ。キラー！やれ。」

ナイトメアが言うのとユリがすぐに出てくる。

「裂羅はどうした？」

カニバルが聞くとユリは後ろを指さす。そこにはボロボロになった裂羅の姿があった。

「きつと久しぶりだから力をうまく使えてなかったんだろう。情けないやつだ。だがお前には本気を出さなきゃ勝てなそうだ。」

『ナイトメアフラーワ！ ユリ！』

ユリはナイトメアフラーワエナジーを出し、ユリのエナジーをセットしてドライバーに挿入する。

「存分に戦え。仮面ライダーユリ・メアフォーム！」

ナイトメアはそう言って割れ目に包まれ消えてゆく。

「ははははは。．．． チェンジエナジー!!」

『悪夢！悪夢！メア・ユリ！』

「それ、メアのユリフォームじゃないの？」

カニバルの突っ込みによって場は風の音が聞こえるほど静かになる。が、ユリの攻撃によってすぐに沈黙は破られた。

「うるせえ!!ぶつ殺すぞ!!」

ナイトメアの力を使いさらに好戦的になったユリはもはや自分の本能でカニバルに攻撃している。

「お前も力に慣れてないか!!」

カニバルは割れ目を使い攻撃をよけ、一発一発確実に攻撃を入れてゆく。

「俺はナイトメアを殺すために生きてきた!!お前みたいにフラーワという抽象的な目標じゃない!はあ!!」

カニバルのパンチでユリは一気にダメージを負う。そこでできた隙にさらにカニバルが時空の力を使いユリを動けなくする。

「お前はもう終わりだ!!新フォームがかわいそうだな。はあ!!」

カニバルは飛び上がり空中でフラーワを抜きまた挿す。

『カニバル・ナイトメア・フィニッシュ!!』

彼はライダーキックの体勢になり一直線にユリに向かう。しかもその間に割れ目を作りユリを固めている割れ目から出てくる。しかもそれを繰り返すのだ。勿論ユリには大ダメージが入り、爆発を起こし消滅する。

「ユリ!!」

ソレイユと戦っていたマッドが爆発に気づき声を上げる。しかしもうそこに仮面ライダーユリ（キラー）の姿はなかった。

「ソレイユ!!俺はひなたやキラーの分までお前を倒す!!」

彼はそういったとたん複眼が赤く光る。彼の殺意が彼を生長させたのだ。スーツの中の彼は強化怪人態になった合図だ。

『ナイトメアフラワー! ハス!』

「絶対に負けねえよ…… チェンジエナジー!!」

『悪夢!悪夢!メア・ハス!!』

仮面ライダーマッド・メアフォーム。それはナイトメアより狂気じみたライダーなのかもしれない。

レグルスの仲間

マッドのメアフォームはソレイユが有利だった戦場をいきなり形勢逆転させた。彼はブラックローズのソレイユをキック一発で動けなくした。

「体が動かない!？」

「まずはお前からだ!はあ!!」

『マッド・ナイトメア・フィニッシュ!!』

彼は飛び上がりライダーキックの体勢になる。そしてソレイユに突っ込んでいく。が、失敗に終わった。

「何?」

カニバルが時空の力を使いソレイユ、裂羅、そして自身を安全な場所へ移動させたのだ。

だがマッドにも余裕があるようだ。

「はははははははは!!」

彼はキラールが落としていったユリのエネルギーとナイトメアフラワーのエネルギーを拾い、自身をエクスポーターに包み込んだ。

「この世界を支配するのはナイトメアだ。」

一方、東京にあるエクスポーターの近くに出てきたソレイユたちは自らの傷を癒していた。その場にいた自衛隊らが応急処置の道具を持っていたのだった。

特に裂羅こと敬一とサクラは大けがを負っていたのですが、すぐには回復しなかった。

「私の家まで行つたほうがよかつた？」

薔薇が包帯で体をぐるぐる巻きにされている敬一を見て言う。が、彼は「大丈夫だ。」の一点張りだった。

彼らが東京で戦っている間、また日本の都市が一つ消えた。今度は栃木県だ。しかし栃木は東京や埼玉とは違って空中に行かず爆発により廃墟化したのだった。

その事実がたった今仮面ライダー達に伝わる。

「ナイトメアが力をつけたということか。」

「それは違うな。」

敬一の意見に誰かが答える。その声は妙に懐かしく、圧があった。

「俺達の宣戦布告だよ。」

一人が言った後、同じような姿の人間がエクスポーターから三人出てくる。

「久しぶりの地球だな。」

「うん！久しぶりだね。コメント達！」

最後の一人が言う、レグルスが嬉しそうに返す。

彼らは仮面ライダーコマント。かつて秘密結社エボルとしてレグルスと一緒に戦っていた者だ。

「もつといたでしょ。ほかのみんなは？」

「ああ、皆辞めていったよ。お前が俺達を捨てたからな!!」

『Comant growin' now Comant growin' now』

一人がベルトを巻き付け待機音を鳴らす。レグルスは状況を理解していないのか戦う準備すらしていない。

「俺と一緒に戦うの？」

「いいや、俺たちはお前と戦う。戦争で死んだ仲間たちのためにもな!! 変身!!」

『G O G G G Going!』

ベルトの音声とともに彼の周りには巨大なクローバーが生える。そしてそれは彼の両肩と胸、顔に装着され、仮面ライダーコマントのスーツへと変形する。

「レグルス!! スカーレット!! 死ねえ!!!」

レグルスはまだ変身していない。

『Finished by Comant!!』

コマントはレグルスに向かって走り、全身の力を右拳に込めてレグルスの腹を殴る。

しかしレグルスは一切の抵抗をしない。そしてフィニッシャーを受けたら起こるはずの爆発も不発に終わった。

「これでナイトメアフラーワのエナジーを取り返すことができた。協力ありがとう。」

レグルスがナイトメアの声でそう言った。レグルスがナイトメアになったのだ。

ナイトメアは人間態レグルスが鞆にしまっておいたナイトメアフラーワのエナジーを取り、ドライバーを巻く。

「まさか仲間に裏切られた挙句、敵に体を憑依されるとは思わなかっただろう。」

ナイトメアはそういうと倒れたコマントの体に触れる。すると彼は液体状になり、ナイトメアの体に入ってゆく。

「俺はどんどん強くなる。お前たちに負けない程にな！」

『ナイトメアフラーワ！ クローバー！』

「変身。」

『悪夢！悪夢！メア・クローバー！』

残された三人はドライバーを巻こうとする。が、それは不要だった。

「その前に倒せばいいことだ！変身！」

『ブラッククローズ!!』

薔薇がソレイユに変身したからだ。

「おっと、レグルスの体は大丈夫なのかな？」

この状態でナイトメアを倒すと、同時にレグルスも倒すことになってしまう。ソレイユは、一方的にやられているだけだ。

「はははははは!! 仮面ライダーにはなったものの、攻撃ができなければ意味がない! 仮面ライダーソレイユは今日で終わりかな!」

ナイトメアはエナジーをドライバーに抜き差しする。

『ナイトメア・フィニッシュ!』

「死ね!」

そして抵抗できないソレイユに近づき、下から上へと蹴りを入れる。

「あああああああ!!!」

必殺技が決まり、その場は大爆発した。

「ソレイユ!」

裂羅が声を上げる。

「薔薇は無事だよ。」

爆発の中から声がする。これもまた聞き覚えがある懐かしい声だ。

「ああ、久しぶりだね。ちよっとこれを取りに行つて。」

煙が止んだところで声の主は薔薇を抱えて姿を現し、片手で持っているエナジーを皆

に見せた。

「ジャンヌ！」

ナイトメアに憑依されているはずのレグルスが叫ぶ。

「くそっ!! また愛とやらの計画を邪魔された...」

ナイトメアは悔しそうにレグルスの体から出、時空の割れ目に包まれ消え去る。

「まだ生きてたのか。」

「ああ、私は不死身さ！」

コマントの一人がドライバーを巻く。

「運よく生き延びたが、それもこれまでだ!! 変身！」

『G O G G G Going!』

ジャンヌのほうへ走り、エナジーを出し入れしてフィニッシャーの準備をする。

『Finished by Comant!』

「やめろおおおおお!!!」

『Carnivorous!!』『Finished by Carnivorous!!!』

「うわっ!!!」

間に合った。

カニバルはジャンヌに襲い掛かっているコマントを蹴り飛ばしたのだ。彼はほんと

胸をなでおろした。

一方かつての秘密結社エボルは仲間が二人死んで絶望に浸っていた。

「俺達と一緒にいこう。」

そこに現れたのはナイトメアだ。

「どうやらそうするしかないようだな。」

レグルスの部下だった彼らはいかに最悪の集団と手を組んだのだった。

日常のソレイユ

レグルスがナイトメアの力を使えなくなったので、彼女らはバイクで家まで帰った。途中にフラワーワに出会ったが、変身して軽々と倒していった。今の彼女らにはガムフラワーワなど通用しないのだった。

日本はフラワーワ世界からの襲撃に結構な被害を受けていたが、薔薇の家は全然無事だった。

「あーーーーー。やっと落ち着ける！」

薔薇は家に帰ると一番最初にベッドに飛び込む。

しかし予想外に彼女は落ち着けなかった。

ミラ、レグルス、敬一の三人がうるさすぎたからだ。しかもサクラとジャンヌはフラワーワ世界の戦争を長い間経験していたせいでちよつとやそつとの騒音を全然気にしないのだ。

「うるさーーーーーい!!あ、お風呂はいる！」

『フラワーワ!!』

薔薇の攻撃は三人の英雄には全く効かなかった。なので彼女は風呂に逃げた。

薔薇が風呂に逃げている間、敬一が何やらぐしやぐしやのカードのようなものを出した。

「そうだ、俺家からずっとトランプ持ってきてたんだ。」

『ナイトメアフラワーワ!』

それを見て、「ぐしやぐしやすぎ。」とレグルス。「これトランプって言えないでしょ。」とミラ。

「なんだと! せっかくのパーティーグッズなのに! ほらほらやるぞ!」

そんなことも気にせず敬一はぐしやぐしやのトランプを広げる。

「ちよつと敬一。あんたこれいつから持ってたの。」

サクラがそれを止めてすべてをゴミ箱の中に捨てた。敬一はしよんぼりとした表情をし答える。

「ナイトメアに体に乗っ取られる前。」

『悪夢!』

ミラは棚から薔薇と服を買いに行ったときに買ったトランプを出す。

「最初からそれだせばよかったじゃない。ってジャンヌちゃん、何してるの?」

ジャンヌは何やら後ろを向いて棒をいじっているようだ。

「ああ、この棒はどういう武器なのかなあとね。」

ジャンヌはさつきからいじっている棒を見せる。

「それ突つ張り棒だよ。薔薇がつけれなかったんじゃない。」

レグルスが答える。

ちようどそのタイミングで薔薇が風呂から出てきた。

「サクラたちも入つていいよ……つてジャンヌ!? 何してんの?」

『ブリーズオブサクラ!』

ジャンヌは怪人態になり、爪で突つ張り棒を削り尖らせていた。

「薔薇、この娘集中したら聞かないタイプだったの。」

「もー! ゴミが出ちやうでしょ。ほらちよつと男子! 掃除して!」

『あなやあなやといひけれど』

薔薇に箒を渡されたミラ達は「なんで俺達が」など言いながらやつていたがレグルスがバランスを取り始めてからふざけ始めたのだった。

とうとう薔薇は怒り、箒を取り上げ玄関から外に投げる。

「俺達の箒が!!」

男性達が箒を取りに外に出たところで、彼女はドアを閉め鍵をかけた。

「もう!」と彼女はふくれつ面でベッドに座る。

しかし同時に、「でも、そういうところもないと疲れちやうよね。」と呟いた。

「ジャンヌ、サクラ、一緒にお風呂入っておいで！」

「いたただくよ。」

彼女らが風呂から上がると、男子たちがまたトランプをしていた。

「敬一さんババ抜き以外よわいな。」

ミラが言うが、敬一は聞かずにある発見をする。

（おい、これ今からお風呂入ればサクラの残り湯にはいれるってことか……）

『ブリーズオブサクラ！』

この最悪な発見はもちろんレグルスもしていた。

（敬一には悪いけど俺は実質ジャンヌと一緒にふろに入るっていう空間を味わうため

！）

『ピラニア・カニバル！』

「うおおおおお!!」

彼らは必死で服を脱ぎますが、サクラが

「ごめん！お湯抜いちやっただ。」

「え。」

半裸の敬一とレグルスは吹いた風に体を震わせる。

「聞こえてたのか!?!」

「丸聞こえだよ。気持ち悪すぎ。」

「どうしたのよ。今日ばかりは楽しい雰囲気なんだから気抜いてもいいんじゃないの？」

ベッドに座り神妙な表情をしている薔薇に、サクラが声をかける。

「仮面ライダーになって、こういう楽しい場が増えたなっておもって。」

「そうね。ふぎけあつて、喧嘩もする。そんな仲間が私にできたことがすごいと思うし、何しろ敬一があんなに無防備な笑顔を見せたことはめったにないわ。それが見れてうれしいわ。」

薔薇も一瞬ミラを見るが、彼は素が余裕ある者だったのであまり変わらなかった。

「私、仮面ライダーになるまでずっと引きこもりだったんだ。学生時代も友達すらできなくて。大学を辞めてから親の電話以外人と話さなかった。」

澤谷薔薇は彼女の人生を振り返った。

「でも、初めてミラと出会って、裂羅とカニバルとも出会って、こんなに人生が楽しいって思えたことはなかった。今のみんなとずっと一緒にいられないかなとか、思ってる。」

薔薇はナイトメアの顔を思い出す。

「ナイトメアも、人類に危害を加えなかったらずっといてほしいんだ。ナイトメアがい

る限り、私たちはつながってられるから。」

薔薇がそういったとき、そのナイトメアが、テレビに映った。

『はははははは！仮面ライダー、見てるか？俺だ。明日の朝に埼玉県へ来い。俺と最後の戦いをしようじゃないか。一応言っておく、仮面ライダー。お前たちがいなくなったら地球は完全に俺のものだ。俺以外で地球上に仮面ライダーより強いやつはいないからな。地球の皆さん！この世界は仮面ライダーにかかっています。ぜひとも応援してあげてください！はははははは!!』

そのあとニュースはずっとその内容を繰り返していた。この放送は全家庭に放送された。彼は全テレビのネットワークをジャックして放送したのだった。

「よし、これをあげるからがんばってくれよ。仮面ライダーー！」

ジャンヌが言い、薔薇にエナジーを渡す。

「これは？」

「私の仲間、トーマスのエナジーさ。」

薔薇はしっかり受け取る。これにはジャンヌとその仲間の思い出が全部詰まっているのだ。

「よし、今日はもう寝るか！」

薔薇はそういって電気を消し、ベッドに入った。

「ついに明日：： 決着をつけなきゃいけないさそうだね。」

「僕も頑張るよ。お休み。」

「うん、お休み。」

仮面ライダーソレイユの澤谷薔薇は目を閉じる。

次の朝、どことなく空気が緊張している中彼らはバイクに乗って埼玉県のエクスポーターへ向かった。彼らは小さなエクスポーターに包まれ、空中の廃墟化した街へ移動した。

「おはよう！早速これからお前達を全員倒すんだが、準備はいいか？」

ナイトメアは手の骨と首を鳴らし、準備万端を示している。

「勿論だよ。倒されるのはお前だけどな！行くよ、ミラ。」

「ああ！」

ミラは薔薇の腰に巻き付く。

「俺らも行くぞ！」

「うん！」

サクラも敬一の腰に巻き付き、レグルスもドライバーを腰に巻き付ける。

「ああそうだった。レグルス。お前にはこれを貸すよ。」

ナイトメアはレグルスの手の上にエクスポーターを作り、そこからはナイトメアフ

ラーワのエナジーが出てくる。

「そんなにハンデつけちゃっていいんだね。俺達は容赦しないよ。」

『フラワーベース！ ブラックローズ！』『ブリーズオブサクラ！ サクラ！』『ナイトメアフラワー カニバルフラワー！』

「最後の戦いだから、私たちは全員本気だ！」 「二変身！二」

『パワーサプレッション！その黒色は何の色！正義のためか悪のためか！ソレイユ』
「ブラックローズ！！フラワーワー！！」

『桜花 今そ盛りと 人は云へど われはさぶしも 君としあらねば！ フラワーツワ
！！』

『啾碎！啾碎！ピラニア・カニバル！』

仮面ライダーソレイユ・ブラックローズフォーム、仮面ライダー裂羅・吹雪、仮面ライダーピラニア・カニバル。彼らは三人でナイトメアに襲い掛かった。

最後の戦い

「さあ、お前たちに俺が倒せるかな？」

「うおおおおお!!」

彼らは全力でナイトメアに襲い掛かる。

『悪夢！悪夢！メア・ユーカーリ!』

カニバルは小さめの食虫植物を生やしナイトメアにかみつかせる。ナイトメアがそれを取り払おうとしているところに裂羅が連続でパンチをし、ソレイユがライダーキックをする、という作戦だ。

だがその作戦はいきなり失敗に終わった。

ナイトメアがカニバル中心に攻撃をしているのだ。

「くそっ！ピラニア・カニバルを舐めやがって!!」

『ピラニア・フィニッシュ!!』

カニバルが助走をつけてライダーキックをすると、それはナイトメアの懐に綺麗に入った。カニバルには食虫植物の幻影がつき、ナイトメアに噛みつく。

「ぬわあ!!」

ナイトメアはハスのエナジーを落とす。カニバルはそれを拾う。

「お前にそれを持つ資格はない!!」『ナイトメア・フィニッシュ!!』

ナイトメアはカニバルにユーカリの葉を飛ばす。とがったその葉がカニバルを惑わ
せ、その間にパンチをする。

「やはりお前は俺を倒せない!」

「ぐわああああああ!!!」

大爆発が起こり、ボロボロのカニバルがそこから出てくる。

「ごめんよ。俺は一旦引くとするよ。」

カニバルは自身でエクスポーターを作りそこに入る。

裂羅とソレイユはそれを気にせずどんどんナイトメアを攻める。しかし彼にはあま
り攻撃が効かない。

「なんで攻撃が効かないんだ!」

ソレイユが言うとなイトメアは答える。

「受けた攻撃の半分以上のエナジーを俺のものにしてるからだよ。」

彼は笑いをこらえられていない。今日ソレイユたちと最後の戦いをしようと誘った
のも自分のエナジーを貯めるためだったのだ。ソレイユはまんまとそれに引つ掛か
り、本気でナイトメアを倒そうと努力していたのだ。

「お前!! 私たちを騙したのか!」

「騙されるほうが悪いんだよ。例えお前達が勝つてもこの世界は終わりだ。」

「お前ええええええ!!」『マウンテンサクラ!』

マウンテンサクラエナジー。先日、薔薇がジャンヌからもらったトーマスのエナジーだ。それにはジャンヌの仲間達との記憶が入っている。

「なんだそのエナジーは。」

「うおおおお!! チェンジエナジー!!」

ソレイユはフラーワベースとブラックローズをドライブバーから外し、マウンテンサクラエナジーを差し込んだ。

しかし、そううまくはいかなかった。

フラーワドライブバーからは煙が出て、体には稲妻が走る。ソレイユに変身している薔薇自身にも痛みや激しいめまいが出てきたのだった。

「使うのをやめろソレイユ!! お前が死んじまうぞ!」

裂羅が忠告したが、ソレイユは聞かない。

「ぬわああああ!!」

「はっ!」

裂羅はナイトメアに一発かなり強いダメージのパンチを入れて怯ませ、苦しむソレイ

ユのエナジーを抜き自分のドライバーに刺した。

「桜のエナジーは俺のものだ！ チェンジエナジー！」

『世界に桜を咲かせる者！ 仮面ライダー・サクラ・マウンテン！！ フーラーワー！！』

仮面ライダー・裂羅・マウンテンフォームが誕生したのだった。

「なんで裂羅は使えるの？」

薔薇が聞くが、それは裂羅自身にもわからない。

「サクラの力を使うのは俺だからな！ いくぜソレイユ！」

ナイトメアはいきなりの新フォームに混乱している。

『ブラックローズ・フィニッシュュ！』『マウンテン・フィニッシュュ！』

「そんな攻撃も全部力を吸ってやる!!」

ナイトメアの周りには裂羅ほどの大きさの山がたくさん造られ、ナイトメアを固める。そしてそこに裂羅とソレイユがライダーキックを入れて山ごと破壊する。それがソレイユと裂羅の必殺技だ。

「うおおおおお!!」

ナイトメアが必死で二人の攻撃に耐えている中、後ろからもドライバーの音声が聞こえる。

『カニバル・ナイトメア・フィニッシュュ!!』

「はあっ!!」

後ろからのカニバルの一撃にナイトメアは大爆発をし、消滅した。

「なああああああああ!!…… ははっ」

爆発の周りで、三人の仮面ライダーが着地する。

「ナイトメアが死んだ……」

「俺の強化フォームも見てほしかったけど……」

「俺の最後のキックのおかげだね。」

「お前逃げただろー!!」

変身を解除してみんなが喜ぶ中、ソレイユだけは違和感を覚えた。

「いや、ナイトメアは死んでない。」

ソレイユは静かにドライバーからエナジーを抜き話を続ける。

「ナイトメアはなんでマッドを連れてこなかった?」

「それはあいつがマッドを殺したくなかったからだろ。」

「だとしてもなんでマッドは来なかった? いつもなら当然のようにエクスポーターから

出てくるのに。」

「マッドが逃げたとかじゃないの?」

薔薇はそれが引っかけかかって取れない。が、低い声で自問自答をる。

「はは!!」

ナイトメアは薔薇の体を捨ててエクスポーターへ去っていった。

「究極のナイトメア：俺が昔戦ったときは見たことなかった：」

仮面ライダー達も薔薇の家にエクスポーターを使ってワープした。

ラフレルの復活

ナイトメアが完全体になって、日本の崩壊はさらに速度を上げていった。仮面ライダー・ナイトメアにとって、建物を一つ破壊することなどとても簡単だった。だが彼自身はそんなに破壊活動をしていなかった。代わりに、ナイトメアの手下の生き残り、マツドとかつての上司であったレグルスを倒したいコマントが仮面ライダー達をおびき寄せるために街を破壊していた。

「全部！全部破壊してやる！」

「くれぐれも忘れるな。俺達の目的は仮面ライダー達からエナジーを奪うことだ。」

今日も、いつものように建物を破壊していた。するとついに仮面ライダーがバイクに乗って表れたのだった。

「ついに現れたか。仮面ライダー。」

しかし、バイクに乗っていたのは彼らの敵ではなかった。

「やってるなあ。」

ナイトメアだ。彼はすでに変身しており、攻撃の準備は万端だった。

「お前が出る必要はない、ナイトメア。」

「そんなことはわかってるよマツド。だが、言い忘れたことがあった。仮面ライダー裂羅には気をつける。ただものじゃないからな。」

ナイトメアはそういつてエクスポーターに消えていった。

「わかってるさ、俺は人間なんかにまけない。」



ナイトメア軍の破壊活動を止めるために、ソレイユ一行は毎日大忙しだった。彼らが地球に送り出すガムフラーワは倒しても倒しても数が減らないのだった。

どこから現れているのかわからないガムフラーワは、何も考えずに破壊活動をしているのだった。

「ソレイユ！仮面ライダーの情報だ！今はそっちに行くぞ！」

裂羅がソレイユに呼びかける。だがソレイユは「私はこっちにいるから！」といつていかなかった。

「仕方ねえ。ソレイユ！ジャンヌ！そっちは任せた！」

そういうと裂羅とカニバルはバイクに乗ってメールに書いてあった場所に向かう。彼らは海辺の町に着くと、バイクを降りて仮面ライダーを探す。

「どこだ!!」

「はあ!!」

裂羅が後ろから誰かに剣を刺される。気づいたカニバルが攻撃して追い払おうとするが、攻撃は全く当たらない。

「なんなんだお前は!!」

カニバルが叫ぶと、それは変わり果てた姿をあらわにする。

「俺だよ。仮面ライダーラフレルだ。もつとも今は仮面ライダーメアラフレルだがな。」

ラフレルは二人いる。裂羅がそれに気づいたときには、もう手遅れだった。

「ふっ!!」

カニバルはもう一人のラフレルに背中を刺され、変身解除し倒れこむ。

「ラフレルは二人とも死んだはずじゃないのか!!」

裂羅が言うのと女声のほう答える。

「私たちは一回死んだ。だが地球エネルギーをナイトメア様に分けてもらって、今を生きているのだ。」

そして、男声のほうは、

「これで終わりだ。もう地球のエネルギーが吸い取られ始めていることを把握しといたほうがいいかもな!!」

『ラフレシア・ナイトメア・フィニッシュ!!』

辺りには表現できない臭いがたちこみ、人間の状態のレグルス達にライダーキックを

与える。

「英雄でも、死ぬのは怖いもんだねえ、敬一。」

「誰だってそうさ。」

彼らはもう、死ぬ覚悟を決めていた。しかし、

『ブリーズオブサクラー!』

彼らが受けるはずだったライダーキックは、不発に終わった。

「もう一人の……裂羅……?」

そうそこには、仮面ライダー裂羅・ドライブフォームが彼らを助ける姿があった。

「忘れたのかい? 私も裂羅なんだよ!」

中身はジャンヌだった。

「さあ、市民の皆さんに介抱してもらって! ソレイユ、行こうじゃないか!」

ブラックローズのソレイユが遅れて登場する。そして、裂羅が使ってるフラワードラ

イバーは、彼女が裏ルートでランダン市民と取引したものである。

「相手は一回死んでるんだ! ミラ、ジャンヌ! 余裕でしょ!!」

裂羅はシャウラと、ソレイユはパートナーの意識が存在しないウエズンと戦う。

シャウラが攻撃を受け一瞬の間を見せた時、裂羅は見逃さなかった。

「終わりなのはお前だ。」

『裂羅吹雪・フィンツシユ!』

いきなり降ってくる桜は、巨大な隕石となりシャウラを攻撃する。そしてシャウラの目の前に隕石が降りかかった瞬間、ライダーキックでその隕石とともにシャウラを破壊するのだった。

「うわあああああ!!!」

一方ソレイユはウエズンとは根本的に何かが違った。一番最初に倒した敵である彼は、ソレイユにとって何も勝ち目がなかったのだ。

「あの時とは、レベルが違う…。しかし…」

『ラフレシア・ナイトメア・フィンツシユ!』

ソレイユとラフレルはライダーキックでぶつかると、途中でラフレルの体が真っ黒になり、その場へ落下したのだった。

「これがソレイユの力…!」

一つにまとめられたウエズンとシャウラにはもう勝ち目がなかった。

「私たちが殺してももう遅い…。地球のエネルギーはもう吸われ始めてるからなあ!!!」

「ああ、お前達の無駄な努力は俺達にとってはバカとしか見れねえ。だけどな、同時に褒めてやりたくなるんだよ。だから俺達はお前たちの力になる。」

ウエズンは自分のエナジーを出す。そこにシャウラが手をかざす。すると、エナジー

が光りだし姿が変わる。鉄でできたただの物体だった。

「俺達にできるのはここまでだ。ナイトメアによるしくな。」

「私も、健闘を祈ってるよ。」

「地球のエネルギーも大したことねえなあああああ!!」

そういつて二人の変身は解除されずに、大爆発もせずに、消滅した。

「なんか、毎回毎回胸糞悪いな。」

「ラフレル達は最後に私たちに希望をくれた。これで私たちができることを探さなくちゃー!」

そこに、フラーワを引き連れた仮面ライダーが現れた。あてはまるのはただ一人、マッドだった。

「地球エネルギーを与えたふりをすれば、少しは強くなったと思っただがなあ。」

「どういうつもりだ!」

マッドは全種類のフラーワでソレイユたちに攻撃する。

「あんな雑魚たちにはエネルギーは与えない。だが今回は違う!地球エネルギーを過剰に摂取し本能のごとく戦っているガムフラーワその名も!《ネオフラーワ》と戦え!」

ネオフラーワは生成された時から地球エネルギーが充満する部屋で鍛えられ、普通のガムフラーワの1.5倍の強さを持っているのだ。

「ちなみに：俺もナイトメアに内緒でネオフラーワと一緒に部屋で生活していた!!」

地球エネルギーの影響か、彼はテンションが高くなっている。

「ははははは!!地球は終わりだ!!」

ソレイユ達は、ネオフラーワと戦うが、攻撃は全然入らない。

ソレイユの敗北？

ソレイユたちは全然攻撃の入らないネオフラーワに混乱していたが、徐々にやり方を覚えていった。

「ソレイユ！カニバル！ジャンヌ！必殺技だけでも当てろ!!」

「わかった!」

『ピラニア・フィニッシュ!』『マウンテン・フィニッシュ!』『裂羅吹雪・フィニッシュ!』

「はあああ!!」

数あるライダーの技の中で必殺技だけが確実にヒットしたのだった。

だが、問題はここからだった。まだまだ量があるネオフラーワ。ライダー達が必殺技を使うには体力が足りなすぎるのだった。

「ナイトメアに代わって!この俺が!地球の最後を見届けるのだ!!」

狂気に満ち溢れたマッドは笑い転げている。町の住民の悲鳴が、彼の神経を刺激するのだった。

「お前は許さない。私が絶対に倒す。」

一人だけ体力が有り余っているソレイユは、攻撃してくるネオフラワーを無視してマッドに近づいていく。

「僕はいつでも大丈夫だよ。薔薇。」

「つらくなったら頼ってね。ミラ。」

ソレイユの手の中には色が抜けた薔薇の花びらのフラワーが入る。それと一緒に、バラのフラワーも起動する。

『ドライブフラワー！ バラ！』

ミラの姿が変わる。

「ソレイユ！大丈夫なのか？」

戦っている裂羅が気づき言う。しかしそれにソレイユは答えない。彼女は無言でドライブにセットする。

『ドライブドハートは還らない！ドライブフラワー・バラ！！ フラワーッワ！』

仮面ライダーソレイユ・ドライローズフォームがそこに現れた。

「今の僕は：： わからない。」

ソレイユの複眼は赤く光り、すごい速さでマッドに向かっていく。しかしマッドはその速さにも簡単に追いつけている。ソレイユの攻撃を手で受け止め、カウンターまでしようとしているのだった。

「ソレイユの力もこんなもんか。はあっ!!」

マッドの一発の蹴りで、ソレイユは遠くへ飛ばされる。しかしソレイユもそれに懲りず、必殺技の準備をする。

『ドライド・ブレイク!』

ソレイユはマッドに向かって飛び、時速300kmでライダーキックを入れる。

「うわああああああ!!なんてな!」

だが、力の差は速さでは埋められなかった。マッドはそれすらも片手で受け止めた。

「地球人のくせに地球エネルギーの大きさも知らないのか!!」

マッドは片手でフラーワを抜き差しする。

『マッド・ナイトメア・フィニッシュ!』

ソレイユの足をつかんだまま、横から強烈なキックをしたのだった。

「やめろおとおお!!」

レグルスが叫ぶ。しかし、ソレイユの横腹には確実に足が当たっていた。

ソレイユは回転しながら灯台に叩きつけられ落下する。

灯台は大爆発を起こし、倒れた。

「地球エネルギーをあなどったな。」

「お前ふざけんなよ!!ぶっ殺してやる!」

裂羅がネオフラーワを振り払い、剣を出し襲い掛かる。『蒲公英！ 裂羅・蒲公英斬

！』

剣の幻影が十ほどに増えて相手を攻撃するのだが、マッドと裂羅の間にネオフラーワが入り、マッド自体に攻撃は全く入らなかった。

「うわあああああああああ!!」

裂羅は怒った。怒り狂ったのだった。ソレイユが殺されたことで、もう地球の命はないと悟ったのだ。

これには、ジャンヌもレグルスも黙って下を向く。

「お前らーそこに跪け!!」

マッドは笑いながらライダーに命令する。

「…」

ライダーは変身を解除する。もう、抵抗はできない。

『ドサツ』という音とともに、敬一が跪いたのが分かった。それに合わせて、ジャンヌとレグルス、サクラも同じことをする。

「お前ら、あれをつけろ。」

かつての英雄たちにネオフラーワ達が集まる。そして腕には何語かわからない焼印が入れられた。

「その焼印を入れられたものは俺の地球エネルギーを使って消滅させることができる。はあつー！」

彼は試しにということ一人で、ネオフラーワを消滅させた。ネオフラーワの最期は叫び、とても辛そうだった。

「お前らが抵抗しないようにだよ。今からお前達はナイトメア軍だ！」

それを言ったところで、ネオフラーワの後ろからあるライダーが現れた。

「何一人ですすめちやってんだよ。」

ナイトメアだった。

「遅いと思ったらこんなことをしてたのか。あんま調子に乗るなよ。」

ナイトメアはマッドの肩をポンポンと叩く。

「調子に乗ってなんかない！俺はあなたのために！」

「わかってるよ。どっちみち『世界』の崩壊に近づいてはいるんだ。まあせいぜいがんばれ。」

そっくり、ナイトメアは物影に隠れる。

すると、何かが高速でその場を走り、直後にネオフラーワ達が大爆発を起こす。海の見える丘で、『何か』は止まり正体をあらわにする。

「私は世界を救う仮面ライダー！ソレイユだ！」

ただ、仲間達の知っている姿ではない。

「はあっ!!」

ソレイユはそこそこ遠い丘の上からライダーキックの体勢になる。足裏から出る標準は勿論、マッドだ。

「お前……！仲間が死ぬ場をここで見るがいい！はあっ！」

かつての英雄たちはソレイユにすべてを託し、死を決心した。

しかし、何も起こらない。

マッドは驚き、戸惑う。

「なぜだ！は！お前、何をした!!」

「さあね！私はお前の攻撃を受けただけだよ！」

マッドが地球エネルギーをフルに使ってソレイユの攻撃をしたとき、薔薇が着ていたパーカーの腹ポケットに入れていた鉄の塊がマッドのエネルギーをすべて吸収したのだ。そして彼女が落下して変身解除したとき、その鉄の塊は彼女の変身アイテムになっていたのだ。その名も《ラージソレイユ》。

彼女は微かに残った力でラージソレイユを使い変身し、仮面ライダーソレイユガーデーンになったのだ。

爆発はその時のものなのだった。

「だが使い慣れていない新フォームで勝てるわけがない!!」

「私は…挑むよ。はあっ!!」

ソレイユはそのままの体勢で、マッドに突っ込んでいく。

しかしマッドも負けていられない。彼は両手で彼女の攻撃を抑える。

これが貫通すれば、マッドは死ぬ。ソレイユは最終フォームでそれを狙っている。

「私たちの地球を!!返せ!!」

ソレイユのガーデン

「だああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

ソレイユの最終フォームはマッドの防御中の体にキックの体勢で粘っている。それに対し、マッドはだんだん防御が薄れていつているのがわかる。

「いけーソレイユー!」

裂羅達はソレイユを全力で応援する。すると、ソレイユの体が少しずつマッドに入っていく。

「俺が仮面ライダーなんかには負けるはずがない…!!」

「お前は絶対に許さない!!だああああああ!!」

仮面ライダーソレイユはどんどんマッドの体を貫通して、ついに背中から足が出てきたのだった。

マッドは体が震え、マスクの外からでも伝わる悔しさに満ちた顔面を見せている。

「あとは頼んだ… ナイトメア…」

マッドは顔を陰のほうへ向ける。それに気づいた裂羅はそこにいる者に気付きソレイユを止める。

「ソレイユまで！倒すな!!」

『ガーデニング・フィニッシュ!!』

だが、もう遅かった。ソレイユには裂羅の声が聞こえず、マッドをライダーキックで倒してしまった。ソレイユが着地した後ろでは、マッドが倒れ、大爆発が起きる。大爆発の跡地には一つのエナジーが残っている。

「ソレイユ、まだ終わってない……」

裂羅はエナジーを拾うが、それは手から離れて、陰のほうへ引かれていった。

「ここからが本当の戦いかもしれないな……」

裂羅は陰のほうへ行くが、そこには何もいなかった。ソレイユたちは変身を解除した。

家に帰り、皆は疲れを癒すために寝たりするが、薔薇だけは一休みもしなかった。

地球の運命が自分にかかっている。そのことを自覚している彼女は、すぐにミラと出かけて行った。

ジャンヌが、心配になって隠れてついていった。

街は、大量のフラワーワであふれている。

「人間が植物に支配されるなんて、馬鹿げたことだよミラ。」

「何が起こるかかわからないってことさ。薔薇。」

ミラが、薔薇の腰にドライバーとして巻き付く。

「ナイトメアに打ち勝つために、鍛えぬくよ!」

『ガーデンング! ライディング!』

新しい変身アイテムのサウンドを鳴らし、ドライバーにセットする。当然、聞いたことのない音楽が流れる。

「僕の知らない機能だ。」

「変身!」

瞬間、薔薇の周りが花畑のような、美しい花がいくつも咲いている空間になる。

『どこまでも広がる花畑! みなぎるエナジー! ソレイユ・ガーデン!! ボクサイキョー!』

音声とともに、たくさんの花が体にまとわりつき、スーツとしてくっ付いた。それが、仮面ライダーソレイユ・ガーデンだ。赤を基調としたスーツで、いろいろな色の花が一つになった鎧が胸のところについている。そして手元にはチェーンソーのような紫色の武器がある。

勿論、見たことのないライダーを見つけたガムフラワーは、そこに襲い掛かってくる。

ソレイユは、武器を腰につけ、素手で攻撃する。なんとブラックローズの通常攻撃があまり効かなかったガムフラワーが、一撃で大ダメージを負うようになっていたのだ。

「武器も使ってみよう！」

ソレイユは腰の武器を手に取り、電源を入れる。

『ボクノブレイカー！』

ボクノブレイカーと名乗った武器には挿入口があり、そこにエナジーが二つ入れられるようになっていいる。

『バラ！ パンジー！』

「みんなまとめて！」『ボクノ・ダブル・ブレイク！』

ソレイユがボクノブレイカーを振り回すと、巨大化したチェーンソーの幻影が敵を攻撃し一掃するのだった。

「まだ残ってるの、敵の多さが出てるね。ミラ、行けるよね？」「うん！」

『ガーデニング・フィニッシュ！』

地面がまた、花畑になる。その花はフラワーの動きをとめて、そこに、ソレイユがライダーキックを入れるのだった。

辺りは大爆発をした。ソレイユはきれいに着地をし、変身を解除する。

「いやあー、こんな強い力だとは思わなかったよ！」

「ナイトメアも僕たちが倒せちゃうかもね！」

そう彼女らが喜んでいてみると、後ろから、拍手が聞こえてきた。

「やっぱり仮面ライダーは別格に格好いいなあ。俺はそんな仮面ライダーと戦うことができとつても嬉しいよ。」

声の主は、ナイトメアだった。

ミラが、薔薇の前に出て威嚇をするが、ナイトメアはそれを気にしない。

「ミラ、俺は悲しいよ。昔はあんなに人間を嫌っていたのに。」

ミラは話の続きが気になって、立てていた爪をしまった。

「僕が人間を嫌っていたって、どういふことだ!!」

ナイトメアはにやりと笑い言う。

「まだわからないのか。お前とお前の家族は、『こつち側の者』だったんだよ。」

ミラは単語の意味を理解し、驚愕する。

「そんなはずはない！僕は人間が大好きだし、記憶にもない！」

「お前の記憶は俺が変えた。戻すこともできる。はあっ!!」

ナイトメアがミラの頭を手をかざすと、ミラはとても苦しんだ表情をしてもがく。

十秒ほどでその苦しみは止まったようだが、ミラは放心状態になっている。

「どうやら、勝負あったようだな。こい！グリーンウッド！」

ナイトメアがそういつてドライバーを取ると、ミラがナイトメアの腰にドライバーとして巻き付く。

「さすがに生身の人間を殺すのはよくないからなあ。」

ナイトメアは薔薇に近づき腰にドライバーを当てた。すると、ナイトメアのフラワードライバーが薔薇の腰に巻き付いたのだった。

『バラ！』

「あ、そうそう。隠れてソレイユについていったジャンヌなんだけど。」

ナイトメアがそういうと、後ろからジャンヌがゆつくりと歩いてくる。腰には、ナイトメアドライバーがついているのだった。

「そろそろ時間だ。変身。」

『激しく燃える、情熱の赤！バラ！』

愛のライダー

ナイトメアが変身した仮面ライダーソレイユは、明らかに邪悪なオーラを放っている。

「なんでミラとジャンヌがお前のほうにつくんだ!!」

薔薇が怒ると、ナイトメアが答える。

「当たり前だろ。俺はフラーワの味方だ。お前ら人間に洗脳されているフラーワを救ってるんだよ。」

もともと、ミラには人間の生態を調査してもらっていたんだよ。だがミラは人間を知りすぎた。だからいつそ記憶を変えて人間のほうへスパイとして一緒に生活させたんだ。ミラに人間態があるのはなんでか知ってるか？こいつが人間の体を奪ったからだよ。もともとフラーワに人間態はない。お前はそんな奴と生活し戦ってたんだよ。」

ナイトメアはドライバーのミラを触りながら言った。

「ミラ：：私はあなたを愛している：：たとえばスパイで人殺しだったとしても：：変身！」

『冠と盾と剣！ 赤い戦士！ チューリップ！』

「最終フォームに変身できないと悟ったか。それならこっちのもんだ！」

ソレイユは剣で攻撃するが、ナイトメアも薔薇の腕で防御している。

「強化フォームなんか頼りすぎてからそうなるんだよ！はあ！」

薔薇はナイトメアに腹をパンチされ飛ばされる。

「うう… チエンジエナジー！」

『耐寒のコモンフラワー…その顔は何を言う？ パンジー！』『パンジー・フィンニッシュ！』

薔薇とナイトメアの周りには大量の雪が出て、ナイトメアを固める。そして薔薇はライダーキツクの体勢になるが、キツクは失敗したのだった。

「うわあ！」

何者かにキツクを入れられ、薔薇は落下した。

「ジャンヌまで…」

キツクを入れたのは怪人態のジャンヌだった。

「…」

ジャンヌは何もしやべらず、ただドライバーを巻いているだけだった。

「やれ。」

ナイトメアがそうとうとジャンヌはヒマワリのエナジーを鳴らし、ナイトメアフラ

ワにセツトする。

「変身。」

『悪夢！悪夢！メア・ヒマワリ！』

仮面ライダーサン・ナイトメアフォームが誕生したのだった。

「二対一だ。お前は俺に勝てない。」

ナイトメアとサンは一斉に薔薇を攻撃する。薔薇は二人同時には抵抗できず、一方的に攻撃を受けているだけの状態だ。

「ミラ！ジャンヌ！！目を覚まして！」

ソレイユの訴えは誰も気にしていない。

「俺達もいるよ！ソレイユ！」

『啾啾！啾啾！ピラニア・カニバル！』

『世界に桜を咲かせる者！仮面ライダーサクラ・マウンテン！！フーラーワー！！』

二人、ライダーが現れた。これで三対二。ソレイユたちに勝ち星が見えたのだった。

「ジャンヌ！目を覚ませ！」

カニバルはジャンヌを攻撃しながら言う。

「なんで！なんで！」

『ピラニアスクラッパー』

カニバルの手元にはスコップの形をした武器が現れる。

「ごめんジャンヌ！はあつ！」

カニバルは武器のレバーを引き、攻撃する。

『ピラニア・スクラップバン！』

ジャンヌの体を強くたたくと、彼女は転がりながら変身を解除する。

「はっ！私は一体…！」

「取り戻したんだ！やった！ナイトメアからミラを取り返すよ！」

ナイトメアは「くそっ」と眩き、薔薇のホルダーからソレイユガーデンのエネルギーを奪い、セットする。

『ガーデニング！ライディング！』

「素人が使つてあれだけ強かったんだ。俺が使えばもつと強いはずだ。変身。」

「やめろ!!」

『どこまでも広がる花畑！みなぎるエネルギー！ソレイユ・ガーデ…』

音は、そこで止まってしまった。

そこにいるすべての生物が驚き戸惑った。

「なんだ…？」

ナイトメアがそういうと、ドライバーは彼の腰から外れ、怪人態のミラが現れた。

「ナイトメア。僕と薔薇はそう簡単に離れない。それはお前が教えてくれたはずだ。」

ミラはナイトメアから教えられた愛についてを語り上げた。そして、

「僕は地球、そして人間を愛している！それを破壊するお前を許さない！」

叫ぶとナイトメアを殴った。

「あまり調子に乗るなよ…うわあっ!!」

ナイトメアは悲鳴を上げた。

『マウンテン・スプラッシュユー!』

その音声は裂羅の武器「マウンテンスパークリング」の音声だった。ハンマー型のそれは油断したナイトメアを脳天からダメージを与えたのだった。

そのすきに薔薇はフラーワドライバーを取りジャンヌに渡し、ミラを腰に巻いた。

『ガーデニング!ライディング!』

「私は愛のライダー!ソレイユだ!」

『どこまでも広がる花畑!みなぎるエナジー!ソレイユ・ガーデン!!ボクサイキョー!』

『ボクノブレイカー!』『バラ!』『ボクノ・シングル・ブレイク!』

「たあー!ー!!」

ナイトメアはソレイユの攻撃を直に受けて、その場に倒れた。

「俺が…負けるはずは…ない…」

場に沈黙が走る。

「ナイトメアが死んだ…?」

誰かが言うが、言い終わる前にエクスポーターからライダーが現れる。

「完全に殺さなければ!はあつ!」

それはコマントの声で、彼は倒れたナイトメアの胸をナイフで刺した。

緑色の血液が流れる。

「コマント?」

「レグルスには謝らなければならない。俺達はナイトメアを暗殺するために極秘で組織に忍び込んでいた。だが今は俺一人：ついに、この瞬間、ナイトメアを殺せた。本当に済まない。俺はもう生きた。はやくあいづらに会いたい。ナイトメアは永遠に、この世界から破滅しないだろう。俺の力を思い知るがいい。」

コマントは喋っていたが、いきなり様子がおかしくなった。

『ナイトメアドライバー』

「俺は死なない。愛つてものを体験しちまったからなあ。」

『パーフェクトエンペラー!』

死んだはずのナイトメアは今度はコマントに乗り移り、見たことのないエナジーを鳴らす。

「これは俺の仲間、ひなた、キラ、ハリーのエナジーをすべて合わせたものだ。これでこの世界をぶっ壊し、愛など存在しない世界にしてやる!!」

『悪夢！帝王！エンペラー・ナイトメア!!』

コマントの姿は仮面ライダーとは思えない姿に変身した。

「俺が最恐の仮面ライダー。エンペラー・ナイトメアだ。」

なかなか粋の計らい

「それが本当のお前の姿か!!」

エンペラー・ナイトメアは凶悪なマスク、半分裂けたような体、胸にある大きな眼球、赤く血のような色の翼が特徴的である。

「地球ではいい生活ができると思っただがなあ……」

ナイトメアはネオフレーザーをエクスポーターから大量に出し、仮面ライダーを襲わせました。そして自らをエクスポーターでワープさせ、フレーザー世界にある城の頂上に着陸させました。城にはバリアを張りワープできないようにしたのだった。

「ナイトメア!どこへ行った!!」

裂羅が闘いながら言うが、返事はない。

「多分、あそこの中じゃないかな。」

レグルスが指をさした先には、大きなエクスポーターが壁のように張つてある。そこがつながっているのはナイトメアの城の荒れ果てた城下町だった。

「世界が終わる前にナイトメアを止めよう!」

「当たり前だよ。あいつなんか世界を終わらせたりしない。」

ソレイユたちはネオフレーザーをある程度倒すと、残りをジャンヌに任せてエクスポーターに向かった。ジャンヌは裂羅ドライブフォームに変身し、ネオフレーザーと戦っている。

三人は城下町を抜け、城の前にたどり着いたのだった。

「ここがナイトメアの城..」

「誠実なる青王子のことは大違いだね。」

「全員で絶対、あいつを倒す。一人抜けてたりしても意味がねえ。全員で、だ。」

目の前には大きな柵があるが、そこでナイトメアの声が聞こえてくる。

「世界が終わる日を目の当たりにしたくてここに来たか。指紋認証で仮面ライダー三人だとわかったら開けてやろう。」

柵の中からタツチパネルが出てくる。彼らは変身を解除して普通に指を触れる。指紋認証は成功し、大きな柵が大きな音ですべて開く。

「さあ来い。楽しませてやるよ。」

中に入ると薄暗い空間だった。パイプなどがむき出しで、いかにも悪の組織という感じだ。

するといきなり、陰が三人の前に飛び出した。

「なんだ!？」

それは彼ら、特にミラがよく見たことのある姿だった。

「久しぶり、ミラ。そしてお世話になってる皆さん。僕だよ、デイフダグリーンウッド。今日は君たちを倒すために来たんだ。というか、そのただけに復活させられた感じ？まあ、君たちに対する情なんかないから。容赦なくいきまーす！」

デイフダグリーンウッド。かつて偽物のソレイユとしてソレイユに濡れ衣を着せ、最後は殺害され死んだはずのミラの兄だ。

「兄さん！本当は人間が好きなんですよ!?僕知ってるよ！」

「あ、ベルトがなんか言ってるー。まいつか。へんしくん。」

『二つの色は 危険か！やりすぎか！ コットンローズver. DANGER』

変身したデイフダは早速襲い掛かる。それに対し、ソレイユたちも変身する。

『ガーデニング！ライディング！』『マウンテンフラワー！桜！』『ナイトメアフラワー！カニバルフラワー！』

三人はドライバーにエナジーをセットし、変身する。

『どこまでも広がる花畑！みなぎるエナジー！ソレイユ・ガーデン!!ボクサイキョー！』

『世界に桜を咲かせる者！仮面ライダー・サクラ・マウンテン!!フリーワァー!!』

『啖碎！啖碎！ピラニア・カニバル！』

同時に変身した彼らはソレイユ中心にデイフダを攻撃する。デイフダもカウンター

をするが、三人同時に相手はできないようだ。

「三人同時でも勝てないことはない！」

彼はそう言つてエナジーを抜き差しして音声を鳴らす。

『コットンローズ・フィンニッシュ！』

「デイフダ。ミラはあなたを信じてた。だけどあなたが裏切るなら、ミラもこの選択が正しいつていうと思う。」『ガーデニング・フィンニッシュ！』

ソレイユはデイフダをライダーキックでたたき落とす、そのまま着陸した。

叩き落とされたデイフダは変身を解除せず、消滅した。ソレイユ一行はそのまま階段で登つていった。

順調かと思いきや、彼らの考えは甘かった。ナイトメアはフラーワ世界から地球を破壊している。このペースでいくとナイトメアの地球破壊を止められなくなってしまうのだ。時間がない中考えたのは、

「頂上で会おう。」

と、一人が部屋で戦つてる間にほかが進んでいくということだった。

次の部屋には、仮面ライダーコマントが四体いた。

「ここは俺が行くよ。かかつてきな！」

コマント達は一斉にカニバルに襲い掛かる。だがカニバルも強い。カニバルはコマ

ント達の攻撃を一つ一つ落ち着いてよけて、カウンターを与えている。余裕があるように「先に行つてなよ!」と一言添えた。

次の部屋には仮面ライダーバンクシーがいた。彼は攻撃事態は弱いが、その強靱な体力で全然ダメージが入らないのだった。そこは裂羅が担当した。

「お前は俺が相手だ。」

「桜ごときが俺に勝てると思うな。」

バンクシーは裂羅に殴りかかるが、裂羅はそれをよける。そして言う。

「お前はなぜ裏切つたナイトメアの味方をしてる?」

カニバルと裂羅が敵と戦っているとき、ソレイユは螺旋階段に出てくるフラワー達を倒して上層部まで進んでいった。

「薔薇、もうすぐ最上階だ… 僕たちは… 世界を守るんだ!」

「うん! ナイトメアなんかには負けない!」

そう話していると、彼女は誰かにぶつかった。フラワーかと思ひ武器を振るとすごい速さで体を殴られた。

「普通のフラワーじゃないのか…!!」

ソレイユは姿を見て驚いた。

「普通のフラワーには見えないよね…」

ソレイユが驚いていると、彼女はさらに攻撃してきたのだった。

「あたしはサン。君たちの相手になるつもりはない。」

「？」

ソレイユには彼女の言っていることがわからない。

「あたしは、ナイトメアにずっと騙されてきた。今まであたしがしてきたことはここで謝る。だからどうか、あたしといっしょにナイトメアを殺させて！」

彼女は頭を下げ、武器を捨てる。

「薔薇、どうする？」

薔薇はミラの質問に少し考えて答える。

「……わかった。一緒に行こう。」

「ありがとう！これが本当の人間の“やさしさ”かあ!!」

彼女は調子がよくなり屋上へ進んでいく。ついに屋上の扉の前についた。

「ここで、裂羅達を待つんだ。『屋上で会おう』って約束したから。」

ソレイユは手を止めそこへ座る。

「そうなんだ。じゃああたしも待っちゃおうかな。」

「ひなたがいて驚かないかな！」

「そうかもね〜！」

彼女らは笑いあいながら、つかの間の楽しみに浸っていた。

物語のおしまい

「君たちはやっぱり俺の部下レベルだねえ。」

レグルスはコマント達の攻撃を傷一つ残さずよけ、カウンターを仕掛けている。もう笑いそうである。

「油断させていく作戦なのかな？それなら油断させすぎだけども。」

レグルスは植物を生やすという攻撃を一切使わず、キックやパンチだけでコマント達を一掃した。

「昔の仲間だからって俺は容赦しないよ。」

コマント達は階段を駆けていくレグルスの後ろで全員消滅した。

一方、裂羅はかなりてこずっていた。バンクシーが裂羅を縛り上げて、身動きが取れない状態で力強い攻撃をしてくるのだ。その時の声は狂気じみていた。

「なぜナイトメアの味方かを聞いたな。理由は一つ。俺は強いものの味方だからだよ！お前みたいな弱い人間は今みたいに強いやつに負けるんだ！はっはっはっはっはっは！！！」

バンクシーはその間も裂羅を殴っていた。

「人間が弱いだと？」

裂羅が、訊く。

「ああ。どうした？反抗しなくなったか？」

「もちろんだ……俺達人間はなア!!少なくとも強いやつのみ方にしかなれないお前よ
りかは強いんだよ!!」

ペリペリと、裂羅を縛っている線が破れていく。

「なんだと……？」

「うおおおおおおおおお!!」

そしてついに裂羅は解放され、武器を手にする。

『マウンテンスパークリンガー!』『マウンテン・スプラッシュユ!』

彼は見えないほどに素速く移動し、バンクシーの脳天に一撃を入れた。

爆発とともに、バンクシーは消滅した。

レグルスと裂羅は、螺旋階段を上っているときにばったり会った。そして、屋上の扉の前で変身を解除して話している薔薇とひなた、その横で警備をしているミラを見た。

裂羅はひなたに近づいて来るや否や、マウンテンスパークリンガーの先のとがったところを彼女に突き付けた。

「いったいなぜ敵なはずのお前がいる。」

「待つて。」と薔薇が説明しようとする、自動的に扉が開いた。

扉の向こうには、エンペラー・ナイトメアが一人、玉座のような椅子に座っていた。「待ちくたびれたよ。そこで一体なにをしてるんだ？」

彼は胸にある大きな眼球をぐるりと回した。

「ほおう…… それじゃ最後の決着をつけようか。手加減はナシだ。」

ひなた、薔薇はドライバーを巻く。

「変身！」

『太陽に向かう大きなフェイス！ ヒマワリ！ヒマワリ！』『どこまでも広がる花畑！みなぎるエナジー！ソレイユ・ガーデン!!ボクサイキョー!』

ナイトメアはネオフラーワを出現させ、そのあと裂羅のほうへ向かった。

そして、「ふんー」と腹を殴ると、そのノックバックで裂羅は壁へ激突した。

「全然違う……!」

彼はすぐに壁からナイトメアのほうへとびかかる。そして、『マウンテン・スプラッシュユ!』と音声を鳴らし攻撃を仕掛ける。

角度やら距離やらは完璧だった。

が、何かが足りなかった。

なんと、スパークリンガー自体がナイトメアの一撃によって破壊されてしまったのだ。それに驚き一瞬の隙を見せた裂羅は、ナイトメアに連続で攻撃され、変身解除すれ

すれまでダメージを受けた。

「裂羅!!」

ソレイユの声が聞こえるが、彼の意識は朦朧としていた。

「お前ごときが……人間に勝てると思うな……!」

裂羅は震えながら立ち上がる。

が、腹を刺されたのだ。

「お前……」

彼の腹を刺したのはスコップの形をした武器だった。

「ナイトメア。俺はあなたの味方だ。」

そういったのはカニバルだった。

「ふははははは!!はははははは!!」

ナイトメアの声は、屋上、いや、フラワー世界の全土に響き渡った。

「ソレイユ!お前の味方はもういない!」

ソレイユは戦いながら叫ぶ。

「お前は、絶対許さない!!」

すると、後ろにいたサンがナイトメアにとびかかる。

「お前はあたしが止める!」

サンは自前の剣でナイトメアの腹を挿そうとする。

が、彼女は地面から生えてきた食虫植物に噛みつかれる。

サンもそれに抵抗する。彼女の得意な剣術で見事植物の首を切り落とした。

「やった・！」

が、それは一瞬だった。

ピラニア・カニバルは無限に植物を生やせる。それを考えていなかった。

彼女は左右両方から噛みつかれ引つ張られ、必死で抵抗するも及ばず、体の上下が切り離されてしまった。

「うわああああああああああああああああああああああああああああ!!」

彼女は人間だった。床には赤色の血液が飛び散り、ソレイユは今にも吐きそうだった。

やがてひなたの体は消滅し、それと同時にネオフラワーを倒し終えたソレイユがカニバルと戦う。

「はあっ!!おまえも!!てきだったのか!!」

「騙してごめんね!」

カニバルとソレイユはぶつかり合い、そこにあつた装置に衝突した。

ナイトメアはそれを見て「離れる!」と怒鳴る。

そしてカニバルはソレイユのボクノブレイカーを奪い、その装置に突き刺したのだ。装置からはガスのような色付きの気体が流れ出る。それはすべてカニバルにかかっている。

「お前……！」

ナイトメアとソレイユは両者とも戸惑っている。

「俺にできるのはここまでだよ。ソレイユ、がんばって。」

カニバルは震える声でそういうと、その場に倒れこみ、動かなくなる。

「カニバル……？」

「これで一対一かぁ。カニバルがなんで死んだか教えてやろう。その装置は地球エネルギーをかなりの濃度で保管する装置だ。それを一気に浴びたから死んだんだよ。」

結局、カニバルは味方だった。地球エネルギーが戻っていつているという事は、いずれ地球はもとに戻る。

「だけど私はお前を倒す。仲間たちの死を無駄にしないためにも!!」

「上等だ。かかってこい。」

「はあああああ!!」

彼らは互い、相手にパンチを食らわせる。

「愚かな者が帝王に刃向かって殺される。それがこの人間社会じゃないのか？」

それにソレイユはすぐに答える。

「だが悪事を働いたものは排除される！」

「それが悪事か決めるのは強いやつなんだよ！」

二人は闘いながら言いあつた。

「そうやって強さばかり気にしてるからひなたに裏切られたんだよ。」

ソレイユが勢いでそういうと、ナイトメアの動きが止まった。

彼は小さな声で答える。

「お前に俺の気持ちが変わると思うな。」

ナイトメアはそういつて刺さっているボクノブレイカーを取り、ソレイユのドライバーに向かって一突きする。

彼女は絶体絶命だと思った。だが気づくと間には女性が入っていた。女性は口から血を流している。

「ああ、なかなか…… きくね…… 少し…… 遅かったかも…… しれない…… な……」

それによりソレイユの仲間は本当にいなくなつた。

彼女は無言でドライバーに手を当て、必殺技を構える。

『ガーデニング・フィニッシュ！』

飛び上がり、キックを入れるだけの、いつもと変わらないライダーキック。

ナイトメアも、それに対抗しようと必殺技を構えようとする。が、間に合わない。ナイトメアの体にソレイユが刺さる。

彼は一瞬驚くがすぐに行動に移る。仮面ライダーソレイユの地球エネルギーを吸い取り地球に戻して、ソレイユ自体の力をなくそうとするのだった。

ナイトメアの体力とソレイユの力、どちらがなくなるかの勝負だった。

だが、彼はソレイユの勝ちを確信した。

彼は後ろに気配を感じてそつちを見ると、怪人態のミラもキックをしてるのだった。

それがわかったからだ。

しかし変だ。音がない。

「

彼は喋ろうとしたが、何も聞こえない。次の瞬間、ナイトメアの体は爆ぜた。

フラーワ世界では巨大な爆発がムウエンで起きたというニュースが四六時中流れていた。

悪も正義もないこの世界は、平和に帰った。

街では商人が果物を売り、家では赤子が泣いている。

ついでに、新しい王が生まれた。

しかしその王はナイトメアや青の王子などとは違い武力で治めず、すべて自身の演説

で統制していた。

数か月もたつと、街などもかなり栄えてきたのだった。

少なくとも、この地であつて地球人と戦つてきたことがわからないぐらいに。

最終回 薔薇のその後―第0話 OPEN

目が覚めると、私は自室のベッドの上に横になっていた。
長い夢を見ていた気分だ。

まさか、自分が世界を救うなんて思ってもいなかったから。

私は静かに窓を開けて、深呼吸をした。

平和な地球。

花の化け物などいない、普段の日本。

今まで私がやってきたことが、嘘だったような。

もしかしたら全部本当に夢だったんじゃないかってくらい、平和だ。

そうだ。私は作文用紙を闇雲に開いた。

世界を救ったのが仮面ライダーだということはみんな知っているだろう。

しかし、私がやりましたと大々的に言うのは、私の美学に反する。

仮面ライダーの小説をかいてやるのだ。

私はペンをとり、題名を書き始める。

SOLEIL
く咲き誇る太陽く

ナイトメア城の崩壊により地球エネルギーがもとに戻り、人々の体には生気が、浮遊島となっていた埼玉県なども何もなかったかのように元にもどった。

ナイトメアの存在は人々に知れ渡っていたが、薔薇の存在は知れ渡ってはいなかった。

新聞には写真のないまま、「謎の仮面ライダーに救われた」などが太文字で書かれている。

地球と日本は完璧に元の平和にもどったのだった。

一方、フリーワの世界は未だに復旧作業が続いているのだった。日本とは違い、ただ爆発が起こっただけなので、自動復活などの効果もなかったのだ。

ミラは、今、ムウエンの防衛大臣として国を支えている。

もう、地球とフリーワ世界は行き来できない。ミラが考えて考えて、地球とつながるエクスポーターを消滅させたのだ。

彼は爆発の勢いで薔薇が気絶した時、薔薇の家まで戻り変身を解除し、そのままフリーワ世界に戻り、地球エネルギーが全部地球に戻ったことを確認し、エクスポーター

を消滅させた。

仮面ライダーソレイユは、もう存在する意味がなくなったのだ。それを思っただけでミラはそうしたのであった。

これにて、仮面ライダーソレイユの物語は、本当に終了である。



「いらつしやいませー。」

普通の女性、澤谷薔薇は、ファミレスでアルバイトをしていた。

すると、見たことのある顔の客が入ってきた。

「何名様でしょうか。」

客は答える。

「二名だよ。ソレイユくん。」

薔薇はハツとして尋ねる。

「どうしてそれを…」

客は特殊なベルトをちらりと見せて、中性的なイントネーションでしゃべる。

「私だよ。Mさ。いつか言ったのを覚えているかい？私の友達を連れてきたのさ。」

Mと名乗る男性はもう一人の男性に目配せし、挨拶をさせる。

もう一人の男性はスーツの内ポケットからベルトのようなものを出す。

「ちよちよちよ、とりあえずお席へ……」

薔薇は彼らを席へ案内し、ちよちよちよ退勤時間になったので支度を済ませ、その席に座る。

「私は…… まあTでも呼んでおけ。」

Tは先ほど出したベルトをテーブルの上に置く。

「これは……？」

薔薇が問うと、Tは解説する。

「これは私たちの世界のライダーシステムで変身させる『Zドライバー』だ。」

Tの話にMが付け加える。

「私たちの世界というのは、君やナイトメアが存在していない世界……つまり今いる世界とは別の世界のことさ。」

なるほど、とソレイユはうなずく。

「それで、どうして私のところに？」

その質問の答えは即答だった。

「最低限、仮面ライダーだった君と戦えるように、と思つてね。」

薔薇はその言葉に困惑する。

「どういふこと？」

そういうおうとした薔薇の前には一瞬で、見たことのない仮面ライダーが現れた。

Mがすかさず、薔薇の腰にベルトを巻き、薔薇の手に花の形の機械を入れる。

「そういうことか…… わかった！ 変身！」

かつてのように変身したソレイユは、ライダーとつかみ合いになりながらファミレスの窓を突き破り、近くの公園へ飛んで行った。

ソレイユとライダーは全力で戦う。

「この世界にかつて仮面ライダーであったという記憶がある人間はおそらくお前だけだ。Zのスーツに学習させるついでに、ライダーがいた歴史も消す！」

ライダーはソレイユを蹴り飛ばす。しかし、ソレイユも伊達に仮面ライダーをやつたわけではない。

すぐに立ち上がり、ライダーキックの体勢に入る。

Mは興奮して声を上げる。

「ドライバー完全コピーってスゲー！」

そしてソレイユはそのライダーにキックを入れる。

が、それは失敗に終わった。

ソレイユの横から仮面ライダーMが攻撃し、ソレイユはそのまま地面に墜落したのだった。

「お前ら…… 卑怯すぎる！」

変身を解除した薔薇はボロボロになりながら言う。

「ナイトメアに教わらなかつたのか？これが戦いだ。」

そういつてライダーは薔薇に近づく。しかしそこで、ライダーの変身が解除された。

「何？」

Mがライダーのドライバーを引きはがしたのだった。

「君のじゃないんだよ。あんまり調子に乗ってるよ君が消されるよ。」

Mはカバンから銃を取り出す。

「私の世界では銃が普通に使えるんだよ。」

そう薔薇にいつて、MはTの胸に向かって発砲した。

その時点で薔薇も力尽きた。

「私が新しい物語の語り手だ。」

Mは、Zドライバーを片手に元の世界へ戻っていつた。